

國立臺灣大學文學院日本語文學研究所



碩士論文

Department of Japanese Language and Literature

College of Liberal Arts

National Taiwan University

Master Thesis

「日本人」に造形させられた台湾人
—太平洋戦争末期における「国策文学」の考察—

The Japanized Taiwanese: A Study on
Government Controlled Literature in the late WWII Period

侯紀安

Chi-An Hou

指導教授：陳明姿 博士

Advisor: Ming-Tsu Chen, Ph.D.

中華民國 104 年 6 月

June 2015

謝辭



台灣奔騰的山、海、與河。停駐在血管、脈絡、神經深處的記憶。

驀然回神，才發現自己竟把台大當作醫學院在念，一待就是八年。兩紙畢業證書掂在手上，輕的彷彿不經意，卻重的佔去人生的三分之一。在學校的漫長時間，感謝指導老師陳明姿教授，頑抗學生如我時常摸不著方向，萬分感謝老師不吝給予許多機會，在關鍵時刻指出弊病所在，讓我終能完成這個重要階段。

謝謝如春風溫煦般的太田登教授，啟發我對日文閱讀及解讀文本的樂趣，並持續鼓勵和給我最大的協助。由衷感謝兩位口試委員，黃翠娥教授和吳佩珍教授，沒有教授們的犀利指點，這份論文就失去了向上進步的機會。十分感謝日文系教授們和系辦的長期照顧，感謝法律系教給我冷靜又熱情的腦袋，也謝謝台文所和台大眾多族繁不及備載的課程裡所累積的腦力激盪。

以及我的心靈支柱，相伴四年的洞友兼戰友—從共同樂趣一路戰到太陽花，最終峰迴路轉回歸論文戰場。謝謝薇婷/妹兒、殷婕/禽獸、品宜/貴貴、鄒評/師兄、婧芳/芳芳、勤文/文文、子芸/法納、伊涵/阿獎、愛珊、育青，特別致謝雯琪協助校對英文摘要，以及廷瑋/女帝，感謝她溫柔並堅定的一雙手，指引我度過幽谷重新發掘陽光。也謝謝研究所的佳辰學姊、瑋婷、宜欣、和大前輩辻桑。

謝謝兩位摯愛的親友。香港的君莉/阿月，地理條件無法阻擋我們相知相惜，感謝她始終大力鞭策我不能半途而廢。以及思瑾/兔兔，許多時刻包容我天馬行空畫著未來的大餅，讓我繼續勇敢的向前衝刺。

一個像風也像山的人。他的想法、文字和照片重新召回深藏心中對於台灣的強烈眷戀及想像。謝謝鈞量/黑羊，最後時刻那些意識和攝影上的撞擊，毋寧是值得紀念的陪伴。謝謝明謹/左盃，夢寐以求的兄長，各種方面讓我更自信堅強。

最後也最重要的，作為根深蒂固的文學院學生，從來不欠對於世界的幻想力，但卻欠缺務實的經濟力。非常感謝爸媽的栽培，還有小弟吐槽與體貼兼容並蓄的支持。謝謝遠在美國的貴英表姊，英文寫成的祝福沒被語言力阻隔，仍然很溫暖。

因緣際會，從第一天遇見這些存在於土地上七十年的故事起，那些重新複製、影印在新開本上的印刷字體，難讀、難以辨識、不真的很好理解。擔在肩膀上，很重。卻讓我飛翔。

摘要



西元 1895 年，台灣成為日本帝國第一個殖民地。自此之後的五十年，台灣與日本共有一段歷史經驗。殖民統治後期，從日中戰爭到太平洋戰爭，時局的動盪及隨之而來陷入泥淖的戰局，迫使當時的台灣住民接受不平等待遇之際，面對另一項急迫的任務，亦即成為「皇國」奉獻心力的「日本人」。縱使戰爭的傷痛已逐漸消逝在歷史的洪流之中，身為後人，面對歷史，追求正義，前提在於建立完整而客觀的史觀。為了從不同的角度理解「台灣人」被形塑為「日本人」的文學形象，本論文以太平洋戰爭末期殊為流行的國策文學為中心進行考察。

國策文學的範疇，特指符合官方政策理念，或直接由政府下令撰寫的作品。作品的選定，首先劃分為「本島人」、「在台日本人」和「日本人」等分類標準。其中，並以《決戰台灣小說集》、丸井妙子的《戰事的背後》、丹羽文雄的《台灣的氣息》及佐多稻子的《台灣之旅》作為本次研究的分析重心。透過小說及隨筆兼具的文學類型、兩種民族，匯聚三種不同視角的作家觀點，觀察作家在藝術與政策間如何取得平衡，以及戰爭時期作家如何呈現眼中接受皇民化的台灣人樣貌。

藉由上述分析，推知兩點。第一、血緣本身即具有強烈的國家認同意涵，但地理空間的移動或生活環境的薰陶，也影響作者本身在刻劃角色時的態度。本論文所選之作品中，作者現身文本的比例較高，其意志也直接影響文本內容。因此，作者介入作品的象徵，可視為內文中的「實像」；而其所創造之「台灣人」的角色，則可視為「虛像」。第二、在構築台灣人要如何成為「理想的」日本人形象時，筆者試圖將其分為精神世界及肉體鍛鍊等兩種方法。作者所選擇的切入點，也會反映其對於「台灣人」的「日本人化」此一問題的理解。

關鍵字：國策文學、殖民地文學、日治時期、太平洋戰爭、皇民化、國家認同、文學形象

要旨



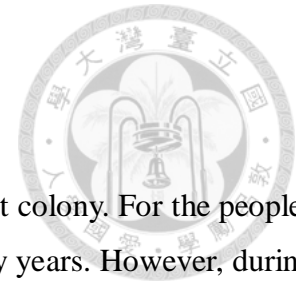
1895（明治28）年にて、台湾は日本帝国の初の植民地となり、母国の日本とともに歴史経験を共有している。日中戦争から太平洋戦争に至るまで、台湾の住民は差別待遇の問題を直面しざるを得なかった。それに、時勢の混乱と戦局の泥沼化によって、台湾人は新たな任務を課せられ、すなわち「皇民」になり「皇国」のために戦争を協力する。現在、戦争がもたらした創傷は時間の流れに従って癒していく。植民地歴史の後継者の一人として、正義を求める前提は客観的な史観を樹立することだと考える。それゆえ、異なる視点を導入して「台湾人」が「日本人」に造形させられたイメージを研究するために、本論文は太平洋戦争末期に流行っていた「国策文学」を中心として考察をはじめると。

国策文学の作品を言えば、当局の政策や理念を符合するもの、あるいは政府の命令によるものなどがある。作品を選ぶ標準が、「本島人」「在台日本人」と「内地人」という三つのカテゴリの中に決定される。具体的には『決戦台湾小説集』、丸井妙子『た、かひの蔭に』、丹羽文雄『台湾の息吹』と佐多稲子『台湾の旅』として研究の重点を置く。小説と随筆を通し、二つの民族から三つの視点を集め、芸術と政策との間に文学者がどうやってバランスをとるかを観察したい。また、戦争期において、作家の目に映る皇民化を受けていた台湾人の様相をどう表現するかをも研究する。

上述の分析により、二点目の結論を導き出す。その一、文学者の血縁は国家への共感と強い繋がりが存在するが、作者がキャラクターを描写している態度は、地理的空間中の移動や生活環境の要件に影響される。本論文で選ばれる作品で、作者がテキストの中に登場する場合が少なくないと思うので、作者が介入する象徴は作品の「実像」と見なし、創造される「台湾人キャラクター」は「虚像」だと推定する。その二、作品の中にどうやって台湾人を「理想的」な日本人として構築されるかを検討するうちに、筆者は「内面的精神世界」と「外側の肉体改造」の二種の方法をまとめる。文学者が決める作法は、実に台湾人の「日本人化」という問題に対する認識を反映すると言えよう。

キーワード：国策文学、植民地文学、日本統治期、太平洋戦争、皇民化、アイデンティティ認識、人物造型

Abstract



In 1945, Taiwan became part of the Empire of Great Japan as its first colony. For the people in the mother country and colony, they'd shared a common history for fifty years. However, during the final period of Japanese rule in 1937, Taiwan began with the eruption of the Second Sino-Japanese War. Until the end of the Pacific War, the Taiwanese people were treated unjustly as the Colonial Government aimed at Japanizing Taiwanese society. They've tried to build the "Japanese spirit", the Japanese identity, and encouraged participation in the war effort. Even though the pain of war had been recorded in history, as one of colonial's posterity, the pursuit of justice was our mission; and the premise was to build a complete and objective conception of history. In order to understand how the Taiwanese people were molded into Japanese likeness, this thesis focuses on the "Government Controlled Literature" which was popular during the later phase of the Pacific War.

Whether the works conformed to the nation's policy or were written from the order of official authorities, they were a part of the Government Controlled Literature. The standards which I'd chose for the works of Government Controlled Literature divides the authors into three categories. These are "Japanese", "The Japanese who lived in Taiwan", and "Taiwanese". These works became known as: *The decisive battle in Taiwan: collection of short stories*, *Behind the war* by Marui Taeko, *The breath of Taiwan* by Niwa Fumio, and *The journey in Taiwan* by Sata Ineko. By reading and researching through novels, essays, and three additional perspectives of various authors, we could observe how these authors maintained the balance between arts and policies. Furthermore, we could explore how they've depicted the Taiwanese confrontation during the "Kōminka movement".

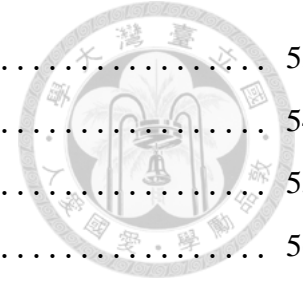
According to the analysis, at first, blood relation was strongly connected to national identity. But the movements in geographical space and different living environment became the overriding influences in these authors' description of their characters. Therefore, the symbolisms used by these authors in their own works could be thought of as "real image". Their created characters could be deemed as "virtual image". Second, when analyzing authors in how to create the ideal Japanized Taiwanese, I've collected evidence based on two methods. The first is the analysis of the mind, and the second is physical reformation. After all, the methodologies the authors used in their work selections would reflect their understanding about Taiwanese's Japanization.

Keywords: Government Controlled Literature, Colonial Literature, Taiwan under Japanese rule, Pacific War, Japanization, national identity, literary image

目録



謝辭	i
摘要	ii
要旨	iii
Abstract	iv
目録	v
表目録	vii
第一章 序論	1
1.1 研究動機	1
1.2 研究目的	3
1.3 研究方法	4
1.3.1 時期の設定	4
1.3.2 作家の分類	6
1.3.3 作品の選定	8
1.4 先行研究	13
第二章 膨張の帝国—理想像を探す内地人作家	17
2.1 「日本人」—意義の変容と優越性の完成	17
2.2 戦時下の文学者動員	24
2.3 内地人の作品分析	28
2.3.1 丹羽文雄『台湾の息吹』	30
2.3.1.1 「勤行報国青年隊」と「文学者」	31
2.3.1.2 台湾風土における日台の融和と競争	36
2.3.2 佐多稲子『台湾の旅』	40
2.4 結び	44
第三章 隙間の憧憬—日本に憧れる在台日本人作家	46
3.1 在台日本人が台湾に暮らす様相	48
3.1.1 「台湾文化」を建設する意図	48
3.1.2 文学作品に描かれる「在台日本人」	52



3.1.2.1 台湾と融和できない状況.....	53
3.1.2.2 在台日本人の郷愁.....	54
3.1.2.3 台湾住民に対する欲張りの挙動.....	55
3.2 在台日本人の作品分析.....	56
3.2.1 濱田隼雄「爐番」(『決戦台湾小説集』).....	57
3.2.2 丸井妙子『た、かひの蔭に』.....	63
3.3 結び.....	69
第四章 異色の大和桜—自己像を探す本島人作家	71
4.1 皇国思想と天皇制による「皇民化運動」.....	74
4.2 日本人意識と台湾人意識の頷頰.....	80
4.3 本島人の作品分析—『決戦台湾小説集』.....	88
4.3.1 言外の意味—醸しだされる作家の態度.....	94
4.3.1.1 張文環「雲の中」と呂赫若「風頭水尾」.....	94
4.3.1.2 龍瑛宗「若い海」.....	101
4.3.1.3 楊逵「増産の蔭に—呑気な爺さんの話—」.....	109
4.3.2 苦悩の正体—押し付けられる時代の性格.....	115
4.3.2.1 周金波「助教」.....	115
4.4 結び.....	124
第五章 結論	126
参考文献	132

表目錄



表 (1.3.2)	8
表 (1.3.3-1)	9
表 (1.3.3-2)	12
表 (3.2.2)	64
表 (5-1)	127
表 (5-2)	130



第一章 序論

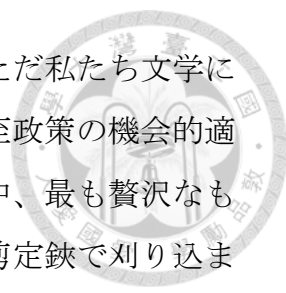
1. 1 研究動機

2015（平成27）年、日本にとっていわゆる「終戦七十年」という象徴的な時点が来た。第二次世界大戦が終わって以来、戦争責任・歴史認識などの問題が繰り返して検討されているが、終始忌諱のような存在として認められる。1895（明治28）年にて日本帝国の領土の一部になった台湾は、植民地の身分によって、母国の日本とともに歴史経験を共有している。戦争がもたらした傷は人間にとって最も直接かつ強烈であったので、現在の人たちはどのようにこの問題を取り扱うか。王徳威氏は、歴史上に起こったさまざまな暴力と人間が持ち続ける創傷について論じる。再現する可能性のない暴力と創傷に対して、私たちは哀惜の念を持って追念すべく¹。因みに、歴史の流れは瞬くのように過ぎてしまうが、「正義」の追求を忘れはしない。その思弁も簡略化するものではないだろうかと考える。

さて、戦争に関連する文学は「戦争文学」と「国策文学」などがある。前者は戦争の実相を描くものだというが、後者は国家・政府と民衆——特に文学者を指す——との競い合いの結果だといえよう。時代の良さと悪さを問わず、作家の本職は筆を尽くして書くことである。「支那事変」が勃発した二ヶ月後、「挙国一致・尽忠報国・堅忍持久」の三大スローガンをめぐる「国民精神総動員運動」が開始した。徴用された「ペン部隊」をはじめ、従軍作家は海外の戦場に派遣されているところに、農民文学・生産文学・労働文学などの「国策文学」も流行っていたので、文壇は戦時色の一色に塗りつぶされた²。一般的に捉えて、この時期の作品は「文学性」が乏しいと批評されているに限らず、千篇一律の内容、退屈で公式化の中身などマイナスの評価も少なくない。「政治に奉仕した」趣きがしばしば味わえると思われる。それゆえ、作品は凡そ排棄され、遺忘されておる運命に打ち当たる。しかし、文学とは作家が世のありさまを見証した記録だと考えよう。詩人の壺井繁治の言葉を引用したい。

¹ 王徳威『歴史與怪獣：歴史、暴力、叙事』、麦田出版、2004年、p.6。

² 平野謙『昭和文学史』、筑摩書房、1975年、p.229。



新体制がどんなものか、私には予測し難いけれども（略）ただ私たち文学に携わっている者の一ばん恐れるのは、文学に対する政治乃至政策の機会的適用です。文学・芸術というものは、ある意味で人間活動の中、最も贅沢なものであるが、それが贅沢であるという点から無闇に政治の剪定鋏で刈り込まれると花や実ばかりでなく幹まで枯れてしまうと思います。しかしどんな政治でも人間の空想力まで絶滅することは出来ぬだろうし、今後の文学はそういうほうこうにおいて、これまでとちがった美しい花が咲くだろうし、また咲かねばならぬと思います。³

戦争期において、文学は立つ余地がようやくなくなり、まもなく「政治」の力に覆い被されてしまうことを壺井繁治は予見した。が、このような文学に対する信念は人間が困難や苦痛に向かった積極的な態度を現される。戦争を省みるときに、文学作品はその影響および意義を理解する参考になるものだと思う。

ところが、「太平洋戦争」＝「大東亜戦争」という歴史的な背景に引き戻してみると、戦線の拡大は当時の日本帝国に圧力を迫らせる。植民地の資源がそれ以上有効的に利用され、人力の動員を最大限に広げられる日本政府にとって、「台湾人」を一刻も早く「日本人」に改造するのは急務の課題となった。ひいて、いわゆる「皇民化運動」は展開し、台湾人がまるで泥人形のように造形させられた。「国家」への忠誠心の再構築は、「アイデンティティ」の再認識の問題を起こさせる。新たな「日本人アイデンティティ」を造って国民統合を図るために、国語教育と文化改造運動などの施策が採用された。台湾人に単なる「日本」への帰属意識を要求させるだけではなく、台湾の漢民族が抱いた中国への思慕、あるいは成形中の台湾意識を排除することなどは、日本政府が面した挑戦に含まれる。人間は社会的動物であり、アイデンティティ認識とは人格の構成において極めて重要な部分である。被植民者としての台湾人は自分自身で「日本人」を受け入れるかどうかの問題に迷っているが、実は対外的にこの身分を拒否する隙間がほとんどなかったようである。一方、植民者の日本人は支配者

³ これは『日本学芸新聞』（1940年8月10、25日）から「新体制と文学」のアンケート調査で掲載される壺井繁治の考えである。桜本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』（青木書店、1995年）から引用する、p.12-13。

の立場で、新しい領地における新しい「国民」を観察する。二つの民族の視点は同じ目標の「台湾人」に集中してから、文学上にどんな効果を生じたのか。

太平洋戦争をめぐって歴史的葛藤は東アジアの国にとってまだ解決のきっかけを待っているのである。台湾はその一環に属され、しかも統治者の変遷を遍歴している。台湾のジャーナリズムにおいて「皇民化」や「日本人化」というのは政治的なキーワードとして考えられる。客観的にこの問題を歴史の本質に戻して検討したい。「植民地」台湾の後継者である私たちは「正義」を求める必要があると考えながら、異なる立場で「正義」を詳しくて深く理解することも欠かせないと思う。

1. 2 研究目的

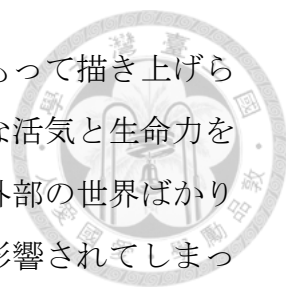
新しい政権の移入は、常に上層的な統治基盤に解体を働きさせる。同時に、定着された民族の組成と文化の結構も大きな衝撃を受けられた。日本統治期を含め、鄭成功の台湾占拠や清の併合という支配者は台湾で政権を建てるときに、台湾住民に対して共同の政治的集団意識をも要求する。

植民地時代に、日本人を加え、複雑な民族で共同体を形成していたが、島内に大多数を占めている漢民族は相當的な文化的発言権を握っていた。植民政策の抑圧のもとに多くの知識人は漢文化アイデンティティを根強く抱き、中国を文化と歴史の「故郷」と見なした「祖国意識」を持っていた⁴。一方、「台湾人」アイデンティティの登場も頻りと起こった抗争や文化運動に連動していた⁵。それゆえ、文化上の誤解は日本統治末期にいたるまで続いていた。時は太平洋戦争に入った後、台湾は神聖かつ重要な「南進基地」「南方の鎖鑰」となったので、植民者と被植民者の衝突は戦争によって表面的に中止された。台湾人は、心を天皇に捧げて聖戦に献身する物心両面に動員された結果と逆転した。

こういう現象は台湾の文学史上一つの特異な時期を創出する。台湾人を完全なる「日本人」に改造させられる皇民化運動の展開は、「国策文学」の中に散見される。日本帝国が樹立する理想的な「日本人」の標準を達成しようとした「台

⁴ 黄俊傑『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史の変遷』、東方書店、2008年、p. 102。

⁵ 若林正丈『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』、筑摩書房、2001年、p. 53。



湾人」キャラクターは、台湾人と日本人作家は各々の立場をもって描き上げられる。元々文学とは、文学者が自由的な発想を発揮し、独特な活気と生命力を擁するものである。国家権力の干渉をはじめ、戦争の破壊は外部の世界ばかりか人間の内面に侵入し、作品の内容は実質的に国家の政策に影響されてしまった。これこそ文学に蘊蓄されている自由の精神と創造力が潰された原因である。弾圧事件が頻発していた高圧的な時期に、国策の頸木から脱されない日台文学者は思想上の混乱期に入った。これを前提として、文学者は帝国に徴用されて民衆に国策を伝える任務を務める。検閲制度の制限下で、宣伝の任務を全うしようとする一方、自らの文学的理想を完成したいという進退両難に処する作家たちにとって、両者のバランスをいかに保つのは、時代からの質問だと思う。

天皇の輔弼を目的とした新体制運動が急進的に展開しているところに、「バスに乗り遅れるな」という流行語が現れた。文学者は余儀なく国家の動向と一致する立場を示さざるをえなかった。時代の行き詰まりを直面して、国家政府の方針と個人の理想との衝突は如何に妥協したり調整したりした過程を跡付けることによって、文学の産出をまず理解する。そして、本論文の目的は、政治性を内包され、従来無視されている戦時下の「国策文学」を選び、太平洋戦争末期の作品に「日本人」に造形させられた「台湾人」のイメージを中心に討論する。「台湾人」の「日本人化」という歴史の事実は台湾人作家の他に、統治者の日本人作家の目線を含めて考察することを試みる。

1. 3 研究方法

1. 3. 1 時期の設定

初の海外領土になった台湾をはじめ、中国・朝鮮や南洋諸島などのところが次々と軍国主義の道に歩んでいた日本の支配範囲に画された。1931（昭和6）年から発端した満州事変としてはじめられ、日中戦争・アジア太平洋戦争を経て、1945（昭和20）年終戦にかけての一連の戦争について、鶴見俊輔は「十五年戦争」と呼ぶ。連続していた戦争によりて、明治維新後の日本は壮大な国勢がうかがえるが、全国のあらゆる方面がはなはだしく影響された。中国との衝突が勃発してから、日本国内において排外主義的・軍国主義的なブームはだんだん

溢れてきた。戦争支持の意図が含まれているプロパガンダが流行し、新聞とラジオなどのマスコミは特定の言論・報道を編成したり、操作したりして、一方向的な大量伝達を用いた。全国は熱狂的な雰囲気引きこまれ、しかし戦争が予想外に十数年を伸びていて、厭戦情緒は醸されてきた。

1941（昭和16）年12月8日、対米英戦争は日本帝国のマレー半島・真珠湾に集結しているアメリカ太平洋艦隊への奇襲攻撃で始まった⁶。これは歴史上に周知の「アジア・太平洋戦争」の緒戦である。支那事変を含め「大東亜戦争」と呼称する公的な立場が宣布された⁷。第二次近衛内閣が提出した「基本国策要綱」と大東亜共栄圏確立を図る「大東亜新秩序建設」の根本方針は遂に全面的に実行され、日本帝国主義はアジアモンロー主義的膨張の最終的実現へ突き進んだ⁸。大東亜共栄圏の構想とは、共栄圏内の諸民族自身の繁栄と安定を目標とし、アジア共存共栄の関係を構築する姿勢を示されるが、実は日本の自存圏と防衛圏を確立してほかの地域を資源供給地域とみなすことを骨子としてスタートしたと考えられる⁹。こういう「帝国主義的事実と民族親和という理念の矛盾」¹⁰から生じた厳酷な現実のもとに生き抜いていた人間は、惨烈をきわめる悩みを抱き続けていた。

日本帝国の国民は真珠湾攻撃の大勝利に沸きに沸いて、これから逆転の惨敗とは予期しなかった。「撃ちてしやまむ」という決戦標語が出来上がられたというものの、アメリカの「カエル跳び作戦」と呼ばれる戦略の成功に伴い、戦況が悪化しながら、南西諸島・台湾は1944（昭和19）年10月に空襲された。マスコミから敗戦の様子を全面的に隠蔽され、事実をほとんど知らない作家はなおさら文学統制の圧力を受け、1945年8月に終局的な結末を迎えた。

太平洋戦争が幕切れとなるまえの段階において、米英への敵愾心に基づいた国民皆兵のアトモスフィアはいよいよ消えてしまい、生活上の不便、間近に迫

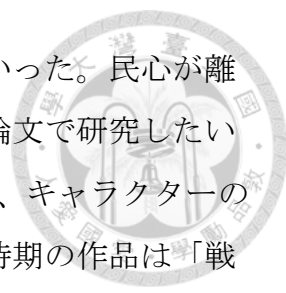
⁶ 『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』、p. 5。

⁷ 大東亜戦争という呼称は、敗戦後日本占領政策を実施した連合軍総司令部（GHQ）によって公式に使用することを禁じられた。戦争目的であった大東亜共栄圏の建設が日本の侵略を隠蔽する仮面であったことを明確にする意図で、現在は「太平洋戦争」「アジア・太平洋戦争」などが一般に通用している。同上、p. 5。

⁸ 江口圭一『十五年戦争小史』、青木書店、1988年、p. 174。

⁹ 鈴木麻雄「大東亜共栄圏の思想」『近代日本のアジア観』、ミネルヴァ書房、1999年、p. 259。

¹⁰ 同上、p. 258。



っていた戦禍など、厭戦的な無力感が帝国の隅々に籠もっていった。民心が離れるおそれがあったゆえ、国民的統制がいっそう強めた。本論文で研究したい作品は1943-1945年間に出版されたものにする。創作の動機、キャラクターの特色やテキストの内容は基本的な分析の項目であるが、この時期の作品は「戦時色」に染められたので、作家と国家・検閲制度・パトロン、作家と読者との間に横たわる複雑な関係が観察できる¹¹。それに、作家の意図と作品の中に表現してあげたい価値や理念が太平洋戦争から惹起した歴史背景との結びつきもかなり強いと思われる。

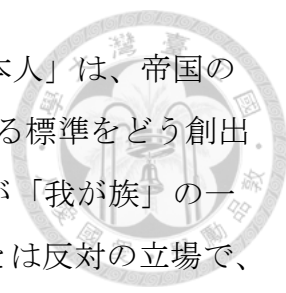
1. 3. 2 作家の分類

日本統治期における台湾で、台湾人（特に漢民族を指す）、台湾で暮らしていた日本人、日本から台湾に旅をした日本人という三種類の人間は文学的遺産を残した。

まず、法理的に言えば、台湾人は日本の植民地になってから日本国籍を持っていた。「日本人」と呼ばれでも誤りはないである。しかしこのような国籍の変更は人為的な要因が大きかった。「台湾領有」の幕が正式に開けると、漢民族の武装闘争はひっきりなしに1910年代までに至った。台湾の原住民は異族の日本人の統治を反抗する一方、被植民者としての差別待遇をも拒否する。が、台湾総督府の政権が確立し、統治の基礎が安定しつつあったことを伴って、国語教育の浸透、戦争がもたらした動員などの原因で、台湾人の内部にアイデンティティ認識がついに変化していた。さらに「皇民化運動」の登場は台湾人にとって「私は誰だろうか」という苦悩の頂点だと言えよう。この悩みは単なる日本帝国に対する抵抗意識に基づいたものだけではない。「日本人はずなのになぜ台湾人として生まれたか」という「劣等感」によって引き出された可能性もある。以上のような細かい心緒は文学に反映しているときに相當的に幽微であるため、解読することはあまり容易くないと認められる。

そして、台湾人の場合とは異なって、大和民族の血が流れている「日本人」

¹¹ フィックス「徴用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」『よみがえる台湾文学—日本統治期の作家と作品』、東方書店、1995年、p. 137。



は生来帝国の臣民であった。先天的な優勢を保っている「日本人」は、帝国の勢力範囲内では「日本人」の模範として、「日本人」を評価する標準をどう創出したのか。また、日本帝国に付属していた周辺地域の人びとが「我が族」の一員になろうとする意図に対してどう考えたか。前述の台湾人とは反対の立場で、しかも支配者的な位置からみると、「台湾人が日本人になった」問題を討論するときのヒントだと考える。では、日本本土の日本人のほかに、台湾に暮らしていた日本人の場合はどうだろうか。台湾の風土や人間に密接で頻繁な接触していたうえで、国家に対する共感は依然として母国の日本に強く繋がっている。戦争が招いた混乱を加え、生活していた土地と民族の連繫という両者の隙間に自己の定位を探して確かめることは、台湾にいた日本人の課題だと思う。

台湾人と日本人の作品を選ぶまえに、まず作家を「台湾人」「日本人」「台湾に暮らしていた日本人」という三つの範囲に区切られる。なお、なるべく歴史の現場に接近しようとしたが、歴史的呼称を使う。当時、日本の国土を内地と外地に区分する習慣があった。内地とは、国家全体のために制定された法規が原則として当然行われる地域といい、具体的に言えば本州、四国、九州、北海道、沖縄をいう。これに対して、外地とは日本の統治権は完全に実施されるが、前述の法規が行われず、地域のために特別に制定された法規が一つの体系をなして行われる地域であり、朝鮮・台湾・澎湖島・樺太・関東州・南洋群島を指す¹²。それにより、本論文では、植民地台湾に来た内地の日本人は、「内地人」と呼ばれる。そして、植民地政府は台湾人を簡単に「漢人」と「蕃人」に分けられるが、公式的な呼称は「本島人」と「高砂族」である。ここでは「本島人」の作品しか限定されない。最後に、日本統治期における台湾文壇で、「本島人」との競い合う対象は「台湾をいどころとする日本人」は「在台日本人」として称される。表(1.3.2)のようにまとめる。

¹² 百瀬孝著、伊藤隆監修『事典 昭和戦前期の日本：制度と事態』、吉川弘文館、1990年、p. 3-4。また、本書で引用される中村哲「植民地法」(『講座日本近代法発達史(5)』(勁草書房、1968年、p. 178)の見解は、外地という言葉は植民地という刺激の強い言葉を避けるためのものである。

台湾		日本／内地
本島人	在台日本人	内地人

表 (1.3.2)

1. 3. 3 作品の選定

「本島人」「在台日本人」「内地人」の三つのカテゴリが確定され、作品の選定は「国策文学」という基準に依拠して考える。つまり、内容には国家の影響力が留められる痕跡を注目する。日中両国の衝突が長期間の戦争に変わってから、戦争文学は時勢にしたがって現われ、その担い手が「戦争体験者」だと言われる。軍隊体験者、従軍体験者（報道班員・記者・看護婦・軍属など）のほかに、「銃後」も重要な分類の一つである¹³。例えば、旧プロレタリア作家、気鋭の中堅・新人、兵隊作家など全文壇を網羅して国策推進を展開した文芸銃後運動によって国策文学の活発な動きが見せる¹⁴。戦線の後方にある「銃後」は戦争に直接的に参加していない国内の国民のことを指す。戦場で起こったさまざまな殺戮や破壊の様相を描かれている作品ではないが、銃後で完成した文学は国家の施策や方針を伝達する特色がある。国家・民族への団結と帰属意識を繰り返して強調する精神的な宣伝戦という効果において、国策文学は当局にとって戦時下に不可欠な武器だと言えるだろう。

さて、台湾を研究の中心としたので、「国策文学」以外にまた他の要件をあわせて考える。第一に、当時、台湾のところどころは戦争によって渦巻かれた。場所に限られたより、台湾を廻して各地の状況を描かれた作品のほうが戦争の破壊力を全面的に理解できるだろう。第二に、軍需産業が盛んになり、都市と工場は戦争の雰囲気がいちばん濃かったが、実は各産業を含め、戦時下において大規模な人力の動員は農村や山村まで及んでいた。それゆえ、作品のなかに、帝国の建設を務めていた人びとが注目されるところに置くはずだと思う。第三に、国家が文学者に向かって強制的な態度は「派遣作家」の出現で示唆する。

¹³ 長谷川泉「戦時下の文学」の構図『国文学 解釈と鑑賞』48(11)、至文堂、1983年3月、p.7。

¹⁴ 都築久義「国策文学について」『国文学 解釈と鑑賞』48(11)、至文堂、1983年3月、p.13。

自由に題材を選ぶ権力は奪われ、あるいは特定の目的のために書くことを強要される。内地人作家が日本から帝国の領地に派遣され、本島人が皇民奉公会に組織されて作品を完成したのは、この現象を反映する。

では、以上の条件をまとめてみると、『決戦台湾小説集』、丸井妙子の『たゞかひの蔭に』、丹羽文雄の『台湾の息吹』と佐多稲子の『台湾の旅』という四つの作品を選んだ。

『決戦台湾小説集』は台湾文学奉公会と総督府情報課の主導で七名の本島人と六名の在台日本人の作家を集めて仕上げた短編小説集である。作家たちは戦時生産の際に鉱山・油田・工場・農場、公用地や山岳地帯、鉄道などのところを訪れた。現場で一週間に工員・船員・坑夫とともに生活し、その体験を素材として用いられる。この計画で募られた作家は異なる出身であった一方、大抵『台湾文学』と『文芸台湾』という対立的な文芸団体に所属された。互いに対峙していた関係があったが、官庁の命令に順従して一同作品を発表した。本来、両者の間に存していた民族・作風・イデオロギーなどの差異は『決戦台湾小説集』の機にして繋がって、「国策文学」という大きな枠組みで共存した。その複雑性は、本島人と在台日本人が同じく日本帝国に対する帰属意識を討論するとき参考に値する資料だと思う。

なお、『決戦台湾小説集』では小説が十一篇、詩が三篇。表（1.3.3-1）で作者・作品・発表時間と掲載機関を示す。

決戦台湾小説集〈乾之巻〉台湾出版文化株式会社、1944. 12. 30				
決戦台湾小説集〈坤之巻〉台湾出版文化株式会社、1945. 1. 16				
【小説】				
巻	作者	作品	発表時間	掲載機関
乾	濱田隼雄	炉番	1944. 7. 15	『台湾時報』 294 号
	高山凡石 (陳火泉)	御安全に	1944. 8. 13	『台湾文芸』 第 1 巻第 4 号
	龍瑛宗	若い海	1944. 8. 10	『旬刊台新』 第 1 巻第 3 号
	吉村敏	築城の抄	不明	『台湾文芸』 不明
	張文環	雲の中	1944. 11. 10	『台湾文芸』 第 1 巻第 5 号
	河野慶彦	鑿井工	1944. 11. 10	『台湾文芸』 第 1 巻第 5 号
坤	西川満	幾山河	1944. 8. 1	『旬刊台新』 第 1 巻第 2 号

	周金波	助教	1944. 9. 20	『台湾時報』 296 号
	楊達	増産の蔭に	1944. 8. 13	『台湾文芸』 第 1 卷第 4 号
	新垣宏一	船渠	1944. 11. 10	『台湾文芸』 第 1 卷第 5 号
	呂赫若	風頭水尾	1944. 8. 25	『台湾時報』 295 号
【詩】				
乾	西川満	石炭・船渠・道場	1944. 8. 20	『台湾新報』
		〈戦争と勝利の結晶石〉	1944. 9. 18	『旬刊台新』 第 1 卷第 7 号
		〈この一刻を〉 〈斗六国民道場〉	1944. 11. 10	『台湾文芸』 第 1 卷第 5 号
坤	長崎浩	山林詩集	1944. 11. 10	『台湾文芸』 第 1 卷第 5 号
	楊雲萍	鉄道詩抄	1944. 11. 10	『台湾文芸』 第 1 卷第 5 号

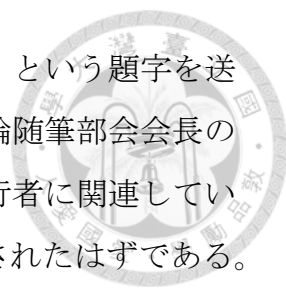
表 (1.3.3-1)

小説集の全体を通して、「邪悪な米英」を打倒し、皇民錬成を行われ、日本のために奮起する精神を宣伝する。詩を除いて十一篇の小説の中に「台湾人」がどのように「日本人」として生きている姿を描写する六篇を選ぶ。本島人の部分は、龍瑛宗の「若い海」、張文環の「雲の中」、楊達の「増産の蔭に」、呂赫若の「風頭水尾」と周金波の「助教」がある。そして、在台日本人の部分は、濱田隼雄の「爐番」にする。

次に、丸井妙子の『たゝかひの蔭に』も在台日本人の作品に属される。決戦下の増産現場へ派遣された作家のなかに男性だけではなく、ほぼ台湾全島を跋涉し、金瓜石鉱山・材木伐採の太平山・移民村・青年錬成所などのところに行き、体験をルポルタージュとして発表した女性がいった。丸井妙子は「決戦台湾随筆集」¹⁵と呼ばれる『たゝかひの蔭に』において、同じく戦時下の産業現場の様子を描き、彼女も女性目線で、銃後種々の女たちの生活を特に書いてあった。

『たゝかひの蔭に』は『決戦台湾小説集』とは違って、日本総督府情報課や台湾文学奉公会の命令で完成させた文学作品ではなかった。しかしこの作品は政府との間に深い関係が存在する。1943（昭和 18）年 12 月、当時の長谷川清総

¹⁵ 中島利郎『日本統治期台湾文学集成 17 台湾随筆集三』の作品解説では、「女性が描いた「決戦台湾随筆集」—丸井妙子『たゝかひの蔭に』について」から借りた言葉。『決戦台湾小説集』の作家派遣で張文環は太平山を訪れ「雲の中」を書き、高山凡石（陳火泉）は金瓜石鉱山に派遣されて「御安全に」を書いた。丸井妙子も同地に訪れておったので、「決戦台湾随筆集」といえようと中島氏は考える。p. 579-583。



督は丸井妙子を接見し、しかも出版するときに「麗筆繪蓬莱」という題字を送った。また、本の序言も東洋大学学長で日本文学報国会の評論随筆部会会長の高嶋米峰が書いたものである。国家の最高権力者や国策の執行者に関連していたことからみると、作品の中身が国家の方針に符合して認可されたはずである。そして、作家の政治的立場も比較的明らかであったと言えよう。

主題・取材・内容上に言えば、『決戦台湾小説集』は『たゞかひの蔭に』と同時に類似点を持っている。作者たちは関心した対象が主に戦時下の庶民であった。「産業戦士」として働いている様子を生き生きに描いたことに加え、文学者もキャラクターを借りて自分の立場を示した。ところが、作家が創作するまえの自主性を言うなら、前者が受動的、後者が能動的だという相違点もあるが、この二作の国策の色彩が強烈であった。

そして、台湾が日本の植民地になってから、内地人は記した紀行、随筆や小説などの作品が少なくないである。戦争が勃発以来、文学者はほとんど「文芸講演会」の理由で来台した。佐多稲子は1942（昭和17）年に豊島与志男・浜本浩・村松梢風らとともに台湾に行った。翌年、丹羽文雄は文学報国会「台湾支部」の設立で日本文学報国会の事業部長戸川貞雄、庄司聡一と日本文学報国会及び皇民奉公会台北支部が催した「文学報国講演会」に参加した。彼らは総督府の仲立ちで台湾全島を遍歴して、林猷堂や楊逵などの有名人と会面し、皇民化運動の最中の台湾印象を各自の観点で記録した。その後、『台湾の旅』と『台湾の息吹』は『台湾公論』で連載して出版した。

本島人と在台日本人のセクションと比べて、内地人の部分で選ばれる作品は同じく「大東亜戦争」の雰囲気にも籠もられた台湾に暮らしていた人間や社会現状に対して鋭敏な観察が提出される。また、佐多稲子と丹羽文雄は植民地を訪問した理由は軍部の文学者動員計画によって促される。台湾以外に、二人の作家は派遣作家の身分でいろいろな海外の戦地に遊歴した経験があった。国家から渡してきた宣伝の任務を負いながら、国家意識の有無や強弱も彼らにとって「台湾人」のアイデンティティ認識問題に影響を与えたと推測できよう。

表（1.3.3-2）に用いて、三つの分類と作品をまとめて示す。

本島人	在台日本人	内地人
『決戦台湾小説集』 龍瑛宗「若い海」 張文環「雲の中」	『決戦台湾小説集』 濱田隼雄「爐番」	丹羽文雄 『台湾の息吹』
楊達「増産の蔭に」 呂赫若「風頭水尾」 周金波「助教」	丸井妙子 『たゝかひの蔭に』	佐多稲子 『台湾の旅』

表 (1.3.3-2)

『決戦台湾小説集』と『台湾の息吹』は小説の範疇に属され、『たゝかひの蔭に』と『台湾の旅』は随筆に近いと考える。植民地統治の小説はどんな特色を持っているか。朱恵足氏の見解で、当時の台湾社会は帝国主義や植民主義など多様なイデオロギーに充ちていた。この時期の小説における虚構性は、言葉以外に隠された種族、性別、階級など不平等に基づいた権力関係を表す¹⁶。つまり、小説とは、文学のジャンルの中に虚構性が相対的に高いものとして、直接的に作家の理念を表現するのではない。小説の想像力、政治に関わるイデオロギーとの関係は、作品の内部をめぐって考察しなければならない。そのため、本論文に取り上げる小説で「台湾人」が造形させられた「日本人」のイメージを分析するときに、作者とキャラクターに繋がって考えることや、両者を分けて討論することができる。それに比べて、随筆の場合は主に第一人称で書かれるものなので、作品の内容が作者の本来の意図や理念を反映し、「台湾人」に対する描写も作者の観察や反芻した結果によって展示されると考える。

また、テキストのほかに、「官庁出版物」もかなり重要な参考資料だと思う。例えば、皇民奉公会の情報機関誌『新建設』、台湾文学奉公会編集・出版の機関誌『台湾文芸』¹⁷。それに戦時下の体制に即応するため、台湾総督府は『台湾日

¹⁶ 朱恵足『「現代」的移植與翻譯：日治時期台灣小説的後殖民思考』、麦田出版、2009年、p.19。

¹⁷ 1943年（昭和18）11月13日、台湾市公会堂（現中山堂）において、台湾文学奉公会主催、台湾総督府情報課、皇民奉公会中央本部、日本文学報国会後援で行われた「台湾決戦文学会議」では、台湾の二大文芸誌『文芸台湾』『台湾文学』が共に停刊した後、完全に公的な立場に立った『台湾文芸』は創刊された。

日新報』『興南新聞』など台湾の六大新聞¹⁸を統合され、「国民をして弥やが上にも戦意を昂揚せしめ、必勝信念の推進と確保」という目的で官許の『台湾新報』を出版した。台湾新報社もまだ『旬刊台新』の旬刊雑誌を発行した。政治家の発言、官庁の文書、国家の立場を支持していたマスコミの報道などの資料は「国家の語る言葉」と認められており、「厳密には『現実』そのものではないが、いわば言説が『現実』に影響をあたえる接点として重要である」ので¹⁹、この資料をも考察の一部にする。

以上の文献は政策主体の「公文書」の性質を帯びたので、その時の人びとが対面していた困難、緊張、不安定な社会の情勢を理解するときに役に立つ資料だと考える。というわけで、民間の文芸誌（例えば『文芸台湾』『台湾文学』『台湾芸術』など）に掲載される評論・散文、作家自身の文章・エッセイなどは、「作品」以外に文学者の意向を示した著述をも参考にする。こうして、できるだけ公的や私的な資料を両方ともに備える。

1. 4 先行研究

文化人が政局に圧迫された境遇、台湾人の「日本人アイデンティティ」認識の変化と台湾人が作品におけるイメージは、本論文では討論したい課題である。その課題を分析するために、先行研究では三つの方向性に分けて考えてみよう。それは「時代背景」「国家意識・アイデンティティの形成」と「テキストの分析」である。

まず「時代背景」の部分からはじめる。日本統治末期において台湾文壇は戦争にもたらした激変を迎えた。李文卿氏の『帝国想像—戦争期の台湾新文学』²⁰と柳書琴氏の『戦争と文壇—日本統治末期の台湾の文学活動(1937. 7-1945. 8)』²¹は文学者が向かい合った「文学の夜」²²をはじめ、1940年代に停滞してしまった

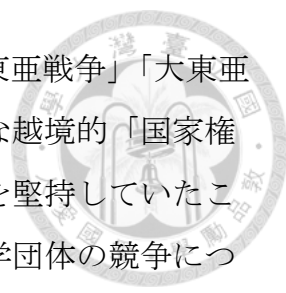
¹⁸ 六紙は『台湾日日新報』『興南新聞』『台湾日報』『高雄新報』『台湾新聞』『東台湾新聞』。

¹⁹ 小熊英二『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』、新曜社、1998年、p. 13。

²⁰ 李文卿『帝国想像—戦争时期的台湾新文学』、国立台湾文学館、2012年。

²¹ 柳書琴『戦争と文壇—日本統治末期の台湾の文学活動(1937. 7-1945. 8)』、国立台湾大学歴史研究所修士論文、1994年。

²² 龍瑛宗「ひとつの回憶、文運ふたたび動く」『台湾新民報』、1940. 1. 1。支那事変の勃発によって、1920年代から1930年代にかけて成熟するようになった台湾文壇は前景が黒くなり、つい



台湾文壇が甦ってきた契機を探求する。例えば、両氏は「大東亜戦争」「大東亜共栄圏」と「大政翼賛運動」など時代の波瀾に、極めて巨大な越境的「国家権力」の影響下、日台の文学者は風前の灯火のように文学の道を堅持していたことを注目する。そして『文芸台湾』と『台湾文学』の二大文学団体の競争について、柳氏が集団と国策との関係を明らかにし、集団内の作家が「戦争」を全般的に受け入れたか、あるいは排斥しながら利点を利用したかを分析する。一方、1930年代以後国語教育の成果がだんだん現れたので、李氏は「戦争協力」の問題について、インテリゲンチヤが国家に対する帰属意識も曖昧になった現象を着目し、「皇民作家」の出現にしたがって本島人の文学者を分類することを試みる。両者の研究は戦争期の歴史事件と文化上の連関性を重んじて、政局の変遷と文学者の対処に焦点を絞っている。作品を細かく分析する部分はないようであるが、戦争における歴史的脈絡、文学者に及ぼしていた影響を把握するために重要な研究資料だと考える。

次に、「国家意識・アイデンティティの形成」について、荊子馨氏の研究『日本人になる一植民地台湾とアイデンティティ形成の政治』²³をあげたい。荊氏の問題意識は二つがある。第一に、日本帝国が自国の植民地理論を構築して実践していた。その過程に被植民者が如何に「日本人になれ」を迫られるか。第二に、台湾人にとって「日本人になる」という選択肢を除けば、ほかの政治的なアイデンティティ認識の形式が存在していたか。この問題を解明するために、荊氏は「同化」と「皇民化」の統治手段を区別する。「同化」の理論の中に、日本政府は被植民者の台湾人を改造する責任を担うはずだったが、「皇民化運動」に移ると、アイデンティティ再認識している際に、種々の苦悩や衝突を内面させる責任を受け取るのは被植民者になってしまった、と氏は主張する。つまり、一般的な「同化政策」の路線を継承している「皇民化」に独立させて、個別的な研究の範疇として見られる。また「皇民文学」を創作している台湾の「協力者」(collaborator)(周金波・王昶雄・陳火泉など)の著名な作品を取り上げ、「日本人になる」問題を考慮したうえで、現在の研究者が作品を評価するとき

に文学活動の空白期間を迎えた。作家たちは発表の舞臺をだんだん失ったが、龍瑛宗が台湾文学の復興に対して深く期待していた。

²³ 荊子馨『成為日本人：殖民地台灣與認同政治』、麦田出版、2006年。

に「政治的に正しい」思惑を混ざられている現象を批判する。

荊氏は日本帝国の植民主義における「同化」政策のなかの矛盾性を分析し、日本伝統文化のなかに「同化」という概念の存在が認められる理由を述べる。そして、「皇民化」と戦争動員との接点が考察され、「台湾人」が「日本人にならなければならない」と焦っていた様子ことから「皇民化」とは一種のイデオロギーだと見なされる。しかし、以上の議題に即して、日本人の思想上の転換は荊氏の研究で欠落し、また本島人の作品に触れたとき、他の研究者の盲点を提出し、必ずしも「作品」の完全なる分析ではないと考える。本論文ではテキストを主な研究対象として氏の研究方法を参考する一方、日本人がどんなキャラクターを演じているのかをもっと探究したい。

その他、帝国日本の植民地という大きな範囲で「日本人」の境界を討論するのは小熊英二氏の『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』²⁴がある。尹健次の『日本国民論—近代日本のアイデンティティ』²⁵と『民族幻想の蹉跎—日本人の自己像』²⁶では、「日本人アイデンティティ」の概念が帝国の拡張とともに帝国領地の人間に影響させていた現象を観察する。前述の荊氏は「帝国」が「台湾島内の住民」に「日本人アイデンティティ」の意識を強要していた図式を探求するが、後者の研究は「日本人アイデンティティ」は「外地」と「大東亜共栄圏」によって変遷してきた様相を考察する。本論文は二つの見方を同時に考えたい。

第三、日本統治末期の国策文学を研究する論文が多くないと言えようが、本論文で取り上げられるテキストに関する研究は、中島利郎氏の「日本統治末期の台湾文学—台湾総督府情報課編『決戦台湾小説集 乾之巻／坤之巻』の刊行」²⁷、ダグラス・L・フィックス氏の「徴用作家たちの『戦争協力物語』—決戦期の台湾文学」²⁸、廖秀娟氏の「丹羽文雄『台湾の息吹』論」²⁹と許麗芳氏の「植民時

²⁴ 同注 18。

²⁵ 尹健次『日本国民論—近代日本のアイデンティティ』、筑摩書房、1999年。

²⁶ 尹健次『民族幻想の蹉跎—日本人の自己像』、岩波書店、2011年。

²⁷ 中島利郎「日本統治末期の台湾文学—台湾総督府情報課編『決戦台湾小説集 乾之巻・坤之巻』の刊行」『岐阜聖徳学院大学紀要 41巻』、岐阜聖徳学院大学、2002年、p. 1-21。

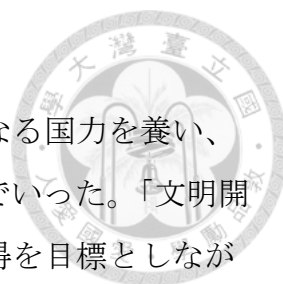
²⁸ ダグラス・L・フィックス「徴用作家たちの『戦争協力物語』—決戦期の台湾文学」『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』、東方書店、1995年、p. 131-165。

²⁹ 廖秀娟「丹羽文雄『台湾の息吹』論」『解釋』一・二月号、2012年2月、p. 30-38。

空下の多重視点—佐多稲子『台湾の旅』(1943-1944)の台湾創作³⁰などがある。

「台湾文学界の総蹶起」という特殊な歴史的時点で誕生してきた『決戦台湾小説集』は総督府の監視と指導で島内の文学者たちの作品を集めたものである。中島氏とフィックス氏は同じくその刊行の過程について詳しく考究する。テキストの分析を言えば、中島氏が収録される全作品の作風を互いに比較し、フィックス氏は特に楊達と呂赫若の小説を「台湾戦争小説」と見なして討論する。また、丹羽文雄は小説の中に主人公が来台前後に大きく変わってきた態度を描いた。廖秀娟氏の論文ではその点をめぐって、彼が「勤行報国青年隊」で修練している青年たちの姿を惚れた以後、台湾の事情をすべてそれを「基準」として評価すると指摘する。そして、戦前プロレタリア作家であった佐多稲子の作品について、許麗芳氏は「植民地に対する同情と反省」、「島内の階級問題を観察する女流作家の視点」と「日本人としての国家立場の賛成」という三つ部分で考察する。以上の研究は異なる見方からテキストを分析するのであるので、その論点をあわせて参考になる。

³⁰ 許麗芳「殖民時空下の多重視角—佐多稲子〈台湾之旅〉(1943-1944)的台湾書寫」『興大人文学報』53、2014年9月、p. 145-166。



第二章 膨張の帝国—理想像を探る内地人作家

十九世紀の末、欧米諸国が現代化のプロセスを経て、厩大なる国力を養い、世界を「欧化」させる支配的地位を求めようとする道に進んでいった。「文明開化」という鮮明な旗幟を掲げ、国家領土の拡張と植民地の獲得を目標としながら、新たな「列強」(the Great Powers)は勢い良く誕生した。明治維新後の日本は日清戦争と日露戦争での連戦連勝によってこのような「新帝国主義」(New Imperialism)のブームに乗ってきた。徳富蘇峰の「大日本膨張論」と福沢諭吉の「脱亜論」などの理論の形成により「海外へ発展する」姿勢が強められ、自国の安全保障と国家の「脆弱性」を強く意識した明治期の日本は、西洋列強の政策をまねて国際社会のヒエラルキーの階段を上がろうとした³¹。

海外植民地の統治は「新帝国主義」の一行に属される国家にとって解決しにくい難問である。一般に、日本植民地統治の基本方針は、日本の文化を強制する同化主義であったといわれる³²。台湾は日本帝国の初の植民地になり、島内で暮らしていた住民も「大日本帝国臣民」となった。が、伊藤博文が個人名義で出された『憲法義解』では、「日本臣民とは外国臣民と之を区別するの謂なり」と述べる。日本臣民と「外国人」との区別は「血縁関係」であり、外国人に対する厳しい身分的差別の合理化も導き出される³³。維新以来「人民」「国民」「衆庶」などと呼ばれた民衆が帝国憲法下に公式に「日本臣民」を定義され、日本は近代国家体制を整備する第一歩が踏み出された。帝国臣民の形成は、帝国憲法・教育勅語をはじめとする天皇制国家の各種イデオロギー装置のもと、学校教育システムを効率的に機能させることによって展開された。大日本帝国は結果的にはアジアを侵略し、また欧米列強との戦いに敗れて崩壊したが、その過程において「帝国臣民」の概念は少なからず変化した³⁴。

2. 1 「日本人」—意義の変容と優越性の完成


文明初期において、欲求、征服、支配、競争という人間性は暴力的かつ攻撃

³¹ マーク・ピーティ著・浅野豊美訳『植民地：帝国50年の興亡』、読売新聞社、1996年、p. 30。

³² 小熊英二『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』、p. 168。

³³ 尹健次『日本国民論—近代日本のアイデンティティ』、p. 97。

³⁴ 同上、p. 90。



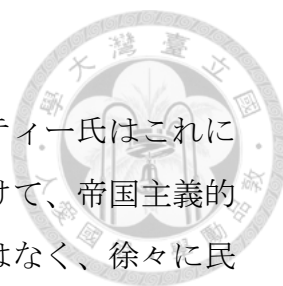
的な行為によって隠さずに示されてきたが、「征服の権力」(Right of Conquest)を正当化・合理化させることは、新帝国主義者、あるいは「自由派の帝国主義者」(liberal imperialism)にとって、他の地域を占有し統治するのは常識に合致することである。例えば、イギリス帝国は植民地人民の反感を消すために善政(good government)や公共事業(public works)を実施する利点をあげた。こういう植民者が持っていた思惑と、未開の土地を占領しつつ開発したことは、植民地の発展に貢献した重要な施策だと認められる。しかし、これも植民地における資源の豊かさを誇大し、原住民を劣等民族として見なされた前提が存在する³⁵。昭和・大正・明治の三代をわたった政治家・教育家高田早苗は、「他の優等なる民族の指導監督の下に立ちてその生産の増加を図らざるべからず」とか、「他の未開の地方・劣等の人種を併呑して、その力を増さんことを努むると同時に、文明民族の上に政治的制馭を為さんことを力むべきものに非ず」と植民地住民を文明に率いる任務ないし権利の正当性を鼓吹する³⁶。著名な思想家・文芸評論家高山樗牛の論述では「帝国主義は排他主義なり、独占主義なり、侵略主義なり、非人道主義なり」³⁷を率直に示す。帝国主義賛美の思想は、欧米にと同様に当時の日本でも大流行になる。

普通には、新帝国主義の流行は経済・政治・文化という三つの方面で分析できる。まず、経済上の理由は、資金過剰(surplus capital)の問題を解決するために新型の投資法に変えること、激しい国際貿易の競争において商品の市場を確保すること、安い価格と穏やかに産出する原料を追求すること、本国人口の増加を予見したので、新たな移民のところを探すことなどがある。政治上では、はなはだしい国際競争の情勢の中に国家の利益を求めながら国家の栄光をつかむために、民族主義の雰囲気を作られ、自国に対する帰属意識を国民に鼓舞させる目的がある。文化上といえ、領土拡張とは帝国にとって優越感と文

³⁵ 王世宗「新帝国主義與新世界文明」『台湾植民地史學術研討會論文集』、海峡學術出版社、2004年、p. 378-380。

³⁶ 高田早苗『帝国主義論』、東京専門学校出版部、1901年。井上清『日本帝国主義の形成』、岩波書店、1974年、p. 20から引用する。

³⁷ 高山樗牛「詹々録」『太陽』、1899年4月号。『日本帝国主義の形成』、p. 161から引用する。



明化の使命感を示す³⁸。

特に文化面と政治面をとりあげて考えると、マーク・ピーティー氏はこれについて分析を提出する。大衆ナショナリズムの勃興と関連づけて、帝国主義的な衝動は、資本家、商人、政治家の合理的計算によるものではなく、徐々に民主化されつつある産業国家に発生するナショナリズムと、それに基づいた大衆運動の結果であるという。つまり、広範な階層にわたる大衆が、自分の国の経済的利益や未来の偉大な国家像といった漠然とした見通しに動かされ、海外での冒険主義的行動を要求する。こうした愛国的な衝動が高揚するのは、大衆が列強間に熱く高まる敵対関係の中に自ら身を投じる時である。この説によると、帝国主義的拡張への熱病のような競争で決定的な役割を果たすのは、資本家の自己利益や行動ではなく、大衆の愛国的でヒステリックな熱情を扇動する政治家のそれなのである³⁹。

日本帝国の場合を検討すれば、国民が敵対意識と作戦の意欲を煽てられ、帝国の利益のために犠牲しようと説得される手段は、戦争期に至って繰り返して用いられた。幕藩体制から近代的な国民国家の道に進んでいった日本は、資源が乏しいので、人口激増の問題や資本の蓄積など経済的な要因が「新帝国主義」に参加する理由の一つであったほかに、植民地従属国化の危機を孕む外圧状態のもとに對外主権の確立を迫られ、富国強兵がついに絶対的命題となる⁴⁰。明治初期における日本の知識人や政策担当者は欧米諸国の脅威から自国を守るプレッシャーを直面し、強烈な危機感を持っていた。国防上の動機で考えれば、山県有朋は同心円状の戦略的範囲を設定する。「主権線」は国家生存にとって死活的に重要な公式の領土を示し、「利益線」は日本の非公式な勢力範囲の限界、内側を防衛するために必要とされる緩衝地帯を示していた。初期の帝國的膨張の根本理由は、隣接する大陸や島への支配の必要性があつたが、公式帝国の形成後には、さらに外側への膨張に限界を設けることができなくなった⁴¹。それゆえ、新たな植民地の獲得によって、防御地帯と国益の拡大を再定義する必要が迫ら

³⁸ 王世宗「新帝国主義與新世界文明」、p. 380。

³⁹ マーク・ピーティー『植民地：帝国50年の興亡』、p. 18。

⁴⁰ 鈴木正幸『国民国家と天皇制』、校倉書房、2000年、p. 27。

⁴¹ マーク・ピーティー『植民地：帝国50年の興亡』、p. 26-27。

れる。日本帝国とアジアの周辺国家との衝突が高まっているに至り、「大東亜戦争」の遠因が作られていたと考える。

植民地を擁し、近代化の標準に達した日本帝国は西洋列強との最大の差異が、日本は当時国際情勢の中に下風に立った東アジアに位置し、極東地域で黄色人種に分類されながら、欧米諸国に占領されたり侵略されるおそれがあるゆえ、日本人は引け目を感じて西洋列強と比肩できない劣等感を持った。日本は「欧米」と「アジア周辺地域」を同時に「他者」のような存在と見なし、欧米とアジア、文明と野蛮、支配と被支配という両義的な位置を占めたので、植民地政策についてイギリスの間接統治やフランスの同化主義と異なった路線を選んだ。日の没するところのない帝国を築いたイギリスは、文明化の責任を「負担」する姿勢をとり、植民地の旧慣を尊重し、自立的発展の可能性を許容していた。他方、フランス革命の思想的背景であった自然法思想と啓蒙主義の人間観は人間の身分が生まれにより決定されていた観念を打破した。フランスが提唱していた「同化主義」は、その自由・平等・友愛の精神を根ざされて、法律や文化などあらゆる面の共通化を植民地で施行するのを目指す。しかし日本帝国が唱えていた「同化主義」は「極めてアジア的起源と性格をもち、その後の発展もフランスのそれと類似してはいない」という⁴²。被植民者は「日本語教育」を受けて、完全なる「日本精神」を備える「日本人」になってから、論理的に政治上の権利と自由を有するはずである。が、矢内原忠雄は日本とフランスの同化主義的植民地政策を分析するとき両者の相違点を指す。フランス革命の精神と異なって、民族的な優越感に基づいた日本の同化主義は「民族的・国民的・国家的」な性質を帯びているので、軍事的統治になる可能性が高まる。

西洋列強とアジアやアフリカの植民地との支配関係に比べて、日本帝国と植民地台湾の間に地理的近接性、人種的近縁性と文化的親近感という特徴がある。しかし、小熊英二氏の考察では日本人が「欧米人」と「台湾人・朝鮮人などの被植民者」に対して強い劣等感を感じていた。例えば、西洋の統治論を吸収しながら、普遍的文明や科学技術、経済開発力において欧米に劣っていることは、日本側の論者が痛切にわかっていた。儒教文化については、台湾や朝鮮といっ

⁴² 同上、p. 134。

た支配地域の住民の方が精通していた。また、劣等感もさらに肉体的なものも入り混じっていた。日本と台湾や朝鮮はいわゆる「白人」対「有色人」の関係ではなく、人種的には同じ黄色人種と分類されるが、当時の平均的な「日本人」の体格は、欧米人、あるいは台湾の漢民族や朝鮮人より小さかった⁴³。

総じて、文明の進展は欧米諸国に遅れた日本帝国が、西洋で展開していた植民地政策を模倣するというより、むしろ抵抗の意識で日本の独自性を賛美する傾向にあった。そして、同じく漢字文化圏の影響下における植民地台湾と朝鮮に対して、日本はやはり文化上の「劣位」を意識したのか。この点で少し疑問があると思うが、日中戦争後、中国の政権より日本は儒教の文化と精神を受け継ぐ正統性を持っていると積極的に主張した。単なる「儒教文化」の継承者をめぐって生じた争いから伺われると、政治的操作が隠されていたと言える。つまり、欧米を模範とした「植民地」支配を説くよりも、欧米と異なる自意識のもとに一視同仁の「日本人」化を説くほうが、ナショナル・アイデンティティの維持に好都合であった⁴⁴。「文明化」より「日本化」を強調せざるを得なかった時勢において、日本が優位に立てる「威厳」の材料は「天皇」と「日本語」ほかならない。しかも、文明や肉体面での優位に依拠できない劣等感は、かえってむきだしの軍事力や暴力に頼る心理を加速したと小熊氏が指摘する⁴⁵。日本精神と天皇への忠誠心では、「日本人」が優れているという概念が形成してきたに至った。

さて、「日本主義」と「膨張主義」を一貫して唱えた文芸評論家の高山樗牛は「帝国主義」に関する支配関係を解する。

属邦もしくは植民地に於ける異人種もしくは異民族に、本國人と同一の権利を与えず、あくまで権力関係によりてこれら異邦人と本国人との間に本支主従の差別を規定する主義の謂なり。(略) 帝国主義は必ずしも属邦又は植民地に於ける異民族を以て、劣等人種なりと思惟するを用ゐず、唯彼等が本国人

⁴³ 『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』、p. 89-90。

⁴⁴ 同上、p. 92。

⁴⁵ 同上、p. 90。

に非るの故を以て、其間に上下主従の関係を規定するを須要とす⁴⁶。

高山樗牛は「異人種と異民族」「上下主従」という本国と植民地の差異をくりかえして強調し、民族の差異は権力関係の中に一番決定的な要素を示す。しかし満州事変、日中戦争に入ってから、日本帝国が領土侵略の範囲が拡大していくことにつれて、総力戦の体制も構築してきたので、新たな目標が提出された。例えば、「満州事変」の段階では「大東亜ノ新秩序」「日満の共存共栄」「民族共和」を鼓吹し、「日中戦争」の段階では、「東亜新秩序」「日満提携」などというスローガンが流行っていた。この二つの段階を経て、政府は膠着状態になってしまった戦争を合理化させる理由を再び探していた。すると、戦争の最終段階「大東亜戦争」を迎え、「大東亜共栄圏」の構想が掲げ、論壇にも数多くの混合民族論がみられるようになった。

1940(昭和15)年7月22日に成立した第二次近衛文麿内閣は「基本国策要綱」において、「皇国ノ国是ハ八紘ヲ一字トスル肇国ノ大精神ニ基キ世界平和ノ確立ヲ招来スルコトヲ以テ根本トシ先ツ皇国ヲ核心トシ日満支ノ強固ナル結合ヲ根幹トスル大東亜ノ新秩序ヲ建設スルニ在リ」という内容を発表し、公に「大東亜共栄圏」の言葉が披瀝された。尹健次氏は、大東亜共栄圏の構想を貫く原理が、皇国を核心とする「支配／服従」の垂直的上下関係の階層的秩序であると指す⁴⁷。マーク・ピーティ氏はただちに「東亜新秩序」とか「大東亜共栄圏」とかの声明に示される露骨な膨張主義的な性格を帯びると批評する⁴⁸。

日本帝国が積極的に「大東亜共栄圏」の理念を宣伝して実行に移す理由は、まずアジア諸国の資源を用い、自国の経済力を充実するのに加えて軍需上の物資を確保する必要がある。そして、日本を中心に放射状に伸びている大東亜共栄圏の安全を考慮するうえで、日本は地域内での軍事行使の権力をも追求する。言い換えると、「大東亜共栄圏」の延伸はあくまでも国防によって決定されるが、実は対外的な宣伝として、「大東亜共栄圏」最終的な旨はアジアを欧米列強の勢力から解放するのである。但しこのようなアジア解放論の唱導は濃厚な国家主

⁴⁶ 高山樗牛「帝国主義と植民」、1899年3月。『日本帝国主義の形成』、p.160から引用する。

⁴⁷ 尹健次『民族幻想の蹉跌—日本人の自己像』、p.157。

⁴⁸ マーク・ピーティ『植民地 帝国50年の興亡』、p.157。

義が漂っている。日本の国益をめぐって他のアジア諸国と結ばれた命令服従の関係において、日本帝国のエゴイズムは現われている。鈴木麻雄氏は「帝国主義的事実と民族親和という理念の矛盾」と批判する⁴⁹。

侵略思想を捉えてアジア解放を主張しながら、アジアへの優越意識を秘めた日本は、その矛盾な立場が前述の混合民族論の発展で見られる。尹健次氏は「大東亜共栄圏」という造語を「キャッチフレーズ」⁵⁰と呼ぶ。この美名のもとで「日本民族」はアジアの盟主的地位を占めて「混合人種」の方向を進める。民族の融和を象徴しているイメージをも「天皇」に付与し、天皇における「一視同仁」の「抱擁力」を無限に引き伸ばして「大東亜共栄圏」の諸国は平等の立場が獲得できるという想像は、要するに「きわめて観念的な同化政策肯定の志向を内包していた」⁵¹。

日本の伝統を利用して大東亜共栄圏内の精神的統一を求める以外、混合民族論は徴兵や動員を行うには便利であると小熊氏が考察した⁵²。この論説を提唱していた論者において、徳富蘇峰は「現在大和民族は、必ずしも単一の種族ではなく、凡有る種族の混一、化合したるもの」と呼び、「一種の合金」と称賛した⁵³。軍事思想家、関東軍参謀や参謀本部作戦部長を歴任した石原莞爾は日本民族が南北種の混合で両者の長所を兼備した民族だと唱えた。哲学者西田幾多郎は戦時期の論考で、大アジア主義者が鼓吹してあげた「島国根性の打破」と「八紘一宇・一視同仁」の民族政策も現われる。例えば、「我国家の成立史に於て見るに、異種異民族の闘争征服と云ふ如きことなく、それ等が天孫族の下に統一融合して一民族を渾成するに至つた」というのである⁵⁴。

この時期で、大日本帝国は「単一民族の国家でもなく、民族主義の国でもない」、むしろ「天皇家中心の民族同化主義」の理念を持った国家になっていたと考えられる⁵⁵。しかし「混血」を拒否していたうえで、混合民族論への反発が抬頭した。優生学系の勢力が盛り上がり、皇民化政策の高まりとともに混血の恐

⁴⁹ 鈴木麻雄「大東亜共栄圏の思想」『近代日本のアジア観』、ミネルヴァ書房、1999年、p. 258。

⁵⁰ 尹健次『民族幻想の蹉跎—日本人の自己像』、p. 150

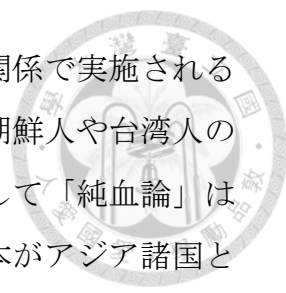
⁵¹ 同上、p. 77。

⁵² 小熊英二『単一民族神話の起源』、新曜社、1995年、p. 325-331。

⁵³ 徳富蘇峰、『国民小訓』、民友社、1925年。上引、p. 325。

⁵⁴ 同上、p. 326-327。

⁵⁵ 同上、p. 329。



れが大きくなっていた。また、もともと軍隊の陣容を強める関係で実施される徴兵制は、日本軍隊の組成が「日本民族」の軍隊ではなく、朝鮮人や台湾人の軍隊になることを怖れる。小熊氏は以上の混合民族論に反対して「純血論」は出現の成因を整理する。帝国の内部における雑音が現れ、日本がアジア諸国との連帯や結合をいっそう深化しようとする意図がないではないかと疑える。西欧の侵略に対し、「道義」という名で対抗する偽装された「大東亜共栄圏」の構想は、日本帝国主義の自己拡張の極大的表現である。尹氏が「天孫民族の優秀性を自負する低級かつ独善的」⁵⁶という厳しい批難でみれば、これはある意味で前述の高山樗牛の思想を継承していたと言えよう。

総じて、日本は「新帝国主義」の思想を受け入れて、対外侵略と自民族中心主義を確立した。文明と種族上を言えば、日本は欧米諸国に向かった劣等感を持っていたので、周辺地域のアジア諸国に未開発なところを見なし、自国の利益、国防上の安全保障などの目的を以て統治の正当性を主張した。しかし、植民地政策に関して日本の独自性を強調するために、特有な「同化主義」を発展してきた。つまり、国語教育の施行、日本精神の唱導、天皇への崇拝など「日本化」を指導原則として進めた。太平洋戦争が白熱化になり、「大東亜共栄圏」を構築していた時期では、たとえ民族の解放と平等を宣伝しても、日本本位の最終目標を追求する野心が無視できないと考える。国家の「日本帝国」あるいは民族の「大和民族」を単位にして他の民族を包摂しようとするが、「日本人」の中に内包している排他性が強く存在している。「日本人」意識が膨張しつつある。では、その内実が改変したか。次の第三節の作品分析によってこの問題を観察したい。

2. 2 戦時下の文学者動員

前述の通り、新帝国主義の風潮は国民に偉大なる国家を創る情熱をもたらした。政府は戦争に献身する国民の意欲をかき立てるために、社会のあらゆる面の統制を強化し始める。軍部が総力戦構想を企図した時期は、日本ではまさに

⁵⁶ 尹健次『民族幻想の蹉跌—日本人の自己像』、p. 158。

大正デモクラシーの昂揚期でもあった⁵⁷。一部の軍人と民間右翼は「国家改造」による政党政治を打倒し、十月事件、血盟団事件、五・一五事件などクーデター計画が相次いで起こった。事件は形成した背景が異なっているが、その基本目標は、反政党内閣、反資本主義、反共産主義をかかげ、究極的には軍部独裁政権を樹立することにあつた⁵⁸。政党内閣も完全に形骸化していた。

日中戦争から、戦争の態勢は持久戦の段階へ移行し、緊急事態に突入したので、戦局の展開に応じる方法を探さなければならなかった。日本国内における総力戦体制の構築はついに解決すべき課題となった。1931（昭和6）年9月「満州事変」の勃発は、民衆動員と組織化にとって画期的な意味を持っていた。その後、第一次近衛内閣が1937年に行わつた政策「国民精神総動員運動」は「国体明徴、日本精神ノ昂揚」の標語で開始した。木谷順一郎氏は総力戦体制を確立するための日本的課題の特質として、権力の集中・物的資源・人的資源の三点をあげた。つまり、国務と統帥の矛盾をいかに解決するか、物的資源はいかにして自給自足を達成するか。そして、人力の部分は、国民の思想動員が天皇制イデオロギーによって築きあげると総括する⁵⁹。翌年、国民総動員法が制定され、政府は物資・資金・言論と労働力に対する無制限な国家統制を図つた。

官制国民運動の発展では、文学との影響関係の中に一番密接なのは思想上の統制である。早めに1933（昭和8）年齋藤内閣は、思想対策協議委員会を設置した。それを先例として、徹底した思想取締方策が施され、具体的には治安維持法の改悪による同法の適用範囲の拡大、刑罰規定の強化が目論まれた。また、新聞に関して記事と広告の取り扱い、用紙使用の制限などの規則が示せれた通り、検閲制度が強化される。1940年10月、大政翼賛会が結成され、日本文学研究会・日本文芸中央会など大きな組織が先後して国家によって結びつかれた。皇道翼賛の国民運動と戦力の一環として思想文化戦線が狙われた。1941年12月8日、太平洋戦争が始まり、戦争はまったく新しい段階に入った。言論・出版・集会・結社など臨時取締法が発令され、言論の封じ込めを策した。翌年、情報

⁵⁷ 中西吉治「国家改造運動—民衆観と改造運動観—」『近代日本の統合と抵抗4』、日本評論社、1982年、p. 70。

⁵⁸ 由井正臣「総動員体制の確立と崩壊」、『近代日本の統合と抵抗4』、日本評論社、1982年、p. 14。

⁵⁹ 中西吉治「国家改造運動—民衆観と改造運動観—」、p. 71。

局の指導のもとに文学者の一元的組織として日本文学報国会が創設された。国策文学の振興に力を入れながら、他方では国家の文化統制はさらに強まっていく⁶⁰。それに、思想対策の第二の特徴は、単なる取締強化にとどまらず、反体制思想への対抗として、「日本精神」＝国体観念を積極的に国民に浸透せしめようとした点にあった。日本精神の強調は、西欧思想全般の排斥、否定へと繋がるものであった⁶¹。

そのうえで、戦争の進展とともに国家の文化統制は思想、芸術、学問上の一切の自由主義的、個人主義的傾向の明らかな弾圧となって現れる⁶²。芸術優先の態度を堅持した伊藤整は、「事変が始まってからのち、(略)文学人は全体として圧迫感に襲はれ、萎縮するやうな傾向が著しかつた」と言い、「虚無的な時期」だと形容した。これは文学者たちは時局に順応ないし便乗することによってその「虚無」を埋めるしかない時代である⁶³。伊藤整が言った「虚無の時期」、あるいは龍瑛宗が嘆いた「文学の夜」は、実は同じ状況を指していた。まるで暗雲が立ち込められるような内地と台湾の文壇で、文学者は自由的に発声する権力が消えていった。

このような状況について、戦時体制下の作品と文学者を論じる場合に、当時の苛烈をきわめた言論・思想統制とその弾圧政策への言及が不可欠の要件であることを戦争文学研究者の都築久義氏は説明する。政府指導者は、一切の言論を戦争推進に向けようとして、戦争も国民世論の統一の絶対条件となる。国民の側からすれば、戦争体制を翼賛する「自由」を除いて全く言論、表現の「自由」は存在しなかったと言えよう。その反面、一定の国家や組織に属される構成員にとって、無制限・無限定の言論・思想の表現の自由は本来ありえないのである。当時台頭した民族主義思想は多くの国民の共感を得たと都築氏が推測する。「あの戦時下、知的青年やインテリゲンチヤを含む大多数の国民が、国家民族の危急存亡を意識し、民族主義的主張に耳を傾け、狂喜し、興奮し」て、

⁶⁰ 市古貞次ら編『増訂版 日本文学全史6 現代』、學燈社、1994年、p. 263-265。

⁶¹ 由井正臣「総動員体制の確立と崩壊」、p. 15-16。

⁶² 曾根博義「戦前・戦中の文学—昭和8年から敗戦まで」『昭和文学全集 別巻』、小学館、1990年、p. 380。

⁶³ 同上、p. 381。引用する部分は伊藤整が1939年（昭和14）に書いた「日本文学の現在」から抜粋する。

これも「一つの言論であり思想であるということである」⁶⁴と認められる。自発的な国民は、決して政府・権力の指導や弾圧に屈服させたというわけではなかった。要するに、戦時体制下の圧迫を論難するときには、制度の問題しか取り扱わないにもかかわらず、内容の価値観、作者が国家の方針に対して賛否する態度にも見逃せないと考えられる。

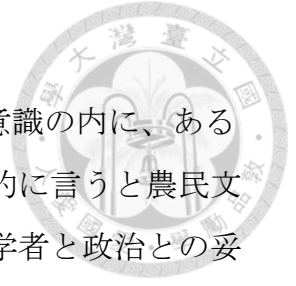
文壇の新体制が形成されて、戦争を支持する世論も社会に溢れてきた。文学者は文学者なりの身分のほかに、新たな任務を与えられた。それは、日中戦争が始まってから従軍作家は国家の要求によって集められ、いわゆるペン部隊が組織されたのである。文学者は新聞や総合雑誌からの委託を応えて次々と中国に派遣されてから、彼らの「現地報告」がそれらの誌面に掲載された。銃後の国民は前線の戦闘や将兵の活躍していた姿に対する強い興味を持っているので、「ルポルタージュ」という斬新な記録文学や圧倒的な迫力に富んでいる戦争小説も読者に生々しい現場の刺激感をもたらした。しかし、戦争中に発表されたものが軍部による厳しい制限で審査を受けた。国民に有害だと思われる事実がすべて省略されたと曾根博義氏は提起し、戦争の暗黒面を削除された「虚偽の記録」として批判する。

例えば、丹羽文雄は漢口攻略のときに陸軍部隊に選ばれ、その後もさらにソロモン海戦に参戦し直接に砲火を浴びた。台湾に滞在していたうちに、従軍の感想に基づいた時局講演を発表した彼は、作品の『台湾の息吹』に常に戦争に参加した人間の誇りを流露してきた。曾根氏は文芸者が大量に戦地に送られるという前代未聞の施策に対して、「計画が発表されると従軍作家は新聞に大きく取上げられてマスコミのスターになったので、作家たちの間でも人選についてあれこれ噂が飛交った」という観察を提出する。要は、選ばれて従軍することは作家が文壇で重んじられている証拠であり、国民としても名誉なことだと考えられる時代になっていたのである⁶⁵。

では、文学者が処した時代背景のもとに創作してあげた作品について、吉田精一氏は国策と戦争の関係で導かれた文学と芸術の壊滅を述べる。

⁶⁴ 同上、p. 9。

⁶⁵ 同上、p. 385。



戦争文学と並んで生じた新しい現象として、文学意識が無意識の内に、あるいは意識的に変わってきて、国策に順応する文学——具体的に言うと農民文学・生産文学・大陸文学・海洋文学——などの、作家・文学者と政治との妥協から生まれた国策文学が次々と誕生した。こういう事実は純粋な文学的意義から言うと、芸術的衰亡・後退と言わざるをえない⁶⁶。

また、文芸評論家の平野謙氏が「国策文学」の大きな文学的マイナスは、生硬な素材主義を強引に押しきった方法上の鈍感にあったと批判する⁶⁷。ダグラス・L・フィックス氏は「このような当局の戦時計画による産物を読み解くことは決して容易な仕事とはいえず、しかも作品分析の責任にもっとも耐ええると思われる人々は、往々にしてこういった作品をまったくつまらないものと感じるのである」と直接に批評する⁶⁸。

作品の中に面白みの欠如は、国家勢力が文学の形成過程に介入していることが明らかに観察できるが、そのような変化に乏しい題材は読者にとって読みにくいものではないかと疑う。言い換えると、この種の作品はある意味で作者たちは「国家」への忠誠心の表明を象徴するものであろうと考える。

2. 3 内地人の作品分析

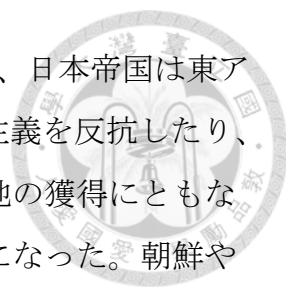
陳芳明氏は「アジア」「東アジア」と「大東亜」という三つの名詞を説明することがある。「アジア」は単なる地理上の観念であり、「東アジア」は政治上の暗示として、日本軍閥が樹立する南進と西進政策の確立を指すものである。そして、「大東亜」は膨張的な意味を含め、日本帝国が戦争を利用して異なる文化が異なる地域を統合する意図を反映する⁶⁹。欧米列強から新帝国主義の思想を学んでいざ日本人は、そのときから愛国心を育てて、劣等感から優越感への気性

⁶⁶ 吉田精一『日本の文学7 市民の文学〈第2〉』、至文堂、1967年、p. 199。

⁶⁷ 平野謙『昭和文学史』、筑摩書房、1975年、p. 230-231。

⁶⁸ ダグラス・L・フィックス「徴用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」『よみがえる台湾文学—日本統治期の作家と作品』、東方書店、1995年、p. 136。

⁶⁹ 陳芳明『東亞文学の実像與虚像』、聯經出版、2013年、p. iii



をも培養した。「大東亜戦争」における思想戦の面から言うと、日本帝国は東アジアの有色人種を統率して指導する地位を占め、西洋の帝国主義を反抗したり、自国の侵略と拡張を無視した結果だと考えられる。海外植民地の獲得にともなう、日本帝国での「内地人」はついに新たな「支配階級」になった。朝鮮や台湾のような支配地域の住民が「外地人」として「帝国臣民」に統合されたので、「内地人」の国民意識や民族意識に少なからぬ変容をもたらした⁷⁰。

すると、「帝国臣民」の範囲は「大和民族」である日本人に限らなかったゆえ、「内地人」が異民族への認識を余儀なくされた。本島人と在台日本人とは違って、内地人は台湾に滞在している時間が短った。なので、彼らの観点は自身の過去の経験や認識を内包されている。最初からもそれによって台湾の物事を判断するが、台湾に着き、文化・政治・植民地社会の流れなどの衝撃を受けられてから新たな観察が出現する。このような微妙な心理的变化は当該地域の民衆に接すると、大きな反響を起こした。

丹羽文雄と佐多稲子の作品は、戦時下において日台の交流を見証した記録であったと認められる。これは双方の理解に基づいた交流、あるいはまるで一方通行のような思い込みであろうか。佐多稲子は戦後、戦時下の文学者動員を回想して、作家の立場と現実の事態が交錯した実相に触れる。

文学は敗北したといわねばならないだろう。しかしこの敗北はまた、単に軍支配の圧力に屈したとだけ見ることもできないという気がする。軍支配の圧力との関係だけで見れば、それは屈服となるが、文学者のそれぞれの主観には、もっと微妙なかげりがあったにちがいない。事実、文学者は好むと厭とにかかわらず、軍支配によって動員された。それを拒否する場は日本になかった。⁷¹

国家動員という大前提に基づいた時局で、文学者の主観は常に熱狂的な雰囲気
に覆い被されてしまった。時代の風潮において、個人の所感はたいしたもので

⁷⁰ 『日本国民論—近代日本のアイデンティティ』、p. 90。

⁷¹ 佐多稲子「戦時下のこと」『太平洋戦争の時代：写真記録 第三篇 研究と解説』、日本図書センター、2010年、p. 1。

はないかと考えられて、集団内の雑音が消えていたという当局は望んでいた結果も完成される。だが、この種の作品を解明しようとするときに、文学者の主観を取り戻して、当時のテキストをあらためて理解できよう。



2. 3. 1 丹羽文雄『台湾の息吹』

早稲田大学国文科を卒業した丹羽文雄（1904-2005）は、1938年（昭和13）に内閣情報部より従軍作家として漢口作戦へ派遣された。1940年に日本文芸中央会が文芸家組織の一元化を図り、文芸組織を集結する。丹羽文雄はこの前に加盟団体の一つの大陸開拓文芸懇話会に参加し、積極的に文章報国の事業に従事した⁷²。1942年、海軍報道班員の丹羽はラバウルへ赴き、第一次ソロモン海戦で顔面と両腕を負傷したので、その体験に基づいた小説「海戦」を書き、第二回中央公論社文芸賞を受賞した。作品は、心理描写を中心として誠実に戦争を写そうとしており貴重な記録文学となっている⁷³。石川達三は「文学者の挺身」の一文で、「軍人が命をすてて、より大いなる命を生きると同様に、作家は文学をすてて、より大いなる文学精神に生きなくてはならない」⁷⁴と強調し、「丹羽文雄はソロモン海戦の最中に艦上で備忘手帳をつけていた。数人の作家は壮烈なる文学魂だと評した」ことを提起した。また、第二回大東亜文学者大会の期間に、「戦争第一であって、勝つことが第一である」と鼓吹した丹羽文雄は、国民の敵愾心を絶えずに維持し続けるために「米英罪悪史の記録的小説作製」と提案した⁷⁵。

戦争期に大活躍の姿勢を保っていた丹羽文雄は、心身ともに帝国の方針に支えた態度が明らかではなかろうかと考える。彼の台湾を訪れた契機は、1943年に「日本文学報国会」台湾支部が成立されて、日本と台湾の組織が合作して「文学報国講演会」を催したので、報告会部長の戸川貞雄・庄司聡一らとともに渡

⁷² 大陸開拓文芸懇話会とは、伊藤整・荒木巍・福田正夫・高見順の四名が拓務省の斡旋で創立した会で大陸開拓に関心を有する文学者が会合して関係当局と緊密なる連絡提携の下に、国家的事業達成の一助に参与し、文章報国の実を挙げることを目的とした。桜本富雄『日本文学報国会一大東亜戦争下の文学者たち』、青木書店、1995年、p. 23から引用する。

⁷³ 市古貞次ら編『増訂版 日本文学全史6 現代』、學燈社、1994年、p. 261。

⁷⁴ 1943年8月25日、朝日新聞紙面で掲載された文章。『日本文学報国会一大東亜戦争下の文学者たち』p. 234-235から引用する。

⁷⁵ 桜本富雄『日本文学報国会一大東亜戦争下の文学者たち』p. 251。

台したのである。新竹・台中・台南・高雄・台東・花蓮などのところを巡って講演会が行われた。帰国後、丹羽文雄は台湾をまわった見聞を自叙的な小説『台湾の息吹』で完成した。

作品の基本構成は、主人公の「紋多」が総督府情報課の招聘で台湾講演旅行することになり、同じく四十歳年配の同行者「連れ」と一緒に遊歴しながら、途中に見聞した決戦下の実情を記した台湾印象記になっている。「全島を講演してまはる僕らは、すでに私人ではない筈だよ」と言った紋多は、これが単純な旅行ではなく、政策を宣伝する責任があるのを意識した。魚雷、勤行報国青年隊、桔梗倶楽部、皇民錬成、義勇隊などが色強く描き出されており、まさに時局的な要素を集めた国策を謳歌する小説だと廖秀娟氏はまとめる⁷⁶。つまり、皇民錬成の成果を宣伝する意図の他に、作者の丹羽文雄は紋多の「心境と態度の変化」を利用して、「勤行報国青年隊」からもらった感動を誇大し、いっそう本島人の皇民化を加速しようとしたつもりもあると考える。

詳しくいうと、台湾到着前後、「あまり期待はかけまい」、台湾での目標は「喋るだけだ」という台湾に対してあまり興味を持っていない紋多は、台北帝国大学を見学したときにも相変わらず「これ以上ふかく知りたいとも思はなかった」態度を示す。この立場が転換するきっかけは、「一人の内地人もいない、本島人と高砂族の青年だけの勤行報国青年隊」を視察してから大きな感激を味わうのである。「勤行報国青年隊」を中心に、丹羽文雄は強烈な筆力を持ち、「台湾人を日本人に改造する」可能性を繰り返して論述する。なので、本論文は「紋多」の眼中にまるで旭日のような青年たちと文学者との差異を分析する。もう一つの比較は、台湾に染み込んでいた日本色彩と台湾本地の風土との競い合った現象である。これは「台湾人」と「日本人」の意識が互いに争う表現と見なしてもよいと思う。この二点を以て、丹羽文雄が描いた「理想的な台湾人の日本人像」を討論したい。

2. 3. 1. 1 「勤行報国青年隊」と「文学者」

はじめて青年隊の隊員に接したイメージは、実は紋多の予期より素質が低か

⁷⁶ 廖秀娟「丹羽文雄『台湾の息吹』論」、p. 37。

った。彼らの日本語力があまり高くないし、日本語で「己の感想や希望や覚悟を、己の胸に畳みこむことが出来るのであろうか」と疑われる。それに隊員の表情も紋多の注意を引く。



潑刺さに乏しく、厳格な訓練で膽をぬかれてゐる。自分を烈しく喪失してゐる姿であつた。しかし訓練所の生活に對して否定的な思想をもつてゐるとも思へなかつた。どの顔も懷疑の色といふよりも懷疑以前の彷徨の表情であつた⁷⁷。(p. 504) (下線は筆者)

国策を支持した丹羽文雄にとって、隊員たちは活気のない様子が訓練所を否定することによって導かれるのは不可能である。では、なぜ彼らの顔は「懷疑の色」より「懷疑以前の彷徨」だろうか。あることに対して「懷疑心」の誘発は、とりあえず物事に対する「理解」が必要だと思ふ。青年隊にいる隊員はまだ「タブラ・ラーサ」(白紙)の状態であり、内部の精神は空白である。もしある種の「学習」と「鍛錬」を積まなければ懷疑する能力も發揮できない。このような精神上の空白は、紋多が「人間を改造できる」ということを信じる理由だと考える。先にこの部分を提示して、後のテキストと合わせて分析する。

訓練所の青年隊隊員に対する印象を徹底的に逆転させる場面は、彼らの躰の良さである。紋多と挨拶したときに、あぐらをかいていた姿勢を正座になおし、日本流にきちんと頭を下げた。その下げ方に卑屈な感じがなく、颯爽として見えた。驚いた紋多は次に講堂で神前行事を案内される。隊員は給与された作業用着に巻ゲートルをつけて、整然と並び静坐して咳一つなかった。すると、すべての隊員は神棚に向けて、「両手を前におき、互の親指と人差指をくつつけて小さい三角形をつくり、その中に鼻を埋めるやうに低く頭を垂れた」(p. 505)。姿が詳しく描写される以外に、「講堂は水を打つたやうに静謐になつた」と厳粛で神聖な空間を細かく表現される。場面の最後に、日本における代表的な象徴

⁷⁷ 丹羽文雄の『台湾の息吹』は1944年『台湾公論』で発表される。本論文で使ったテキストは、『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集 別巻』緑蔭書房、1998年、p. 491-548。以下には脚注を省略する。

の天皇が登場し、隊員たちは若々しく精力的に明治天皇の御製「新高の山のふもとの民草もしげりまさると聞くぞうれしき」を斉唱した。歌声を聞いて、紋多の反応も十分に強烈であった。



紋多はどきつとして、息をとめた。喉にこみあげてくるものがあり思はず涙くんだ。この御製を、知らないわけではなかつた。唱へたこともあつた。しかし、この御製を本當に謹唱する人間の存在には、今の今まで気がつかなくつた。(p. 506)

これは全文の一つ大きな勝負所だと考える。その後、紋多は台湾の印象が一変する。台湾に出会ったあらゆるの面について評価を加えるときにも「勤行報国青年隊」によって判断する。廖秀娟氏はこれを「基準の獲得」と指摘する。

筆者が興味を持つのは、ここで繰り返して強調される「身体性」の重視である。特に「彷徨の表情」で表現される空無な心理状態と比べて、豊かで完璧な容姿で映し出した行儀の正しさが重んじられる立場は、直接に紋多の「人間改造論」に結びつく。何故かと言うと、隊員の振る舞いを「百の言葉よりも、これなんだ」と称賛した紋多は、まさに自分が以前から持ち続けている信念を証した。それは「人間は変へられ得るものだといふ信念をもつてゐた。人間を鍛へ直す錬成、禁欲、勤行のあらゆる手段に関心をもつてゐた」(p. 505)。人間は「変へられ得る」ものだと認め、変える目標はいうまでもなく「日本人」である。然らば、紋多が指した「錬成」とは、一体「心理」あるいは「身体」を重視するかという質問に対して、答えも明らかに現われると言えよう。

「人間は改め変へることが出来る」なら、その実際の作法は何だろう。わずか三箇月の期間で訓練を受け、国語が十分に操ることができない高砂青年を例としてみると、毎日斉唱する複雑な隊訓が難解すぎ、強引な訓練方式も彼らにとって大変であった。紋多は高砂族青年の胸裡の想いを同情したが、彼はその手段を堅持した。

毎日の斉唱でもたらす何かした大きな暗示は、正確に感知するにちがひない

のである。譯が十分にわからないままに何かの示唆を得るにちがひなかつた。
(略) 単なる労働から、勤行報國のたかい精神にまでせりあがることの出来るのも理性が一つ一つを計算していくのではなく、より正確に、烈しく各自の肉體がめざめ、高いところの位置に達するのではないだらうか。(p. 509) (下線は筆者)

同一の精神状態や民族同化、共鳴共感の境界を求め、勤行報國という崇高な理念を完成するために、肉体の訓練が理性の計算より有効的だと言える。紋多の考えでは、肉体の切り替えは精神の切り替えより鈍重を極める。その結果も「はるかに執拗となる強靱となる」(p. 508)。身体から精神への発展図式は富山一郎氏の考察によって、戦時動員の体制において常に使われた。

動員は意識やアイデンティティではなく規律の問題であり、身体的実践の問題である。しかしここでいう変容は、身体的な問題から次第に意識の問題、意味の問題へと移行する。無意識のうちに慣れ親しんでしまった実践が、戦場における身体の変容にいきつく。⁷⁸ (下線は筆者)

被植民者の精神であれ、意識であれ、これらの心理的状态を直接的に変えることは植民者にとって容易くないことである。特に両者の文化や民族が異なっている。が、植民地統治の支配関係が成立してから、被植民者の身体と肉体も植民者によって従属されている。統治者の強権を用いられて、身体上の改造を強制されることは、むしろ実体のない精神より簡単になり、改造の効果も大きいと思う。そうすると、「本島人」が「日本人」としての「外見」がじきに立ち現れ、日本統治者は「本島人」に対する「理想像」も完成した。さらに、紋多にとってこれは「あたらしい日本人なんだ」。

新しい人間が、ぞくぞく日本人として誕生してゐるんだよ。僕は泪ぐましくなった。ああしたところで同じ日本人としての共感の境地がしみじみ味へた

⁷⁸ 富山一郎『増補 戦争の記憶』、日本経済評論社、2006年、p. 65。

といふことは意外だったよ。(p. 513)



「ああしたところ」であった辺鄙な台湾は、「新しい人間」が誕生してきた。作者の丹羽文雄は紋多の口を借りて、驚異と感動を感じながらも、「以前は手づかみでご飯をたべてみた連中ですが、ここでは日本流に茶碗をもち、箸を使はせてみる」(p. 505) 本島人に対して、思わずにアジア蔑視観が流露した。弱肉強食、優勝劣敗の国際的階層秩序観において、世界を文明と野蛮の対立に分けられ、日本の使命感と優越感が再び強調された。

また、紋多の語によると、台湾の住民は単なる「日本人」ではなく「新しい日本人」になってしまった。「日本人」と「新しい日本人」との間に、そのきっかけは「新しい」という言葉だと考える。民族の要素に加えて文化上でいえば、「台湾人」は元々「日本人」ではなかった。もし「日本人」になったら、それは「異質」の日本人でしかならなかった。日本人と完全に「同質」の人間になる可能性はあまりないと思う。すなわち、「民族」は先決的になり、「新しい」日本人になる条件となった。ここで、日本人は台湾人の「本質＝民族」について否定的な態度を持っていた。

勤行報国青年隊を見学するまえに、内地の内原訓練所以上のものは期待しなかった紋多はここまで、両者が「同一に考えてみた」。もし台湾人が自己を改変し、日本人の暮らし方と思いを共感することができるなら、上下関係の束縛から解放される契機が訪れる。

祈の詞、拍手、拜禮、黙想のあひだにもおそらく彼らのうちの何人かの本島人は、これまで本島人なるがゆゑの卑劣感とひがみに苦しめられてみたであらうか。入隊以来だんだんと苦しみから解放され、解放されていく生甲斐をしみじみと味つてゐる風であつた。(p. 508) (下線は筆者)

内地人の紋多は、「或はこれは、外来者の思ひすごしであつたらうか」と検討し、それは都合のよい解釈の可能性があったが、「本島人の卑劣感とひがみ」の苦境から解放させる道は「新しい日本人になる」と宣言する。

さて、「勤行報国青年隊」は紋多の心に比類の無い存在になった。物語のなかに青年隊と互いに比較される対象は、本島人文学者の周である。はじめて出会ったときに、周の様子を詳しく描かれる。



ちょっと見は獐猛な感じたが、よく見ると瞳に唇の皺に、色の黒さに、苦労のあとの人間的なやさしみが滲み出てゐた。喰へない顔だが、信頼もできる顔であつた。絞れば絞るほど水気の出る古手拭を思はせる顔である。内地の或る小説家の顔によく似てゐるのに気がついた。(p. 499)

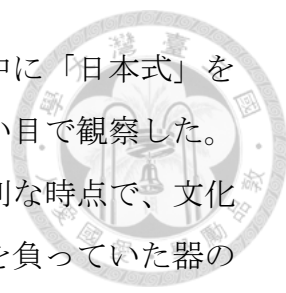
しかし周がもう一度訪れられ、紋多は彼の顔をみているうちに、「肉體が或る程度硬化し、感受性を失つてゐる」と知識人の悲しみを深く感じた。青年隊員の肉体と比べてかなり弱いし、年齢が若くなくて、皮膚も堅くなつたと評される。

周のやうに大人になりきつてしまつては、もはや内部よりの変化に期待をかけるよりほかに方法はない(略)周のその努力がすべて精神方面に限られてゐることが、紋多には切なかつた。(p. 513)

前述のように、「身体から精神へ」という改造の図式では肉体の錬成が大いに重んじられる。作家の周が劣位に置かれる理由は、まず「少しばかり早く生れてきた」ので、柔軟な肉体を失い、改造される好機を喪失した。第二に、内在が「白紙」のような青年隊員たちと異なつて、「知識人」は精神構造が複雑な人間であつたゆえ、改造しにくいタイプだと考えよう。内面の充実は世界に対する認識が青年隊員よりはるかに多く、「国家」「民族」意識に関わる意見や考えも多いと推測できる。だから「周の不幸！周のやうな不幸！」と何度も叫んだ紋多の考えでは、周のことを惜しいと思ひながら、周のやうなすべての「知識人」も「日本人になる」チャンスを無くしたことに対する遺憾も表した。

2. 3. 1. 2 台湾風土における日台の融和と競争

台湾を巡歴していたうちに、その風土を直ちに親しだ紋多は、「勤行報国青年



隊」に魅了させてしまった。そのほか、領台五十年の歴史の中に「日本式」を象徴している物事も台湾に沁みていた状況に関して、彼も鋭い目で観察した。台湾の土地柄といい、外来者の日本文化といい、戦時下の特別な時点で、文化はもっと深い意味を含めて、まるで人間・政治・思想の意識を負っていた器のようなものだと思う。換言すれば、「人」をめぐって日本意識と台湾意識を討論する一方、人間の思いを映した風物にも見逃せないと考える。以下は、三つの段落をとりあげて分析したい。

第一に、物語のはじめ、紋多は知り合いの岡田東一と巡りあい、「臺灣の風土が、君の精神の上にもうまく合つてみるとみえる」「君はまるで生れた時から臺灣にゐる人間みたいだよ。東京時代の君は、結局借りの住ひだつたんだね」と友人ののびのびとした顔色によって驚かれた。あくせくしない美点を屈託なく伸ばしている友人は、なぜ台湾には腰が落ち着いて見えたか。紋多の結論は以下のように示す。

臺灣の抱擁力か。頭で生きるよりも、先づ肉體に生きる岡田の生き方には、臺灣の風土が適つてゐるのではないか。(p. 501)

これも「肉體」は「頭＝精神」より優先だという論調である。身体上の修練は民族改造の手がかりであるが、ここで台湾は「肉體の成長」にふさわしいところになったという結論を得る。台湾の風土は異民族の「肉體派」を納めた「抱擁力」があるばかりか、一步進んで「生命力」も持っている。

次は、台中の宿で庭に植えた樹木は紋多に不快感を与えた場面をみてみよう。

せまい庭に、樹木が窮屈に繁つてゐた。臺灣の風土を考慮に入れずに建てた日本家屋のみじめな敗北の姿をさらしてゐた。樹木は日本風の家屋に少しも気がねせず、のびるだけ伸びてゐた。傍若無人の生活力であつた。(p. 516)

廖秀娟氏はこれを「植民地の逆襲」と指す。日本風の家屋はこの庭で存在感が薄くなるが、読者の目は台湾の風土に順応し、気ままに伸びている樹木に奪わ

れる。それはまさに、植民地の一つの勝利を暗示するものであったと廖氏は指摘する⁷⁹。「植民地の勝利」であるかを別にして、筆者が「肉体」の問題をここに置いて検討してみたいと思う。

前述の考察をみれば、体調が良くて若やかな肉体は「日本人」になる要件だと認められる。ただし、台湾の「抱擁力」は日本の暮らし方に適さない「日本人」を受け入れる。それに、台湾における「傍若無人の生活力」は日本式の造景と規定を不覚して自由に成長していく。この二点について考えれば、身体的、肉体的な特質を帯びる台湾は、日本に比べて優勢がないとは言えないだろうか。作者の丹羽文雄は「台湾人の肉体の塑性」を頼って日本人改造の目標を達成すると思った。実はこの力は日本を反撃するおそれがあると予見する。

以上は、台湾の風土の力がすこし植民母国の勢いより強かったと見えるが、以下の段落は華麗な筆致で描かれる日本を代表する「太陽」を取り上げる。「本島人の生活の匂ひのまん中にゐた」紋多は、黄昏のときに「鄭成功の武威は思ひ出さず、鼻のつかへる窮屈を感じた」赤嵌樓を見学した。

灼然した太陽が(略)血のやうな赤色で、ぼつかりとはふり出されてゐた。(略)晝間は白く灼けながら、人間からはるかにはなれた様相になつてゐるが、いま眺めやる太陽は、繪にとらへられた太陽があつた。人間の手でとらへることのできる太陽の色であつた。人間的な色調であり、中天に灼然してゐる時よりももつと太陽らしかつた。太陽と人間の融和の美しさが捉へられる瞬間であつた。その融和がはるかとはくに見えれば見えるほど、精神的な透明な、美しいかがやきが増すやうであつた。(p. 528-529)

鄭成功という日本に深い関連を持っていた人物に関わる場所で、日本政府の指導や統治に際して恩威の象徴の「日の丸」を筆を尽くして描写される。その政治的な意味がいうまでもなく強いだろう。「日の丸」の旗を象徴する太陽は、「威厳と恵み」をアジア民族に与えながら、彼らの尊崇、畏敬の念も要求される。

⁷⁹ 廖秀娟「丹羽文雄「台湾の息吹」論」p. 35-36。

故に「太陽の如く偉大な強い荘厳な威力」である日本の統治が正当化される⁸⁰。「二度と忘れることの出来ない内面的な風景であつた」と称賛した紋多にとって、いわゆる「内面的な風景」は実際に精神的意義の色彩が濃いものだろうと思う。この段落で作者は太陽の美しさと荘重さを具象化しながら、太陽の色が「人間的な色調」をも強調する。太陽は日本という国家の代表的な象徴として、一般的には触れられない存在のように脅威感が生じやすいので、「太陽と人間の融和」と書いてある作者の企図はその距離感を打破し、植民地の民衆に親しいイメージを作ると言えよう。

純然たる「日本色」を塗りつぶされた台南の赤嵌樓に台湾の夕暮れを見てから、「太陽と人間の融和」の具体例が出現する。古い市街に歩いた紋多は、「どの家の部屋のつき當りの壁にも、日の丸が掲げてあつた」に気づいた。

どの日の丸も色が黒くなつてみえた。しよつ中線香や護摩を焼くせみか、その家の生活の色がしみつくわけか。祖先の位牌を祭る壇上のはるか上部の壁にある日の丸は、どぎつい感じではなく、すでに家族のものと溶け合ひ、見なれたものになつてゐた。紋多は色の黒くなつた日の丸から、おびただしい言葉を聴く思ひがした。——皇民鍊成！（p. 530）

半紙で印刷した日の丸は家々の壁に張って、しかも位置は祭壇の上である。ここに至って、「日の丸」は本島人の信仰の中心に侵入した。このような精神上的改造は、国策の宣伝あるいは複雑な理想を使わず、むしろ太陽の光が台湾の各地に及んでいる簡単な表象によって述べられる。つまり肉体改造の反復性と同じ概念で使う。何故かと言うと、「日本精神」とは何かという問題について、作者の丹羽文雄は深くその問題の内実を解釈したことはないようである。そのため、「太陽＝日本」への賛嘆は表面化したものになってしまい、作者の感情を述べるものだけである。

⁸⁰ 鈴木麻雄「大東亜共栄圏の思想」『近代日本のアジア観』、p. 257。

2. 3. 2 佐多稲子『台湾の旅』

佐多稲子（1904-1998）は、1928（昭和3）年処女作「キャラメル工場から」を『プロレタリア芸術』に発表し、文学者として出発することになる。この後、プロレタリア文学者の身分として文壇に活躍した。が、1935年（昭和10）に逮捕され起訴された後、転向時代の重苦しい空気の中に悩んでいる。佐多稲子は戦後、この期間の生活を「内容的に激しい変化をたどらねばならなかった」と告白した⁸¹。戦時下、文学協力の活動に参加した。1941年、佐多稲子は林芙美子らとともに戦地慰問で満州各地を旅行する。翌年、文芸講演会のために台湾をまわる。そして、軍当局、軍報道部から派遣されて真杉静枝らと中国、林芙美子・小山いと子らとシンガポール・マレー・スマトラという戦地を訪問する経験もある。第二回大東亜文学者大会が開催されるときに、代議員として出席する。

『台湾の旅』は文学上の構成が丹羽文雄の『台湾の息吹』に近似している。物語の話者といえば、「紋多」は作者自身に擬する主人公の役割を担ったキャラクターである。『台湾の旅』で話者の「私」の名前は「宮川」であるが、実は作者の佐多稲子のことを指すに違いないと考える。第一人称の形で『台湾の旅』は作者の体験記に近いと推測できる。台湾を回しているうちに「皇民化運動」を着目するより、旧友との交流、異国文化の刺激、旅情の叙述は物語の重心であると観察できる。

「私」が台湾に到着したときに、「紋多」のもどかしさとは違って、「臺灣はすでに久しく私たちの胸に親しいものになつてゐながら、その親しさの故に劫つて異国的な期待を重ねさせてゐる」（p. 453）⁸²という楽しみにしていた様子を表す。台湾での滞在に、主として台湾に住む日本人が互いに労りあつて生活していることを見抜いていた。台湾のことを「この島はまことに和やかに甘き土地である。そのうへに豊かなバナハの房、パイナップルの華麗な列、そして米」

⁸¹ 佐多稲子「戦時下のこと」、p. 1。

⁸² 佐多稲子の『台湾の旅』は1943-1944年『台湾公論』で発表される。本論文で使ったテキストは、『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集 別巻』緑蔭書房、1998年、p. 451-487。以下には脚注を省略する。

(p. 481) や「私を幸福感に頬笑ました砂糖の國である」(p. 485) と描出されながら、工業化に進んでいる台湾を「全島が農事的な生産によって偽つてゐる」とし、「それが旅人を楽なおちついて氣にもされる」と捉えられる場合もある。

また、プロレタリア文学出身の佐多は『台湾の旅』の中に階級意識を露出している。満州を旅行したことがあったので、台湾の住民を接触するとき過去の経験と互いに対照している。例えば、植民地の酒場の女や人力車の車夫に対する描写は、性別、権力関係と階級意識などの色彩を帯びている⁸³。労働者階級への関心のほかに、「正しい国家意識」の表現も作品の中に織り込まれる。では、作品の中の戦時下の「日本人化」の台湾人をどう描かれるか。


例を挙げると、旅の途中で発熱してしまった「私」は、ホテルで本島人青年のボーイの世話を受ける。この青年は性質が穏やかで、志願兵の試験に合格した若者である。物腰が謙譲であった様子は「内地」の模範青年のように見えた。そして、「女なども支那服をきてはゐるが、そしてその話す日本語も片言ではあるが、どこかその感じには、彼ら特有のものが薄れて、言つてみれば私たちに親しいものになつてゐる」(p. 465) という例もある。この人々と出会った主人公は、「この本島人がもう内地人に似てきてゐる、ということは、この地で私の接する本島人の誰にも感じられることだつた」(p. 465) (下線は筆者) という感想ができる。

そして、佐多稲子も戦時色が植民地社会に浸透していく場面を描いた。「私」はある日、台東のうらぶれた活動小屋で高砂族の青年に話をする。新聞社の人々が演説の中に天皇の御名を言うと、館内の反応は、

ざざつと、ひびくやうな一齊の音がした。それは聴衆の皆の人が一齊に居ずまゐるをなほす靴音だつた。青年團員たちは、黒い顔だけれど、團服に身を固めた凜々しさだつた。(p. 471)

というのである。次に、自動車の旅路では本島人の村の休み茶屋というような

⁸³ 許麗芳「殖民時空下の多重視角—佐多稲子〈台湾之旅〉(1943-1944)的台湾書寫」、『興大人文学報』53、2014年9月、p. 158。



店で、「私」は鄙びたうまい汁を啜ったり、西瓜を食べたりした。そのとき、「村の小學校には國旗が掲揚されてみて、本島人の學童の君が代の歌聲が聞えてみた」(p. 487)。では、作者は以下の段落を以て、旅路に出会った色々な「皇国」のために奮戦している人間像をまとめる。

臺北のホテルのボーイで、表情も日本人に似て謙讓で落ちついてみた本島人の青年が、志願兵に應召してみたことや、高砂族の青年團員の訓練された統制の姿や、本島人の女たちの男と見ちがへるやうな逞ましさに田仕事や土木工事や工場に働いてゐる姿などに、敢へてこの地に挺身してゐる内地人のことにはふれずともこの島の活気は見られるのであるが、全體に燃え上がる活気が、騒々しく旅人を落つかせないといふことはない。(p. 481)

以上のようないろいろな場面で、台湾社会の「内地色」が溢れている状況をわかる。では、本当の内地人の作者は、国語を使ったり、天皇を尊敬したりする本島人に対する直接的な評価は「本島人がもう内地人に似てきてゐる」というのである。「内地人である」「内地人になる」を使わず、「内地人に似てくる」という言葉を用いる。前の節で討論したように、「大東亜戦争」という大きな架構の下に「共栄圏」の中の民族融和を求め、しかもほかの民族を「日本人になれる」と要求した日本人は実に「民族」と「血縁」を甚だ重視する。それゆえ、本島人は理想的な皇国臣民のイメージを完成しても「内地人に似ている」とどまり、本当の日本人になれると推測しても過言ではないだろう。

さらに、軍事上や産業上に動員される本島人や高砂族の姿に対して、旅人である「私」は「この島の全体に燃え上がる活気」を感じて落ち着いた。国家の動員体制に帰属される植民地台湾の本島人に親しい感じを持つ原因の一つは日本語の使用からみると、作者は「台湾人」が「日本人」の一員を内包する事実を受け入れる。では、「台湾人」が「日本人」として認められる過程に、「私」は人間の性格が変えられると思うが、その不確定性も感じる。

人間の性格といふものは、何と環境の作用を受けるものなのであらう。それ

は人間の悲しみであり、そしてまた人間の、雑草の強さにも似た逞ましさである。(p. 465)



ここは、人間の「民族」「血縁」「身分」などの国策的な言葉を使わず、「性格」を用いる。つまり、佐多稲子の考えでは、民族とは先天的な要素として変えられないものであるが、性格の中の感情や意志は後天的なものであるゆえ変えられる。また、「改変」の原動力は「環境の作用」であると作者は表明する。帝国は、植民地の環境を恣意的に改造する権力がある。なので、「雑草」という比喻を利用して人間の強さを感嘆する作者の姿勢が現われるが、環境に従って自分の性格を変えることを迫られる「台湾人」に対して同情の念を持っていて、国家の「人格改造」にやや不賛成の雑音が隠される。

戦時の女性は、国民国家の事務に参加して積極的な姿で表われ、それにもなって女性の地位が向上していたが、民族と国家の問題を向かうときに、かならず矛盾を遭遇した。動員される男性作家と同様に自由に創作するチャンスがなくなり、当局の指示で国策に協力しなければならなかった⁸⁴。故に、佐多稲子は『台湾の旅』に「私」の嘆きを借りて、女性の身分で作家という職業を選んだ辛さを描き出す。

文学の仕事などといふものは、世間の常識からみれば、危かしくもあり、世上の幸福にははづれることもありがちなのだ。それが女であればなほさらのことで、女ひとり文学の道に生きてある、そのことの辛さは端のものには解してもらへない。(p. 484)

戦後の佐多稲子は、「戦時の作家」という職業の真実を打ち上げる。

作家などという特殊な職業のもの、殊に私自身の、つい先頃まで治安維持法で警察につながっていたような立場に対して周囲の目は、複雑にそそがれていた。私はこれに負けたとおもう。周囲の複雑な視線に負けたと同時に、周

⁸⁴ 同上、p. 162。

囿の悲しい事実に対して主観的に負けたとおもう。⁸⁵



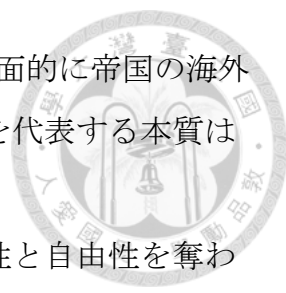
国家の力は文学者の想像に介入しはじめる時点から、文学者が思ったもの、考えたもの、創作したものは直ちに国家の意志を反映される。丹羽文雄と佐多稲子との間に最大の相違点は、佐多稲子が「国家の意志」を受けたが、それを完全に内面化されていないことである。言い換えると、国家の意志に対して少し抵抗感を持った佐多は、淡々と戦時の風景を描いていた。例えば、体が弱い作者の共感を呼び起こす龍山寺の仏像の顔について、「神像といふよりは、もつと人間に近い相をしてゐた」「その面立ちは日本の顔に似てゐた」(p. 456-466)と形容される。「知本温泉の橋のあたりでは、目の鋭どさに、妖しい美しさを發揮してゐる若い高砂の娘に行き合つた。その美しさは妙に近代的なものであつた」(p. 471)という定型化された蕃人のイメージを一掃される。国家が要求される内容や政治的態度を満足しながらも、佐多稲子は巧みに自分の思惑を作品に加える。

2. 4 結び

明治維新を経て近代的な国民国家となった日本帝国は、新帝国主義の洗礼を受けてから海外植民地の略奪しはじめる。西方の列強諸国と比べて文明や肉体上における劣等感がずっと日本人の心の中に存在していたので、植民地を統治する手法は「文明化」より「日本化」を優先する。大和民族の誇りとしての「天皇制」と「国語」によって、独自の支配結構を樹立してきた。また、帝国における「国民」という概念は天皇制の整備に伴い、「臣民化」の路線に進んでいた。このときに形成された日本人のアイデンティティは、個別的、恣意的、運命的なものではなく、国籍や公教育などの国民国家システムと直結し、また言語と文化などを含む歴史的な脈絡で形成されるものであることが理解される⁸⁶。そして、「大東亜戦争」の階段に入り、「大東亜共栄圏」という理想のもとに日本人の優越感は大いに爆発した。東アジアの平等を唱道されるものの、日本中心主

⁸⁵ 佐多稲子「戦時下のこと」p. 2。

⁸⁶ 尹健次『民族幻想の蹉跎—日本人の自己像』、p. 184。



義の野心が露出される。「大東亜共栄圏」の膨張に従って、表面的に帝国の海外領土の民衆は「日本人」範囲が属されるが、実は「日本人」を代表する本質はあまり変わらなかった。

次に、戦時下の文学統制はすべての文学者が創作中の自主性と自由性を奪われる。ただし、動員された文学者たちは全部に圧迫される一群に数えられないと思う。世論や政策を賛成したり、名誉のために献身したりした人もいた。それに、一般的に国策文学の文学性がより高くないと認められるので、発展の上限について相当に疑問を持っている。要するに、作品が読者向けと設定されるというより、国家への忠誠心の告白だと言えよう。

作品の分析では、佐多稲子は理想の「皇民像」の表象しか描かれなく、「台湾人」を「日本人」に改造する方法を論及していない。一方、丹羽文雄は「改造」に関して、自らの見解と方法を提出し、国家施策を積極的に参加する態度を示す。両者が描いた台湾人のイメージも異なる。丹羽文雄は、「日本人になり得るタイプ＝勤行報国青年隊」と「日本人になり難いタイプ＝文学者」と類型化される。つまり、「日本人」アイデンティティの獲得は、身体化された諸実践のなかで想像され、検証され、確認されていったことを確信し、明らかな効果が見える肉体訓練から精神への薫陶を鼓吹する。佐多稲子は、職業とか、本島人とか、高砂族とかの差異を問わず、均質的な目線に用いられ、控え目で「皇民化」の諸相に触れる。台湾人が人間の性格を変えられると認めるが、このことは台湾人の悲しみと逞しさをなお重視する彼女の姿勢は、国策との間にズレが存したと推測できる。また、丹羽文雄は日本人になった台湾人を「あたらしい人間」と見なしたが、佐多稲子は皇民化を受ける台湾人に対して「内地人に似てくる」と言った。つまり、二人の見解を踏まえて、たとえ台湾人が日本人になっても、「民族」という本質的な素性を変えることは不可能だと考える。

第三章 隙間の憧憬—日本に憧れる在台日本人作家

1942年11月3日から10日の「大東亜文学者大会」に参加する台湾代表は、当時文壇上の四名影響力を持っていた文学者である。在台日本人の西川満と濱田隼雄、本島人の張文環と龍瑛宗が選ばれて、「大東亜共栄圏」の各代表と一緒に「帝都」の東京で集まった。日本、台湾、朝鮮のほか、満州国、中華民国と蒙古の作家もいった。この大会の趣旨は、「大東亜戦争のもと文化の建設という共通の任務を負う共栄圏各地の文学者が一堂に会し共にその抱負を分かち互いに胸襟を開いて語ろう」というのである⁸⁷。会場で、台湾文学界の旗手の一人、西川満は「日本語を根幹とする大東亜文学の創建」を提案した。まず、彼の発言を見てみよう。

大東亜の精神を會得するにはどうしてもわが日本語の理解が必要なのであります。(略) 日本と共によろこび日本と共に苦しむとする以上、日本を理解する唯一の鍵たる日本語を學んでこそ、はじめて異體同心の結合は完成するのだ。⁸⁸

日本語の重要性は、日本の代表的な国語学者上田万年の言ったように、「日本語は日本人の精神的血液なり」「外国の文字外国の思想を以て自国の精神思想を養ふことの出来ない」という意見からわかる。日本帝国は日本語に対する重視が「大東亜戦争」時期に新たな歴史上のピークを迎えてきた。特に「大東亜共栄圏」は東アジアの解放と平等を追求するという目標を設定したが、他方では「日本」を中枢として働かせるのを要求する。当時の日本は中国や米英との間に激しい戦争状態の最中であつたゆえ、滅亡のおそれがある。このような危機感と恐怖感を排除するために絶対的な国家観を築き上げられ、植民地の民衆にも深刻な同質的国家意識を持たさせながら、動員の合理化を求める⁸⁹。

⁸⁷ 「大東亜文学者大会報告」『日本文学報国会—大東亜戦争下の文学者たち』、p. 141。

⁸⁸ 西川満「日本語の普及」(大東亜文学者大会速記抄)『文芸台湾』5-3、1942年12月、p. 22-25。
『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四巻』、緑陰書房、2001年、p. 318-319

⁸⁹ 崔末順「戦争期台湾文学の審美化傾向及其意義」、p. 109。

この矛盾性は、西川満が「大東亜文学者大会」で日本中心の思想体系を構築する主張によって見られる。「日本を理解する」ことは「大東亜共栄圏」の中に日本を除いて他の地域の人々にとって優先な要務になった。共栄圏内の「異体」は「同心」の結合を追求する基本的な条件は「日本語」である。この点でみると、「日本人」にとって「日本語」の重要性は再確認されるほかに、文学者にとって、共同の言語を使わないと同一の文化的体系が形成できない。

植民地における教育政策の中に「日本語」から「国語」への道は、かなり政治的意味合いが含まれている。言語学者の小泉保は「日本語」と「国語」という用語を検討する。「国語」を「日本国家の言語」、「日本語」を「日本民族の言語」と定義する。「国語」は国家の政策と密接に関わる一方、「日本語」は単に世界に数多くの言語のうちの一つに言及しているにすぎず、そのような政治的趣旨に適うものではないと主張する⁹⁰。

台湾の「国語」教育政策は、台湾総督府の初代学務長伊沢修二によって建設されたものである。台湾領有初期に、「台湾と云ふものも、最早我国の領土である。即ち台湾の人民と云ふものが、最早我國民となるべき人民である」と主張した伊沢修二は、「此の新領地の民を我皇民の一部として、真に能く同化せしむる事が出来たならば、実に我国は南方に此上も無い大干城を得たと云ふものにならう」という野望を抱いた⁹¹。伊沢修二は台湾が人種的・文化的・地理的に日本に近いという主張をとり、教育に対する強い使命感を持った。台湾上陸直後の1895年7月から学校を開いて日本語教育を開始し、翌年3月には国語学校に改組した。結果的に、彼の構想は当時総督府の財政状態からいって野心的に過ぎたので、すべて実現しなかったが、彼の理論は後の「皇民化運動」の先導役となったと考える。

新領土の秩序を維持するには（略）威力を以て其外形を征服すると同時に、別に其精神を征服し旧国の夢を去て新国民の精神を發揮せざるべからず。即

⁹⁰ フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本語文学』、慶応義塾大学出版会、2007年、p. 161。

⁹¹ 前は『伊沢修二選集』p. 592、後は1895年11月の講演である。『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』、p. 95 から引用する。

ち之を日本人化せしめざるべからず。彼等の思想界を改造して日本人の思想と同化せしめ、全く同一の国民とならしめざるべからず。而して此の如く彼等の精神を征服するは、即ち普通教育の任務なり。⁹²（下線は筆者）

伊沢修二の理解では、台湾人という新領地の民を「我皇民」として見なされるからこそ、思想上の改造が十分に重要だと考えられる。同じく日本の国民だとしたら、徹底的な「日本人化」も免れない手段になる。伊沢修二が解職後、日本政府と総督府との間に台湾の統治方法に関する討論が存在し続けていたが、財政問題の関係で、台湾の教育制度は伊沢修二の予期より完備してなかった。しかし、台湾人の「精神を征服」して「日本人」に改造する構想が継承されていた。

戦争期に入り、「皇民化政策」の目的は台湾人を日本人に同化させ、効果的に戦争に動員することにあった。在台日本人作家は国家を支持する立場が明らかになった。例えば、西川満はもっぱら個人の芸術的営為に専念していた姿勢を変え、国策に基づいた文学を唱えるようになった。井手勇氏はこの点について、「台湾人を対象として推進された政策なのだが、結果的には台湾人ばかりではなく、在台日本人の意識まで影響を及ぼすことになった」⁹³と論述する。

3. 1 在台日本人が台湾に暮らす様相

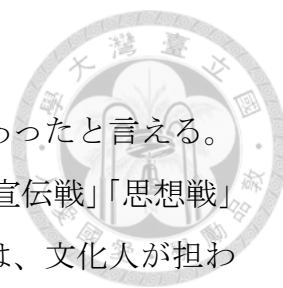
3. 1. 1 「台湾文化」を建設する意図

1942年5月26日、文学者の国策推進のための一元的組織「日本文学報国会」の創立総会で、奥村喜和男情報局次長は政府側を代表して挨拶した。テーマは「大東亜戦争と文芸人の使命」であり、「大東亜戦争は武力戦のみならず、経済戦、宣伝戦、思想戦、文化戦の全面にわたる一大総合戦だ」⁹⁴と強調し、そして総力戦の意義について、「総力戦に於いて要請されているものは、過去の政治・経済・文化乃至は世界観に対する全面的清算と、新しき時代の支柱となる歴史

⁹² 同上、p. 95。

⁹³ 井手勇「〈皇民文学〉という言葉の意味について」、p. 37。

⁹⁴ 桜本富雄『日本文学報国会一大東亜戦争下の文学者たち』、p. 77



的原理の創造であ」⁹⁵ると補充した。

「大東亜戦争」における総力戦の動員は、未曾有の規模であったと言える。それに奥村次長が提示したように、文学者に関する分野は「宣伝戦」「思想戦」と「文化戦」もある。旧文化を清算して新時代を建設するのは、文化人が担わなければならない主要な任務であった。次に奥村次長は公的な立場で、「政治」と「文化」の関係を詳しく述べた。

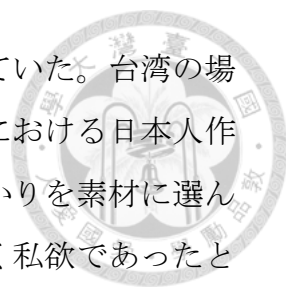
文芸はあらゆる芸術のうちで、最も思想性に富むものでありますが、その思想性の根幹は世界観であります。世界観なくしていかなる思想も成り立ち得ないのであります。即ち、文化、文芸ほど世界観の問題に切実なる関連を有するものなく、従って、文化と政治とは世界観をめぐる全く不可分の関連に立つものであります。（略）私どもは決して文芸を政府の政策に利用せんとするものではありません。政治の道具に文化・文芸を利用せんとするものではありません。文芸の効用性のみを狙わんとするものではありません。

私どもの文化文芸に対する認識はもっと深いのであります。文化は政治の道具どころか、それは高き意味の政治そのものであります。⁹⁶（下線は筆者）

「日本文学報国会」の成立という件について、文化界が国家権力によってあまりにも干渉され、文学者の不満を起こすおそれがあると意識したかもしれないが、奥村次長は文化と文芸が政治の道具ではないと繰り返して弁明した。政治と文化との関わりは、結びついている世界観だけでなく、実際に両者は同一に扱うものだと言われる。また、「高き意味の政治」とは何を意味するか。文化は水準や内質が確かに政治より高いと賞賛される意図があるが、帝国の政府からの指令も明確に伝えられる。それは「文化＝政治」なのである。あらゆる文化上の成果や作品は、政治の範疇外に越えるわけにはいかないと国家から警告される。

⁹⁵ 同上、p. 78。

⁹⁶ 同上、p. 78。



いうまでもなく、帝国の影響力は内地から植民地に及ばしていた。台湾の場合では、政府が文学者の力を体制内に編成するまえに、台湾における日本人作家たちは、中央文壇に向かって、台湾のエキゾチックものばかりを素材に選んで作品を書く。それは個人の利益を台湾文学の営みの前に置く私欲であったと評論家の黄得時は批判した。つまり、「中央文壇」への自発的な求心力は、在台日本人作家の心の中にずっと存していた。この評論を抜粋して引用する。

由来、日本の文化は、それを創造する側から見ても、また、それを享受する側から見ても、中央集権的傾向があまりにも強かつたため、中央を離れた地方に於て、どんなに優秀な文化活動をなしても、またどんな傑作をものしても、中央に取上げられない以上、或は中央の雑誌に発表されない以上、地元の人々は、その価値を必要以下に歪曲し去らうとするばかりでなく、蔑視的な白眼を以つてこれに對するのである。その結果、文化を創造する人や文化運動に携る人は、知らず悉らずの間に、地方文化本来の使命を忘却し、只管、自己を卑下して、専ら中央に迎合し、その鼻息を窺つて仕事をするといふ事大主義に陥るのである。⁹⁷（下線は筆者）

中央文壇を迎合するために、台湾の真価を曲筆で変造することは、台湾文化に対してある種の破壊だと考えられる。が、「大東亜共栄圏」の理念が東アジアのところどころに宣伝してから、本島人あるいは在台日本人の文学者は「地方文化」の重要性を述べ始める。ただし、両者の出発点が微妙な差異が存在していた。

西川満と親交を結び、同じく『文芸台湾』の同人であつて同誌にリアリズムの文芸作品を発表した濱田隼雄は、小説以外に「台湾文学」に関わるエッセイも彼の所産である。例えば、「台湾文学」の位置づけに触れるときに、「大東亜文学の指導的位置に立つ日本文学の一環としての本島文学」だ⁹⁸と述べる。「大

⁹⁷ 黄得時「臺灣文壇建設論」『台湾文学』1-2、1941年9月、p. 2-9。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四巻』、緑陰書房、2001年、p. 28。

⁹⁸ 濱田隼雄「本島文学革新に期待」『文芸台湾』終刊号、p. 41-63。『日本統治期台湾文学・文芸

東亜文学者大会」から戻った後、彼は台湾文学の将来の目標を提起する。

臺灣の文學が今にして現状を反省し、正道に立たずんば、大東亜文學の中から臺灣文學の名が抹殺されるであろう。(略) 廣く深い大東亜精神を體得することによつて、誠實な日本人となり切つた時、臺灣の文學は遼亂と花咲くであらう。⁹⁹

この段落からいって、濱田隼雄は「台湾文学」を保全しようとする気持ちが強かった。大東亜精神を知る「日本人」になれば、台湾文学は滅ぼす運命を迎えると、本島人作家を脅かしたが、彼は「台湾」に定着している意志が西川満より強いと推測できよう。

そして、「民族協和」という理念は「大東亜文学者大会」の主軸の一つであった。台湾は複雑な民族によって構成されてきたので、「大東亜共栄圏」の模範になるだろうと思ひ込んだ濱田隼雄は、次回の大会は台湾を主催地にすると力説した。

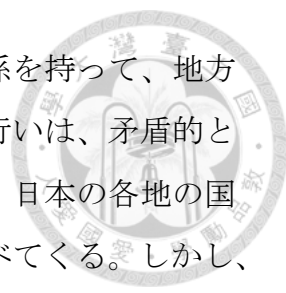
臺灣は同じく日本の中にはありますが、本島人、高砂族、内地人が居り、而もその本島人は廣東人、福建人と分れて居りいはば民族協和の歴史を四十幾年に亙つて持つてゐます。¹⁰⁰

同じ場合に「日本語を通しての民族と民族との融和」を提唱する西川満と比べ、濱田隼雄は逆に「台湾の文学者」の一人として、「台湾」を中央文壇から重視されたいという希望していた姿勢を表した。前述のように、在台日本人の文学者は、「中央文壇」に対する強い憧憬は、本島人作家にとって違和感が終始あった。一方、在台日本人の立場で考えると、彼らの重心は「台湾」というところにい

評論集 第五巻』、緑陰書房、2001年、p. 245。

⁹⁹ 濱田隼雄「大東亜文学者大会の成果」『台湾文学』3-1、1943年1月、p. 63-66。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四巻』、緑陰書房、2001年、p. 380。

¹⁰⁰ 濱田隼雄「次期大会を臺灣で」(大東亜文学者大会速記抄)『文芸台湾』5-3、1942年12月、p. 22-25。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四巻』、緑陰書房、2001年、p. 320。



って、日常生活を送った。彼らは「日本人」の身分と血縁関係を持って、地方の権力を求め、台湾の文化的地位を向上しようとする一連の行いは、矛盾的とは考え難いだろう。国家と民族の共感は母国の日本に繋がれ、日本の各地の国民と同じようなタイプで暮らしていた在台日本人の姿が浮かべてくる。しかし、「植民地」出身の劣等感も彼の意識に影響されてしまって、故に、在台日本人は中央の視線を獲得したい欲望が強かったと言えよう。

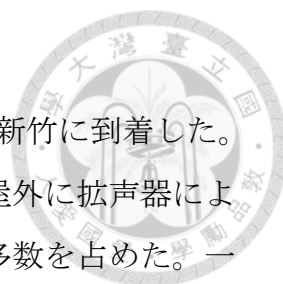
「台湾」に対する感情、生活の地方に対する共鳴があるにもかかわらず、『芸台湾』の中に主な成員は台湾での文学活動を「台湾における日本文学」だと認めた。雑誌の経営も「日本内地」の規模で考慮し、島内の発展は最終的な目標ではなかったと柳書琴氏が指摘する¹⁰¹。

3. 1. 2 文学作品に描かれる「在台日本人」

在台日本人は台湾に生きていたが、アイデンティティ認識が内地の日本に依拠し、居所によって変化されない結果が伺われる。この両立的な状態にいた在台日本人は日本や台湾に対する態度を分析する必要がある。何故かと言うと、両地への理解は「台湾人」キャラクターを造形するときに影響を与える。ここには第二章のテキスト『台湾の息吹』と『台湾の旅』における在台日本人に関わった段落を通して考察したい。丹羽文雄と佐多稲子は、同じ「日本人」の目線で、「台湾にいる日本人」たちが台湾に過ごしたありさまを観察して作品の中に記録した。そうしたら、旅客の日本人の目線で観察した現象と実際に個別の在台日本人作家の生き方との間に関連性があるかどうかを合わせて討論できると考える。

これからは三つの部分に分けられて例を挙げる。第一に、台湾と融和できない状況。第二に、在台日本人の郷愁。第三に、台湾住民に対する欲張りの挙動である。

¹⁰¹ 柳書琴『戦争と文壇－日本統治末期の台湾の文学活動（1937.7-1945.8）』、国立台湾大学歴史研究所修士論文、1994年、p. 87-88。



3. 1. 2. 1 台湾と融和できない状況

まず、『台湾の息吹』を見てみよう。時局講演の関係で紋多は新竹に到着した。映画劇場有楽館の中に集まった人はだいたい内地人であって、屋外に拡声器によって講演を聞いた聴衆は本島人も交じっていたが、内地人が多数を占めた。一人でも多くの本島人を聞いてもらいたいと思った主人公は、新竹の地理と環境を観察した。台北と台中に挟まれた新竹は、「中間的な地理が含まつてゐた宿命」があった。紋多は「冷淡、ゆきずりのところ。中間的な存在のはかなさ、腹立しさ、わびしさ。中間的な無傷さ」と感じた。それを前提として、紋多は新竹の在台日本人に対する評価は、以下のようにまとめる。

- (1) 「大地にしつかりと腰を下してゐない不安と不均衡を感じた」
- (2) 「大地に根を張る頑固さに缺けてゐる」
- (3) 「彼らは新竹の生活者ではなく、新竹といふ土地の生活を假に生活してゐるやうに思はれてならなかつた」
- (4) 「一應生活者にはちがひないだらうけれど、生活しながらも見物人として、受用者としてのみ新竹の風土、人情、金銭に觸れてゐる」(p. 514-515)

丹羽文雄は在台日本人の様子を細かく描写する。論理的にいうと、在台日本人は台湾での生活者の一員に属されたが、生活のところと結び付けなかった。紋多はこの印象が個人的な偏見であってくれろと望んだが、「彼らがかもし出す雰囲気の中には、彼らを裏切るやうなものがありありと存在した」をも看取した。まるで空気の中に漂っている状態に対して、些かに不満も流露してくる。つまり、「裏切るやうなもの」は在台日本人の台湾を生活の重心にしない態度を指すのではないかと思う。

次に、『台湾の旅』では、主人公は花蓮の開拓村「吉野村」を訪ねた。村長との話し合いに若い娘たちの結婚難を知った。若い男が外へ出て行ったのは理由の一つであるが、村での生活はあくまでもその範囲に限られるのも一つである。さらに、

村の若い男やその親さへ、内地の生れ故郷の村からせめては嫁を迎へたいのだといふ。生れ故郷に繋ぐものを求める人の心の切なさを責める強さも、旅人には持ち得ぬことだ (p. 469)



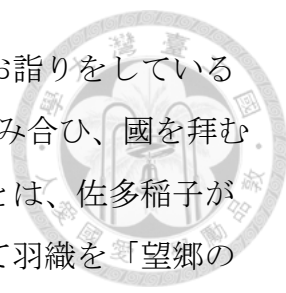
という在台日本人が内地の故郷との繋がりを維持したい思いが現われる。結婚とは、血縁的結合だと言えるので、生活の土地と生まれ故郷と比較してから後者を選ぶことは、日本への憧れを忘れられない証だと見なすだろう。

3. 1. 2. 2 在台日本人の郷愁

『台湾の息吹』で、紋多と連れは台中の日本旅館に着き、台湾の内地の女性によって迎えられて「内地風」の歓待を受けた。「臺灣にゐても結構内地の生活が出来るといふ不安のなさを倒錯的に示した」状況に対して違和感を覚えた。特に、「頭ごなしに臺灣の特異を求める旅行者」にとって好奇心を満たしてほしい気持ちが先回りするのである。それに、「客は、客として歓待者の慰めの材料となるべき宿命に立つものであるが、だれも納得はしない」という不満が表現されてしまうが、「東京風の歓待のなかには、また臺灣の内地人の郷愁もふくまっております」(p. 516)と理解する。紋多は旅行者として、「異国情緒」の招待を楽しみにしているが、失望した。同じ「日本人」であった在台日本人は実に故郷のことを懐かしんでいる。「内地人」は「在台日本人」を台湾文化を伝達する任務を担うべき人間であったと見なした。一方、「内地人」は自身が元の日本文化を擁する者はずであったと確信した。

そして、『台湾の旅』に台湾神社に参詣した「私」は、参道をまいったうちに周囲の景色に惹かれて、在台日本人の心緒を思い浮かべた。

参道の石燈籠は、数へ切れぬほど並び、それには皆、内地人のひとりひとりの名や、縣人會の名が掘つてあつて、それらをみながら登つてゆくと、何かそこに結集した日本人の切ないものがひしひしと傳はつてきて、悲しくなるほどのものであつた。(p. 462)



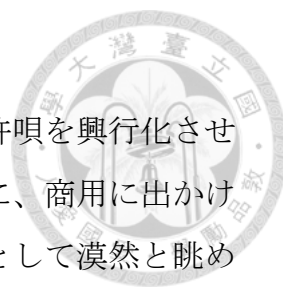
その悲しさは、石燈籠ばかりではなく、羽織と晴着を着て、お詣りをしている「遠く故郷を離れて暮す人の心に」も出現してくる。「家族睦み合ひ、國を拜むやうにこの神社に詣る心にもひとしほの切ないものがある」とは、佐多稲子が描写した彼らの懐郷の姿である。広い景色の中で浮き上がって羽織を「望郷の象徴」と見なした「私」は、在台日本人の生活の習わしを着目した丹羽文雄とは違って、在台日本人の精神世界に触れる。そして、「吉野村」に村長の話聞いた「私」は「血を流すほどの同胞の辛苦がこゝで續けられたのだと聞くと今まで台湾といふところに、たゞ異国的な興味をだけ持つてゐたことがすまなく思はれてくる」(p. 469)。「私」は紋多と同じように台湾に対する異国の想像を強い印象づけられるので、思わずに「在台日本人」のことを次位に置いて無視しやすくなった。

外在の行為は内面の心理とともに「内地」の物事を絶えずに慕った感情を示される。在台日本人は「台湾」に定着していなかった現象が、故郷に対する懐かしさを間断なく持っているにも影響されるだろう。

3. 1. 2. 3 台湾住民に対する欲張りの挙動

『台湾の息吹』における日本旅館の段落では、旅館で旅装をといた紋多と連れは、内地人しか歓待しない宿でかき集められる調度品により不快を感じた。これは底を見透かされてしまう蒐集癖や貪婪なかき集め趣味だと見られて、「まるで勝利品のように、首狩り族があつめたしやり頭のやうに並べてゐる」(p. 517)と紋多は云々した。連れは、これが内地人としての開拓者の情熱と己の苦闘の歴史を一つ一つもので現したと解釈してあげてから、紋多は認める。だが、三十年にかかって高砂族から山刀や服や豹の皮などのものをかき集めた骨董屋さんに、紋多は再び非難した。

骨董屋の主人の自負する顔を見て、彼は趣味や道楽で集めているのではなく、土俗学のためでも勿論ないということが分かる。それに比べて、「現在の高砂族の部屋は、装飾品に飢ゑである」事実に対して紋多は「何か残酷な気がするよ」と示す。「残酷」と意識した原因は、「彼ら（高砂族）が無智的によろこんで交換をしたのだとはいへ、無智を利用することは残忍ではないだらうか」という



のである。

このような内地人商人の悪い趣味の例としては、日月潭の杵唄を興行化させることもその一つである。紋多は東海岸でバスに乗ったときに、商用に出かける内地人が赤襷の高砂族青年の敬礼を「単に時局的な一点景として漠然と眺め去った顔が多」く、中にも時局的な楽しい発見をした人もいるを発見した。ここまで、時局に冷淡な態度を見せる在台日本人の狡さと貪欲への不満が頂点に達して、紋多は内地人に対する怒りがようやく噴出した。

両者は在台日本人の生活の様相をめぐって描いたが、立場が異なっている。丹羽文雄は戦時下の「皇民化運動」を視点で集めるので、先行研究でまとめるように、在台日本人の性格は、「台湾はしょせん他郷の地で、骨を埋める安住の地でないという旅人感覚や、金銭や商売が目的で狡さを働かせる功利的な一面、そして時局や戦争に対する無関心さなどが露出されたといえる」¹⁰²という批判的な態度によって強烈に示される。却って、佐多稲子は在台日本人の動向に関心し、思いやりが作品の中に散見される。しかし、二人の作家も類似していた観察結果を得る。在台日本人は台湾に対する土の親近感を持っていたが、血縁と民族上の疎遠感も同時に存在していた。その感情は郷愁に加えて、台湾の土地にあまり融和できない状況になってしまい、台湾のものを利用して貪婪な様子も隠さずにさらけ出した。

3. 2 在台日本人の作品分析

本島人作家にとって、在台日本人文学者はともに台湾に暮らしている相手であったゆえ、台湾に関するいい作品を書くために、第一に台湾研究が必要だと鼓吹した黄得時は、本島人作家が在台日本人と密接な交流関係を維持すべくと薦めた。彼が言った「台湾研究」は以下のものである。

臺灣の歴史、地理は、勿論のこと、風俗人情から政治、經濟、交通、産業、教育、衛生に至るまで詳しく調査し特に植民地としての臺灣に於ける内地人の生活、第二世の問題、内地に對する一種の郷愁、本島人との接觸等にも細

¹⁰² 丹羽文雄「台湾の息吹」論」、p. 34。

心な注意を拂ひ¹⁰³（下線は筆者）



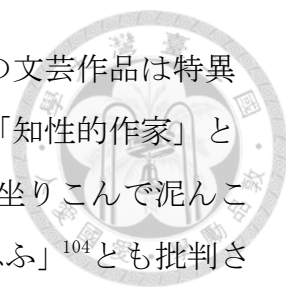
「在台日本人」の生活、郷愁、本島人との関係などの問題は第一節のテキスト分析の部分も討論される。つまり、これらの問題はすでに日本統治時代の本島人の興味を引いた。それに黄得時の考えでは、「台湾研究」の分野の中で在台日本人に関わる物事も重要な位置を占める。もし黄が提出した研究の基調に従えれば、本島人と在台日本人との間の認識が深められて、文壇上において多彩な作品も誕生できる可能性が高いだろう。しかし、国策動員の時代に入り、「在台日本人」に対するこの関心は、文壇で発揮する価値が失われてしまった。本島人は自身が「日本人になければならない」問題についてだいぶの気力を振り絞ってしまって、在台日本人を注意する余力をなくなった。一方、在台日本人は戦争が勃発した後、母国の日本の動向を配慮して、帝国と統一する戦線に戦いたい情熱が呼び起こされたので、本島人との交流関係を究明せず、逆に大局の重要性を唱えて、本島人が自発的に「日本人」の陣営に入るはずだと強調するようになった。

第一節で、在台日本人は「国策」の路線に沿って台湾文学を建てなおす意図を考察する。また、内地人が書いた作品を通して、彼らが台湾での生活を知って、日本と台湾に対する異なった感情にもやや触れる。では、在台日本人はいかに国家のために犠牲すべき「本島人」を想像するか。第二節で、濱田隼雄の「爐番」と丸井妙子の「たゝかひの蔭に」を中心に、その想像される理想像を分析して試みたい。

3. 2. 1 濱田隼雄「爐番」

青年時代に台北高等学校文科乙類に進学した濱田隼雄（1909-1973）は、東北帝国大学に入学していた期間、社会主義運動と農民運動に熱中する。1933年に渡台し、教職につく傍ら、小説や随筆も数多く発表し、当時の在台日本人作家の中ではいちばん多かったと言われる。代表作の長編小説『南方移民村』は内

¹⁰³ 「黄得時「臺灣文壇建設論」『台湾文学』1-2、1941年9月、p. 2-9。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四巻』、緑陰書房、2001年、p. 31。



地人移民村（台東鹿野村）の蔗糖栽培の苦闘を描かれる。彼の文芸作品は特異に「リアリズム」の作風に帯びたと評価される。龍瑛宗から「知性的作家」と評価されるが、「西川満氏と共に、人生の土べたにべつたりと坐りこんで泥んこになり、胴間聲をはりあげて人間哀歌を歌ふ作家ではないと思ふ」¹⁰⁴とも批判される。松尾直太氏の考察では、台湾にいた知識人の一人と意識した濱田隼雄は、周囲の文化人たちは中央文壇の東京を唱和して、「外地の台湾」を追求する行いに対して不満がある。台湾のことを写實的に描写して台湾の文学を創造したい理想を持っている¹⁰⁵。彼の短編「病床日記」は「湾生」が自分が台湾に生まれた事実を直面できないし、内地に繋がりを一生懸命に維持したい態度を批判する。濱田隼雄は、この歪んだアイデンティティは台湾への関心がない象徴であると認める¹⁰⁶。松尾直太氏は、台湾文学の建設に熱心している濱田隼雄の文学を前期と後期に分ける。前期は「理想性興味」、後期は「体制性興味」である¹⁰⁷。前期に完成した作品の中に彼の社会主義思想、批判性を含まれる純文学の興味がある。つまり、周りの台湾の現実を素材として、当局との間に距離を保っている。戦争期になると、濱田隼雄の立場が変わって、「二千六百一年の春、臺灣文藝の新體制に寄せて」¹⁰⁸という文章を発表し、台湾の文芸運動の政治意義を強調して、台湾人作家は「自我改造」を以て「職場奉公」と提唱する。また、「臺灣文藝の近況、初夏に寄せて」に、「當局の、これらの文藝人に對する関心と支持のたかまつたことである。文藝は、もとより役所の支持のみによつてできるものではない。（略）臺灣のやうな土地では、情況がちがふので、その支持なくしては文藝が一定のレベルに達することはむづかしいと思ふ」¹⁰⁹と書かれる。この文章が発表される時点に、当局は文芸の価値を注意しはじめる。松尾直太氏の見解で、濱田隼雄は当局に台湾文芸界の重要性を告げ、援助や文学者の地位の向

¹⁰⁴ 龍瑛宗「「文藝台湾」作家論」『文芸台湾』1-5、1940年10月1日。陳萬益編『龍瑛宗全集〔日本語版〕第四冊 評論集』、p. 71-72。

¹⁰⁵ 松尾直太『濱田隼雄研究—文学創作於臺灣（1940-1945）』、台南市立図書館、2007年、p. 47。

¹⁰⁶ 同上、p. 81。

¹⁰⁷ 同上、p. 85。

¹⁰⁸ 濱田隼雄「二千六百一年の春 臺灣文藝の新體制に寄せて」『台湾日日新報』、昭和16年1月3日。

¹⁰⁹ 濱田隼雄「臺灣文藝の近況 初夏に寄せて」『台湾日日新報』、昭和16年5月9日。

上などを目ざしたのである¹¹⁰。また、濱田隼雄は「大東亜戦争」が鼓吹した精神に対する解読もこの時期の作品に散見されると考える。例えば「ことあげ」を見てみよう。

南方への基地になるのは、会社や工場を建てることによつてばかりではない。この島に根をつけることが第一だ。この島のものを愛し、汚いものは美しくしようではないか。円公園を軽蔑することは止さう。(略)台湾の本当の文学もかうしたこの島への愛から生れるのだ。¹¹¹

この時期に濱田隼雄の文学は国策へ傾けたが、他の在台日本人に比べて中立的だと思う。しかも台湾の文化を排除しなくて包容する態度を主張した。

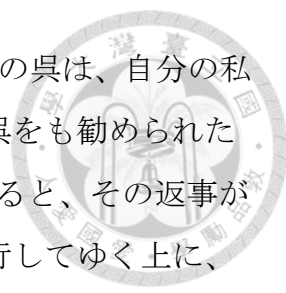
『決戦台湾小説集』の委嘱計画に選ばれる作家の一人として、濱田隼雄の派遣地は「日本アルミニウム工場」である。彼は「工場の鬨魂」という派遣感想文で、作品を書いていたうちに、ある夜の放送を聞いたことを提起した。「内地の某飛行機工場がサイパンの玉砕に激憤し、よしやらう、やらうと雄哮びをあげる情景を聴き、僕は眼頭を熱くした」¹¹²と書いてあった濱田隼雄は、工人たちの逞しい雄哮びの後に続けた機械の音によって、工場の決死の鬨魂を目に見えるような大きな感激を受けた。それゆえ、「僕がお世話になつた x x の日本アルミ工場でも、この悲愴な玉砕に同じやうに新しい鬨魂を燃してゐるだらう」と思い込んだ。「逞しい鬨魂」を伝達するために、彼は作品「爐番」を完成する。

物語の場所は「激しい、熱い、苦しい」アルミニウム精製工場であり、四人一組で六つの爐を持った高炉係で働いている台湾人工員の金川は主人公だと設定する。教員としての作者濱田隼雄は、まず労働における基本的な態度が正反対のキャラクター「工員の金川」と「人夫の呉」を設ける。工員と人夫の仕事について内容上の差異は「工員になれば賃銀も増すし、手當やら保険までつくのだが、それだけに責任が重くなつた。好きな時に休んで郷里に歸つたりも

¹¹⁰ 松尾直太『濱田隼雄研究—文学創作於臺灣（1940-1945）』、p. 130。

¹¹¹ 濱田隼雄「ことあげ」（『文芸台湾』8号2-2、1941.5.20、p. 66。

¹¹² 濱田隼雄「工場の鬨魂」『台湾文芸』（台湾文学奉公会）1-4、1944年8月、p. 73-83。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第五巻』、緑陰書房、2001年、p. 286。



出来ない。不自由だ」(乾、p. 13-14)である¹¹³。なので、人夫の呉は、自分の私欲と自由を考えて、増産にあまり参加したくない。組長から呉をも勧められたが、「肉體の酷使とのんびり自由に暮らしてきた気持」を考えると、その返事が渋っていた。つまり、工場の方では生産命令以上の増産を強行してゆく上に、この職場を死守する責任と義務が担わなければいけない。「産業戦士」が作業している環境の厳しさは「飛行機を一機でも多く作り出す原動力となる重大な、大東亜一のアルミ工場で、労務者の一瞬の遅滞が戦力に大きな影響を生む」(p. 14) という段落でわかる。

そして、「産業戦士」として、最も重要な任務は「生産命令」を完成することである。「爐番」で提起される命令及びその産量の急迫性は以下の段落で見られる。

何百とある爐の一つでも死ねば、生産命令の達成がそれだけ遅れるのだ。至上命令が生産量を定めてから、工場には明日と云ふ日はなかつた。今日の遅滞を明日で取り返すことは出来なかつた。明日百分以上の能率を上げても、それは今日の遅滞なくとも明日當然出し得べき力だ。今日の遅滞は明日の力を減らしてしまふだけだ。(p. 28)

「爐番」が発表された後、『台湾文芸』で濱田隼雄が書いた第一人称で x x アルミ工場の見学を中心に「生産命令」という小説を掲載される。一般的に「爐番」の取材小説と見なしている¹¹⁴。作者を代表する主人公が「工場生活の中で一番楽しいのは何ですか」と問われるときに、彼の答えは以下のように示す。

それは、生産命令を貫遂したとわかつた瞬間です。年度末の最後の日、命令された量をどれだけ生産したか、はつきりと具体的に数字で示される瞬間です。これで命令以上にどれだけやれたかがわかつた時、ほんとに安心した

¹¹³ 本文で使うテキストは『決戦台湾小説集 乾之巻』、ゆまに書房、2000年。以下には脚注を省略する。

¹¹⁴ 松尾直太『濱田隼雄研究—文学創作於臺灣 (1940-1945)』、p. 237。

楽しい気持ちになります。¹¹⁵

「生産命令を貫遂したとわかつた瞬間」は工場生活の中で一番楽しい経験であることからみると、使命感の完遂という価値の重要性は戦争期に特に大きくなった。濱田隼雄の視点で、日本人に比べて台湾人の使命感が弱いので、改正する必要がある。

総督府は本島人に対する特性の分析において、こういう結論を得る。「勤勉で儉約家である一方、貧困にあえぎ、賭博癖や窃盗癖の傾向がある。従順、慎重で辛抱強い。話好きで自分を売り込むことに長け、嘘も平気で並べ立てる。社交的でへつらうこともうまく、表面は味方のふりをして、実は裏腹であったりする」という¹¹⁶。作者は反面教材を創造した。増産に対して自覚がまったくないし、労働しなくて気軽な生活もあきらめないキャラクターは「本島人」と指される。濱田隼雄は教化を受ける必要がある人間は「本島人」しかいない立場も明確になっていく。それに、増産の圧力、疲れすぎた体はようやく主人公に影響を与え、辞めるという念頭に向けられる。寝てしまえば連中が大変だと思ったが、「誰が二度とあんな苦しい嫌なところへ行くもんか」と力んでみる金川は、

人手の不足な時だ、何處にだつてゆき場所はある。辞表を出して、郷里で一月位遊んでから新しい職場を探すのもいゝ。(略) 空襲必至なこの臺灣、しかも軍需工場として一番爆撃の目標となるこの工場、危ない話だ、と怖れ気もついてくる。(p. 35-36)

と思いながら、工場で質の悪いコークスを無理に使い、爐が片っ端から死んでいた危機が起こってしまった。高炉係が大混乱で奮闘していることを知らせてから、「出勤した責任が胸を突き刺し」た金川は突然に「不思議に、俺は日本人

¹¹⁵ 濱田隼雄「生産命令」『台湾文藝』1-4、台湾文学奉公会、1944年8月13日。国立台湾大學圖書館數位典藏館、p. 21。

¹¹⁶ フィックス「徴用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」、p. 154。

だ、と腹の底が叫んだ」(p. 39)と感じた。

結尾のところに、炉を改造した作業が始まって、「遠い広い戦場とちつぽけな自分とのつながりが儼然たる事実としてそこに在った。こゝも戦場だ、と思ふと、俺も戦士だの誇りが油然と湧き上つてくる」(p. 46)という感動を持っている金川は、最後までやっとな立派な「産業戦士」になった。

濱田隼雄は労働者に対する観察が相当に深刻だと言える。作品の中に工員たちが働いている様子を詳しく描かれ、金川は身体上の苦痛の関係で仕事を辞めたい心境の描写も説得力がある。それは読者に勤労増産に参加させて、彼の皇民意識を刺激して共感を求める作者の手法だと考えられる¹¹⁷。一般的に「時局的な教訓色が濃厚」¹¹⁸だと批判されるこの作品は、物語が進行中に中断したところがあると指摘される。それは、なぜ主人公が工場の機械故障や欠勤によって自分が「日本人だ」と覚悟したのだろうか。

「俺は日本人だ」という覚悟を得るまえに、金川はもっと楽なところを求める気持ちが起こったときに、「一方では心の隅で彼を苦しめるものもあつた」(p. 36)。「彼を苦しめるもの」は、「日本人」になる曖昧で、不明確な自覚であり、その自覚の「完成」は帝国への責任感によって触発される。しかも、濱田隼雄の論理に沿って、「本島人」のイメージは怠け者であって、性格も不精で物臭である。反対に、増産を努めて責任感を持った性質は「日本人」意識の表現だと考える。つまり、主人公の金川は、過去の弱気な自分(台湾人)を捨ててから、「日本人」として生きている契機も手に入れる。

戦後、濱田隼雄は「恥かしく思ふ。戦争に捕えられて作家精神を失つた一人であつた」¹¹⁹と後悔して検討した。

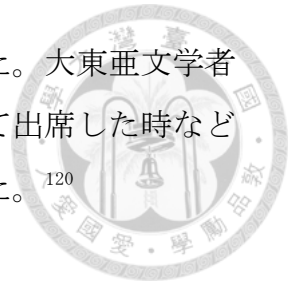
昭和16年——太平洋戦争。つぎつぎの大戦果は多くの国民に錯覚をおこさせた。大きすぎる野望を実現するにはあまりにも小さすぎる国力の正体をみせまいと、サーベルをつゝたものどもが、朝から夜中まで、錯覚をまきちらし

¹¹⁷ 松尾直太『濱田隼雄研究—文学創作於臺灣(1940-1945)』、p. 249。

¹¹⁸ 中島利郎「日本統治末期の台湾文学—台湾総督府情報課編『決戦台湾小説集 乾之巻・坤之巻』の刊行」、p. 12。

¹¹⁹ 濱田隼雄「木刻畫」『展』3、1982. 10 p. 151-162『濱田隼雄研究—文学創作於臺灣(1940-1945)』、p. 197から引用する。

たのだ。あさはかで無力な僕はずるずるとだらくしていった。大東亜文学者大会などと云うものがひらかれ、台湾の代表のひとりとして出席した時などは、わが文学的気宇大いにひろがるなんていゝ気持になった。¹²⁰



戦時期の最後の段階で、濱田隼雄は積極的に国策を宣伝する指導者になった。知識人と文学者の将来を考えて、台湾文壇を建設する目標を狙った彼は、大きな志向を持っていた。この気持ちは上の引用文で見られる。体制に従う文学作品を創作しようとするが、彼の前期の作品と比較してから活気が失っていく。が、「爐番」の中に無理矢理に生産量を追求して機械の損害に導くという点で見れば、功を急げば目的を達することができない意味を含まれるだろう。彼が労働者を関心して社会主義者の光もここに少しく輝いている。

3. 2. 2 丸井妙子『たゝかひの蔭に』

1919年（大正8）台南に生まれた丸井妙子は、台南第一高等女学校に就学期間に濱田隼雄の指導を受け、卒業してから1943年の秋に台湾公論社に入社した。最初の仕事は台湾の生産現場など銃後で労働に励む婦人たちのルポルタージュであった¹²¹。金瓜石鉾山を皮切りに、台北、南方澳、高雄、台中、霧社、日月潭、太平山、虎尾、屏東、台南、知本、新港、台東など台湾全島を歩いた。彼女の文章は『台湾公論』に連載し、翌年の11月一冊に収めて台湾公論社出版部から刊行した。

『たゝかひの蔭に』は合計二十篇（あとがきを含め）の短編が収録される。『決戦台湾小説集』とほぼ同時期に出版されており、「決戦台湾随筆集」と呼ばれる『たゝかひの蔭に』は産業現場の様子を書かれる以外に、台湾の景色をも優しくて優美な書き方で示される。表（3.2.2）で収録される文章をまとめる。

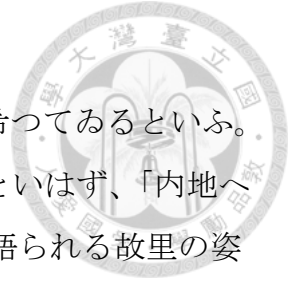
¹²⁰ 濱田隼雄「地球儀」『学生』32-1、p. 16。『濱田隼雄研究—文学創作於臺灣（1940-1945）』、p. 202-203から引用する。

¹²¹ 中島利郎「女性が描いた「決戦台湾随筆集」——丸井妙子『たゝかひの蔭に』について」『台湾随筆集三』、緑陰書房、2003年、p. 581。

	書籍化の順序	連載されるデート	訪れた場所
1	富士・櫻・霧社・日月潭	19. 1. 1-4	富士、霧社、日月潭
2	採鑛記	18. 9. 24	金瓜石
3	竹細工を作る村	18. 10. 16	台北州七星郡内湖庄
4	たゝかひの蔭に	18. 10. 24	大溪郡、角板山、枕頭山、大崙崁溪（現大漢溪）、溪口臺
5	燈臺行	18. 11. 8	
6	轉進する移民	19. 5. 13-2	台東、鹿野、加路蘭
7	能高越え開鑿	19. 1. 1	台中州能高郡
8	総督さんに會ふの記	18. 12. 28	
9	太平山	19. 2. 4	羅東、太平山
10	海員	19. 3. 4	
11	虎尾と屏東	19. 3. 8	虎尾北溪厝、屏東隘寮溪
12	開田作業	19. 5. 12	関山次の新武呂
13	緋櫻の記	18. 12. 10	高雄
14	春日村	19. 3. 7	台南州虎尾郡北溪厝大屯警一号
15	探坑記	19. 4. 6	
16	浴みする高砂族	19. 5. 10	知本
17	漁村の移民達	19. 5. 12-11	南方澳、(台東) 新港
18	くろがね	19. 4. 4	
19	プユマの魂	19. 5. 13	
20	あとがき	19. 8. 9	

表 (3.2.2)

台湾に生まれた「湾生」として、丸井妙子は「漁村の移民達」において台湾への帰属意識と内地への憧れに触れる。



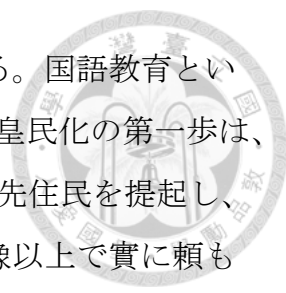
若い娘たちはまだみぬ父祖の土地を、一度訪れてみたいと希つてゐるといふ。臺灣で生れた、いはゆる灣生の私などが「内地へかへる」といはず、「内地へゆく」といふと同じやうに、彼女達は、ちゝはゝの口から語られる故里の姿をみてくる丈で満足なのである。(p. 528)¹²²

「内地へゆく」とは、一種の指向性を表す。すなわち、「内地」は帰る場所ではなく、彼女にとって「出発点」は台湾を指すことである。このような表現は、先述でまとめる在台日本人の感情の類型と近似している。また、作品の中に大量な時局的場面が現れて、殊に「高砂族」と「大和民族」との連関性を探そうとする意図がきわめて明らかである。次は、高砂族が日本人化の例について考察をはじめめる。

当時、国策の題材は当局にとって大歓迎な作品なので、台湾総督府と日本文学報国会に肯定される『たゝかひの蔭に』はこの潮流に乗って、増産、義勇奉公、国語の学習などの情景が散見される。例えば、植物が植えられるときに、「それ程高く成長するやうにと祈るころは、増産精神に直ちに通じてゐるではないか」（「富士・桜・霧社・日月潭」、p. 309）と作者が感嘆する。正月に集まった高砂族の老人たちの話題は、出草や狩での手柄話から「大東亜戦争」に関わった時局色を帯びるようなものになった。部落から志願兵、義勇隊員が次々と出征して、子供も志願させたいと望みながら、自分も戦場に行きたい老人の姿である。そして、訪れた作者たちの一行のために先住民の教育所で児童の学芸会を催した。子供たちに対して、作者は「くりくりとひきしまつた姿態や、黒み勝ちな瞳は、さすがに高砂族の精悍さを憶はせるが、愛らしいワンピースをまとつてゐる姿は、ちつとも内地人の子供達と變らない」（『たゝかひの蔭に』、p. 355）という感触を得る。

部落で変えられた先住民の生活習慣、日本の傳統習俗の浸透などの描写からみると、先住民は「日本人化」の完成度がついに高めていった。さらに、児童

¹²² 丸井妙子『たゝかひの蔭に』、台湾公論社出版部、1944年に出版される。本文で使うテキストは『台湾随筆集三』、緑蔭書房、2003年、p. 291-567。以下には脚注を省略する。



教育所では、その子どもたちが内地人とは違いがないのである。国語教育といういちばん肝要な政策であり、「決戦下殊に重要視されてゐる皇民化の第一歩は、『國語問題の解決にあり』と叫ばれているが、作者はここに先住民を提起し、「山のひと達の國語に對する熱意や理解力といふものは、想像以上で實に頼もしい限りである」（「たゝかひの蔭に」、p. 356）と賞賛する。教育所の子供たちの言葉使いは、拙くとも「本島人によくきかれるあの妙なアクセントはな」く、教育所を出た青年層も綺麗な国語を流暢に使っている。この青年たちは、高砂義勇隊、陸海軍特別志願兵、そして徴兵制度実施などの過程を経て、最後の目的は唯一つ「明るく、強く、素直な山の日本の兒らは、南方で戦死した」（「たゝかひの蔭に」、p. 359）というのである。

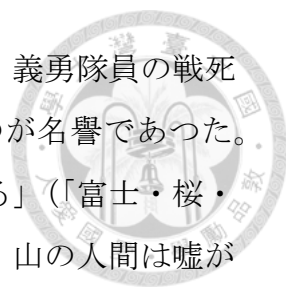
総じて、『たゝかひの蔭に』の中に、「高砂族」は完全なる理想的な「日本人」になってしまう。彼らは実行していた生活の様子が「皇民化」の典型だと言っても過言ではない。随筆という形式で書かれるこの作品の内容は作者が自分の目で観察したことを記録したものか、途中で見た光景をもう一度消化して書いたものか、あるいは感想と理想を混合して完成したものか。少なくとも、丸井妙子は国策を応援する立場はここに至って明確に確かめよう。

日本統治者にとって「高砂族」は本島人と比べて、なぜ魅力的であったか。フィックス氏は『台湾の認識』という日本人官僚向けの官庁出版物を参考して、両者の「民族の特性」を比較する。つまり、先住民は官僚に従順であり、勇猛で好戦的、他者と個人的に接する場合は率直ではっきりものを言うと思われている。また、情報課は戦時政策に反抗的だという徴候を先住民には認めなかったものの、本島人はまったく相反する評価をつける。本島人の忠誠をかなり疑っていたことが伺われる¹²³。このような分類の方式は、戦時中台湾における当局側の需要があらわになると言えよう。

さて、丸井妙子は皇国に捧げる高砂族の理想像を述べる一方、先住民の文化を逐一日本人の伝統と結合させる狙いは、作品でいちばん特別なところだと思う。以下は、この特色を持つ内容を三つの方向に分類するを試みて分析したい。

まず、先住民の男性の勇ましさと日本武士道の関連性である。作者が「サヨ

¹²³ ダグラス・L・フィックス「徴用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」、p. 153-154。



ンの鐘」の撮影所として知られた「櫻部落」を訪れたときに、義勇隊員の戦死のことを聞いた。「高砂族は昔から男は戦場で華々しい散るのが名譽であつた。それが出草などではなくて御國のためにお役にたつたのである」（「富士・桜・霧社・日月潭」、p. 315）と戦死者の母が喜んで言った。また、山の間人は嘘が嫌くて、責任感が強いので、前線で食糧輸送をしていたうちに、軍のものに手をつけなかったために餓死した義勇隊員があつたそうである。この行いは「日本の武士道に随分近い」（「たゞかひの蔭に」、p. 364）と作者が思う。

国文学者の芳賀矢一は「戦争と国民性」の議論するとき、武士道はただ封建時代の産物であり、日本の国民精神を貫いている「国道」こそは「武士道の根本」だと考えられる。彼もまた愛国心と尊皇心、皇室と国土とは不可分な一体だと主張する¹²⁴。「男は戦場で華々しい散る」というのは日本の代表的な武士道のイメージだと考えよう。日本人の文化の中に崇高な地位を持っている武士道精神を利用して、先住民の性格と深く結ばれる。

女性の場合は、丸井妙子は「古來の日本婦道」を知らないはずだった高砂族の女達をとりあげる。彼女たちは日本婦道にふさわしい身振りを表わし、強く生き抜いていた様子について描かれ、戦死された方の未亡人のことも「古來日本の國は女が強いから強いのだといふ、この母にして征きし益良丈夫あり」（「富士・桜・霧社・日月潭」、p. 317）と称えられる。

老若男女を問わず、作者は先住民の中に「日本精神」を探し続ける。先住民の口承されてきた伝説と旧慣に関しても介入される痕跡も残される。例を挙げれば、日月潭の伝説である。丸井の叙述によると、湖心の玉島には一本の樟の大樹があつた。樟の根本の洞穴には二匹の白蛇が棲んでいた。化蕃と言われるかつてのツオウ族の部落民はその蛇を神の使女だと語り伝えていた。つい「おくにに役たつ日が訪れ」、奉公のために樟は伐り倒された。「しかし洞穴の中から白蛇は現はれなかつた。神の使女は己に樟の壽命を豫知して湖面に涉り、いづこへか姿を消したものであろう」（「富士・桜・霧社・日月潭」、p. 323-324）。その後、潭の中心に玉島に、白蛇の伝説を含めて、辨天さま、市杵島姫命と嚴

¹²⁴ 芳賀矢一は「戦争と国民性」『日本人』（富山房、1916. 1）。『日本人論：明治維新から現代まで』、p. 99 から引用する。



島神社の御分靈を祀って玉島社とした。

先住民の忌諱をかまわず、彼らの信仰をあらためて変更される。神の使女は消えていく原因も、自分の都合のいい解釈を加えられる。先住民の文化が破壊された結果は、また以下の例で示す。

例えば、先住民の間に「最も尊いものとされてみた「オツトフ」への舊慣、(出草の時の死者は家屋内に容れないこと)」は破られて、「戦死者の英霊を鄭重に家庭内に安置してあります」。丸井妙子の目の中に、それは「時代の推移の流されたのだともいへるでせうが、大した進歩だとおもひました」(「たゝかひの蔭に」、p. 363) と評価する。もう一つ例は、先住民の子どもたちは遊び事をして、なぜ自分らの祖先は「出草」などをしたんだろうかと不思議にさえ思っていたということである。

このまえに討論する「皇民化」の模範となる行為と作者が主導する文化の改造とを結び合わせて『たゝかひの蔭に』の中に収録される最後の文章「プユマの魂」になる。プユマ族は「勇武を好んだが、その殺伐さを好んだではなかつた」という風習を持っており、そして、ヒロインは部落の人達から「女らしくない女だとみてゐた」タアタである。タアタは「臺東卑南に、その勇武を謳はれた^{プユマ}卑南族の衆長の愛娘として生を享けた」。激しい気性で、男の子と同様に射撃や乗馬の稽古をさせたタアタは、日本領台のときに頭目クララウと社衆を動かして皇軍に従うべきだと唱え、自身に皇軍を迎えに行った。

気強いヒロインの勇ましさを嘆美な筆致で書かれるが、丸井妙子もタアタが皇国日本を支持する立場を設定される。また、プユマ族に言い及ぶと、「武士道精神」がもう一度登場する。

プユマ族は昔から同じ高砂族の内でも、武士階級とでも云はうか。その品格の高さ、精悍さは群をぬいてゐて、古武士的な傳統は永くプユマ族の血の中に脈うつてゐる。(「プユマの魂」、p. 547)

剛猛で勇敢な先住民は丸井妙子の目線で、武士道の傳統を繼承している最高の代表となっている。プユマ族の傳統な制度から武士階級に類推できることも自

然であろう。そして、文化の面にも日本との接点が発見される。

プユマ族の家に祀るピナヤサンは破邪のつるぎ、降魔の利剣、郷土の一、家門の誇りを祖宗の魂こもるカマルアンに祈つて、征旅にたつてゆく事は、古へ日本の武士が八幡宮に武運を祀つたのに一脈相通じてゐるではないか。

(「プユマの魂」、p. 558)

日本の信仰と接続しようとするときに、武運の神を崇敬する八幡宮を選ばれる。また、積極的に皇民奉公を実行していて、タアタの愛国の熱情を受け継ぐ親族のことを紹介する。例えば、タアタの妹「稲葉」は孫の上手な国語で刺激されて国語を勉強する。「稲葉」の子供は、兄の重人は台南の師範学校を出て卑南国民学校を奉職し、妹の花子は台北第三高女出身で、先住民の中に初めての女学校卒業者である。彼女の夫は南方に征戦してから、彼女も学校で奉職する。そして、稲葉の二人の甥は、一人が海軍志願兵であり、一人はが湖口の特別錬成所で訓練を受ける。

ここに登場している先住民の人たちは、みな奉公を司って、国のために自分を献上する。このような詳細な描写によって、理想的な皇民を造型する目標を完成したい丸井妙子の野心はあらわになる。そして、先住民の元の文化に含んでいる意味を直接にはずれて新たな意義を付与させることは、精神への侵入だと認められよう。これは「高砂族」の先天的な身体上の優勢と勇ましい風習を用いられて、ただちに精神の改造だと考える。

3. 3 結び

在台日本人は台湾文壇の雰囲気の一変を企てた。彼らの意図を解明しようとするれば、台湾という生活のところと母国日本に対する共感が同時に存在していたからである。しかし、在台日本人のアイデンティティ認識は、「政治アイデンティティ」と「文化アイデンティティ」に分けられる本島人とは異なった。西川満と濱田隼雄の発言からみると、文化における主体性とは日本に帰依するに違いない。一方、故郷の内地に抱いた郷愁、血縁や民族意識の繋がりなどは、

在台日本人が台湾に根ざしたことを拒否する最大の理由だと考える。さらに、この「大地に根を張る頑固さに缺けてゐる」過客の心は、植民地の資源や人力を略奪行為に働かせる原因だと思う。

濱田隼雄の作品で、「台湾人」のイメージは悪い個性を帯びる人間として登場する。「台湾人」を捨ててから、真面目な奉公に尽力する「日本人」になる可能性が来る。そして、丸井妙子の作品は主に「高砂族」のことを考察する。彼女が創作した先住民はほぼ「日本人」が要求される「皇民」の規範に符合する。さらに、先住民の伝統文化や伝説はほとんど日本精神と繋がれるので、本質から彼らの特徴を抹殺されてしまった。これは在台日本人の傲慢だと言えよう。

濱田隼雄と丸井妙子は確かに「台湾」へ深い感情を持ったと察するが、彼らの作品に「本島人」と「高砂族」のことをすべて消去される企みをも見逃せないと考える。濱田は、台湾人の心の中に「日本人」になる性質が存在しているが、台湾人が自らで覚悟しなければ日本人になれない。丸井は、先住民の伝統風習が武士道に食い違いがなく合っているので、先住民は天皇のいちばん忠誠の臣民はずだと思われる。両者は日本の精神と伝統が過度の美化を加えられて、崇高な価値や道徳力に転化させるのである。しかし、実際に存在しない理想化、仮想化の台湾を追求すれば、当局の侵略主義と国策に呼応して創作するようになりやすいと考えられる¹²⁵。

¹²⁵ 崔末順「戦争期台湾文学の審美化傾向及其意義」、p. 121-122。

第四章 異色の大和桜—自己像を探す本島人作家

下関条約で台湾の主権は日本に割譲した後、台湾総督と首相を歴任した桂太郎は、1905（明治38）年第二十一回帝国議会で、「無論植民地デアリマス、内地同様ニハ往カヌト考ヘマス」と台湾が「植民地」であることを初めて明言した¹²⁶。植民地であったがゆえに、本国にとって経済的利益は何よりも重要である。その他、政治上の問題について、1889（明治22）年2月11日、紀元節の日を期して発布された大日本帝国憲法は台湾に施行されるだろうか。すなわち台湾が法制的に「日本」の範囲に編入されるかどうかの質問を中心に激しい論戦を起こした。結果からみると、「内地延長主義」という同化主義の路線が選ばれたが、「同化的植民地政策は植民地人に対して経済的及び社会的同化を要求すると共に、政治的権利の同化を拒否するを特色とする」と矢内原忠雄が指摘する¹²⁷。

このような不公正な制度のもとに、植民者と被植民者の身分差は「民族」によって明らかに限られていた。植民者の優勢を保ち続けるために、被植民者に平等的な地位を与えることはありえないのである。当時台湾の民衆が対面したのは「一視同仁」「一心同体」という理念で築かれた幻の生活に、厳しい差別待遇は現実であった。しかし「皇民化運動」の時期に転機が出現する。游勝冠氏の考察では、皇民化運動が実施してから、日本政府は確かに「民族差別」の制限を解除するのを試み、改めて台湾人が日本に対する「民族意識」を要求された¹²⁸。言い換えると、日本統治期では台湾人の民族意識を改造する点について、初期の方針は寛容な態度で取り扱われるが、後半に入り、本来の民族意識を抹殺する傾向になった。台湾人の国家観と民族観は巨大な衝撃を受けられ、台湾人も「日本人」の意義をを深く認識し始めたのである。

では、世界史的転換期に近代化の変革を迎え、尹健次氏は戦前に形成してきた「日本人アイデンティティ」の組成要素を分析し、「西欧崇拜思想、天皇制イデオロギー、アジア蔑視観」という三本柱でまとめる。説明は以下のように示す。

¹²⁶ 尹健次『民族幻想の蹉跌—日本人の自己像』、p. 99 から引用する。

¹²⁷ 矢内原忠雄「朝鮮統治上の二、三問題」（1938）『矢内原忠雄全集』第四巻、岩波書店、1963年、p. 324。

¹²⁸ 游勝冠『殖民主義與文化抗争—日據時期台灣解殖文學』、群学出版、2012年、p. 355。



一つは欧米列強の日本侵略であり、これは欧米先進諸国からするとき、資本主義市場の新たな獲得を意味する。二つは、それに対抗して日本が天皇制国家を創出して、植民地への転落を防ぎ、独立国家の建設をなしとげようとしたことである。そこでは吉田松陰の「一君万民」論に典型的にみられるように、天皇神話を肥大化させて近代天皇制を作り出し、それでもって国民統合をはかろうとした。三つは、しかしそれだけでは現実の強大な侵略に対抗できないため、日本の独立を確保するためにアジアに侵略していったことである¹²⁹。

西欧文明の導入を伴い、文明開化によって襲われた日本帝国は「復古的色彩をおびた天皇制」¹³⁰を歴史の流れから呼び返し、近代的な国家体制を構築した。天孫降臨で創始された「神ながらの国」である日本に、天皇の権威が「万世一系」の「皇統」から継承する。「天皇＝国家＝忠君愛国の対象」というイデオロギーの図式も国家装置の国民教育に用いられて日本帝国のところどころに伝える。

「皇国」「国体」「神国」という言葉が社会上に頻繁に使われ、「八紘一宇」「大和民族」「日本民族」などと重なりあい、政治・教育・宗教の三つの方向で国民の愛国心が徹底的に育てられる。こういう「皇国精神」に基づいた「皇民化運動」は、基本的に「台湾人を日本人化しようとする同化運動を発展し、強化し、台湾人に天皇制イデオロギーを注入して、皇国臣民にしようとする思想の下に展開される」¹³¹政策だと思われる。

総督府は植民地社会を全面的に統治し、強制的な支配権を握ったので、創作上の制限も一段とすさまじくなった。1940年代の文壇は、たとえ文学無気力が叫ばれた低迷期に入っても、文学の行き詰まりを打開するきっかけの「大東亜共栄圏」に対して、台湾における文学者たちは立場を問わず積極的に挺身して期

¹²⁹ 尹健次『民族幻想の蹉跌—日本人の自己像』、p. 7。

¹³⁰ 同上。

¹³¹ 伊藤幹彦「日本植民地時代の皇民化運動——台湾の思想状況を中心に——」『アジア文化：総合文化誌 特集1 アジアと日本(2)』アジア文化総合研究所出版会、2000年、p. 38。

待している。「塩分地帯」¹³²という文学集団の一人、文芸評論家の王碧蕉は「臺灣文學考」で、共栄圏の確立と地方文化の樹立は台湾文学が再び振興させる契機だとして信じる。彼は、国家総力戦体制が完備していた一方、文化も新しい地位を獲得すべきだと提唱した。また、台湾文学の特性を強調し、「日本全国の如何なる地方文學にも混同する事なく」「臺灣に於いても必然的に臺灣獨特の文學があり、他所の模造の出来ない特殊な文化の創造がなければならぬ」¹³³という自信を持った。

というと、当時の本島人作家は二つの状況に直面していた。一つは日本統治者から「日本人＝皇民」の身分を台湾人に押し付けること。二つは、本島人作家はほぼ漢民族であるが、統治後期に入ってから、中国文化と思想の影響力はだんだん薄くなり、台湾の特色を探し始め、台湾意識は逆に抬頭したこと。王碧蕉の文章のなかに、こういう現象が反映されていた。

臺灣文學も（略）正に開花せんとする大きな蕾をつけてゐるのである。無論この純粋な大和櫻でない蕾が、櫻花の正形を整はざる不正形な花が櫻花の蕊をつけて、一寸奇形な花が開花せんとするのである。この花の完全に開花された暁は、期せずして東亜の新文學、世界の新文學が創造される事になるのである。¹³⁴

「純粋な大和櫻でない蕾」「不正形な花」という「奇形な花」は、台湾文学の形であり、「開花せんとする」というのは、積極的に発展を求めようとする台湾文学界の状態であった。王碧蕉が記した期待は、当時島内の文学者も普遍的にそう思い込んでいた。が、この比喻は単なる台湾文学の進歩を待望するものだけでなく、政府の勢力が作家たちの身近に迫り来たので、国策を呼応しながら「大

¹³² 1930年代の日本統治期に台南の北門郡出身の作家集団を指す。呉新榮・郭水潭を中心に働いた。詩歌を創作する以外、現実主義の文學をも営んでいた。台湾文學史上の「塩分地帯」は、今の台南の佳里、北門、七股、學甲などのところである。その称呼の由来は、この辺りに重要な産物が塩であるが、土地もそのゆえ不毛で貧弱だと言われる。

¹³³ 王碧蕉「台湾文学考」『台湾文学』2巻1期、1942年2月、p.21-24。『日本統治期台湾文学文芸評論集 第四巻』、緑蔭書房、2001年、p.87。

¹³⁴ 同上、p.87。

東亜戦争」を支持しているうちに、「日本人意識」も台湾人の自己認識に食い込んでいた現象が伺われる。つまり、奇形な「桜」は本島人の心象を「本質は日本人、外見は台湾人」という国家に対する告白として映し出すと考える。「日本人」でなければならない時勢に渦巻かれた台湾人は、台湾の特質を捨てることなく、折衷の形で台湾の文化を保つ姿である。

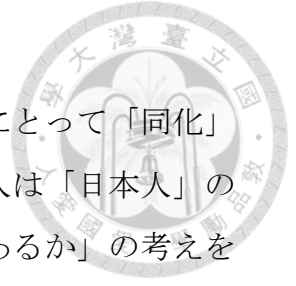
4. 1 皇国思想と天皇制による「皇民化運動」

いわゆる「皇民化運動」を研究するとき、「天皇」にかかわる一連の言葉をも見逃せないと思う。1936（昭和11）年に小林躋造は第十七代台湾総督へ就任に始まり、彼の著名な台湾統治の三大方針は「皇民化」「工業化」「南進基地化」に集約される。第一項の「皇民化」について、小林総督は「内地と同様の神経感覚を持つ所謂同化された天地」を創出するために「国語の普及、敬神崇祖の美風、国土の為になる合同奉仕作業等を奨励し一面従来の慣習にして日本人たるに適せざる陋習を打破する等」の「皇国民精神強化運動」であると示す¹³⁵。1940年（昭和15）年に鷺巣敦哉は、『台湾保甲皇民化読本』において島内の皇民化運動の現状を感想の形で記す。満州事変、国際連盟の脱退事件、戦争がもたらした思想界と政界の反省などの経緯で「本島人に日本精神をわからしめ、形、心共に立派な日本國民に導くへし」と思った鷺巣敦哉は、「皇民化運動」の「真意義」を解釈しようとした時に、同じく小林総督が地方官会議での発言を引用する。

殊に帝國の使命と臺灣の地位と現下の情勢とに鑑み、五百萬島民打つて一丸となり、齊しく皆國民たるの資格を體得し、相携へて國運の興隆に貢獻する覺悟を新にするは最も緊要の事に屬す。之が為め汎く皇國精神の徹底を圖り、普通教育を振興し言語風俗を匡勵して忠良なる帝國臣民たるの素地を培養し、併せて多數健全なる母國人を誘致して淳良なる民風を振作するを要す¹³⁶。

¹³⁵ 山本有造「日本における植民地統治思想の展開(2)―「六三問題」・「日韓併合」・「文化政治」・「皇民化政策」―」『アジア経済』32(2)、日本貿易振興機構アジア経済研究所研究支援部、1991年2月、p. 47から引用する。

¹³⁶ 中島利郎・吉原丈司編『鷺巣敦哉著作集3―台湾保甲皇民化読本』、緑蔭書房、2000年、p. 168。



小林総督と鷲巢敦哉など「日本人」の視点からみると、彼らにとって「同化」と「皇民化」との間に大きな差はないようである。なぜ台湾人は「日本人」の一員になれない理由は、台湾人の心の中には「支那人民族であるか」の考えをずっと持っていたのである。なので、以上の引用文で、被植民者の台湾人が統治者の日本人から「さっそく皇国精神を受け入れて日本国民のように国家のために犠牲する」と要求されることが明らかに観察できる。それゆえ、ここでは二つの結論を再び検討することができると思う。第一に、「天皇制」の性格はいかに台湾の政策に影響したかを理解してから、「皇民化運動」を施すときに「日本人化」運動という名称を使わず、「皇民化」を使うことを知る。第二に、台湾統治の実状に関心するにともない、常に台湾人の主張を代弁する姿勢をとった泉哲は、台湾での社会的不平等の問題を直ちに指す。社会的待遇の不当なる事に関し台湾人は極度の屈辱を感じていた¹³⁷。換言すれば、1895（明治28）年にて領台から1937（昭和12）年皇民化運動の展開まで、「皇民化」の責任を担うべきだった台湾人は、平等的な「日本人」の地位を一度も持っていなかった。

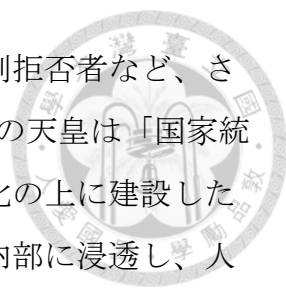
さて、近代日本帝国主義思想の最有力な鼓吹者であった徳富蘇峰は1916（大正5）年『大正の青年と帝国の前途』の序文で「君民徳を一にし、挙国一致的の帝国主義なり、即ち内に平民主義を行ひ、外に帝国主義を行ひ、而して皇室中心主義を以て両者を一貫統制するなり」という。ここにいう平民主義は、蘇峰のことばによれば「国家的平民主義」もしくは「天皇の臣民主義」である¹³⁸。それは「天皇制の帝国主義」に進む道を予告したと言えよう。

近代になると、日本は東アジアにおいて唯一の立憲制国家とはなったが、まさしく絶対専制的・軍事的・警察的な天皇制の性格を持っている。大日本帝国憲法の最大の特色は、万世一系の天皇が統治権を総攬する天皇の大権（第一条）によって、帝国憲法の権限と国民の基本的権利がいちじるしく制限されていた¹³⁹。国家の形成は国民の誕生を促し、民間では徳富蘇峰らの平民主義、陸羯南の国

¹³⁷ 山本有造「日本における植民地統治思想の展開(2)―「六三問題」・「日韓併合」・「文化政治」・「皇民化政策」―」、p. 41 から引用する。

¹³⁸ 井上清『日本帝国主義の形成』、岩波書店、1974年、p. 1。

¹³⁹ 松尾章一『近代天皇制国家と民衆・アジア』上、法政大学出版局、1998年、p. 203。



粹主義、内村鑑三のキリスト教思想、あるいは北村透谷ら体制拒否者など、さまざまな形の社会像・国民像が構想された¹⁴⁰。が、「現人神」の天皇は「国家統治ノ大権」を掌握して国家の頂点に立つ。天皇の絶対的の神聖化の上に建設した「皇国」において、憲法体制で規範された臣民像が、民衆の内部に浸透し、人民はついに「臣民」の道へ歩いていく。「臣民化」の過程では、「臣民」が伝統的な儒教的忠孝主義、天皇への絶対的忠誠観念によって大きく規定されざるをえない枠組みの中に置かれた¹⁴¹。

では、「国体」の中心思想は天皇制をめぐって「正当性」が樹立された後、教育政策の基本内容は天皇主義・帝国主義教育の徹底化と「立身出世」主義による学歴社会の確立であったと松尾章一氏が指摘する。その支柱はいうまでもなく「教育ニ関スル勅語」であった。「常ニ国憲ヲ重シ、国法ニ遵ヒ、一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ、是ノ如キハ独り朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス、又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顕彰スルニ足ラン」と宣明された内容では、天皇はが「忠君愛国」のシンボルに位置され、あらゆる「臣民」に「皇運」という大きな目標の下に奉公させる。きわめて天皇制的国家主義が完成した。

天皇制が組み立てられるうちに、政治体制と教育方針の結合が明らかに現われ、さらに「天皇」の宗教性も深める。前述のように「教育勅語」が渙発した後、神話重視の歴史教育は余すところなく実行されていた。例えば、教科書の改訂によって、皇国史観の概念が繰り返して強調された。尹健次氏の考察によると、日本は「神国」である記述が増えることに加えて、「神国」の理念に基づいた国土の領域は、地域的・身分的に各種各様であった人民を「国民」を囲い込むという作用を発揮した。言い換えると、これは「国体的君権の至高性・無制限性を統合原理にした同祖同族的な民族的一体感を醸成し、近代天皇制国家の支配の正統化をはかろうとするイデオロギー操作であった」¹⁴²という。

日本帝国はどうやって海外拡張の行為を合理化させるだろうか。その根本的支柱は「政治・教育・宗教」の三つの面が互いに強い繋がりを築き、「天皇制」

¹⁴⁰ 尹健次『日本国民論—近代日本のアイデンティティ』、p. 98。

¹⁴¹ 尹健次『民族幻想の蹉跎—日本人の自己像』、p. 33。

¹⁴² 同上、p. 58。

の影響力を最大化させようとするのである。それゆえ、帝国は強大な統御力を獲得するとともに国民精神も涵養できる。この精神は植民地にも及んでいる。鷲巢敦哉の考えでは、「新しい国民」であった台湾人は「教育勅語」を深く理解しなければならないと主張する。何故かと言うと、八紘一宇の皇道精神も、敬神尊皇の精神も、君民一体の忠君愛国の精神もみな教育勅語の趣旨であると彼は思う。なので、「本島人の皇民化」について、鷲巢敦哉の意見は以下のように示す。

本島人の皇民化には、本島人が我國が世界に誇る國體の尊いことを知り、日本臣民たる道を知り、同時に支那の歴史や外國の新領土統治等と比較して、我が一視同仁の仁政に感謝し、支那民族であるやうな考へをすて、立派な日本國の一人として心から内地人と共に、手をとつて行かうと云ふ考へになることが大切であります¹⁴³。

第二章で討論するように、西洋帝国の文明発展に比べて劣位に屈した日本人にとって、「天皇制」は民族の誇りとして重んじられる。現在、一般に台湾における「皇民化運動」を論及していたときに、まず、四つに分けられる政策が目される。具体的にいえば、第一に漢文廃止と日本語教育の徹底、第二に寺廟整理と神社の建造の強制、第三に改姓名運動、第四に皇民奉公会の結成である。「同化運動は、政治的同化と経済的同化を意味していたが、皇民化運動は文化的同化を意味していた」¹⁴⁴と伊藤幹彦氏が評論し、『台湾の息吹』でも「内地の翼賛運動は多分に政治的な運動だが、おなじ政治にしる、皇民化運動となると、スケールも大きく、深さもあるんぢやないか」¹⁴⁵と記す。

しかし、いわゆる「皇民化」という言葉の出現は官庁が主導して使ったのか。蔡錦堂氏の詳しい考察を参考にすると、「皇民化」の使用は最初から1936年8月から10月にかけてマスコミが輿論を操作して流行してきた結果であった。当

¹⁴³ 中島利郎・吉原丈司編『鷲巢敦哉著作集3—台湾保甲皇民化読本』p. 171。

¹⁴⁴ 伊藤幹彦「日本植民地時代の皇民化運動——台湾の思想状況を中心に——」『アジア文化：総合文化誌 特集1 アジアと日本(2)』、p. 40。

¹⁴⁵ 丹羽文雄『台湾の息吹』、p. 502。

年の9月に小林躋造総督は就任してから、「三大方針」の統治原則をすぐに発表しなかった。日中戦争が勃発後、総督府はただ中央の「国民精神総動員運動」に呼応して関連施策を行なった。要するに、民間に流行っていた「皇民化」という語は1939年に至って公的機関に受け入れられ、正式に官制の政策になっていた¹⁴⁶。

「皇民化」は台湾社会で自然に発生した用語だと考えられる。「皇民化」が普遍的に社会上に流行して納得される理由は、たぶん「皇国」「天皇の臣民」などの語が頻繁に多用されるのに関わっていると推測できる。また、蔡氏の研究によってもう一つ関心するところは、総督府ははじめて中央の政策に順応した「国民精神総動員運動」は、動員対象が「本島人」に限らず、「在台日本人」にも含めていた。帝国内の臣民がすべて動員される客体となった。

むろん、たとえ総督府は「皇民化運動」の創始者ではなくても、到底その成果を手中に収め、さらに台湾人を改造する新たなスローガンを獲得した。しかし、現在に固定される「皇民化運動」に対する認識は、台湾人が戦争を協力する側、為政者は協力させる側である。「皇民化」を台湾人の日本人化と規定して話は狭義の解釈に従ったものとするなら、台湾在住の内地人が対象に含まれるのは広義のものだと伊原吉之助氏が指摘する。氏の主張が以下のように示す。

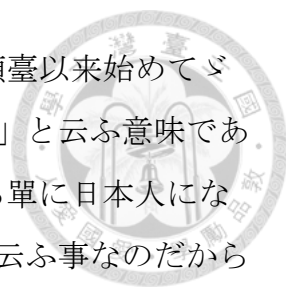
要は戦時体制下の台湾において、内地人も漢族も高砂族も、住民全員が心をあわせ、一致協力の下に同じ日本人としてこの戦争を戦い抜くことが大切であり、その一致協力のための運動が皇民化だ¹⁴⁷。

この見解は、実は1938（昭和13）年9月に台湾新民報に掲載された短文「皇民化運動に就いて」に現われる。

皇民化運動は今日始つたのではなく四十三年前から始つてゐるのだが今次支

¹⁴⁶ 蔡錦堂「〈皇民化運動〉再論」『淡江史学』18、2007年9月、p. 243。

¹⁴⁷ 伊原吉之助「台湾の皇民化運動—昭和十年代の台湾（二）—」『日本の南方関与と台湾』天理教道友社、1988年、p. 297。



那事変勃発以来今日程この運動が熱烈に為されてゐる事は領臺以来始めてあるやうに思はれる。(略)「皇民化」と云ふ事は「日本人化」と云ふ意味であるが本島人は既に四十三年前に日本人になつてゐるのだから單に日本人になれ、と云ふ意味では内容が薄弱だ。「良き日本人になる」と云ふ事なのだから獨り本島人のみの問題ではなく日本人全體の問題なのだ。内地人必ずしも完成された日本人でない。と同様新附の民である本島人としては未完成の人々の多いのは当然である¹⁴⁸。(下線は筆者)

竹内清の考えでは、「皇民化」は日本人化だけではなく、正に日本人と本島人と一緒に「良き日本人化」するのであった。こういう視点を以て、「本島人」を中心とする「皇民化」の立場に比較して本当の「一視同仁」の境界に達したのではないだろうか。なお、竹内清は「本島人も内地人も帝國臣民としては何等の差別がないのだ」と言い、両者が平等的地位を持ったのを強調する。

唯新附の民であるが故に性格民情、言葉、風俗、教育等に於いて内地人と異なるものがあるので一舉に法律制度等を内地と同様にすることは反つて統治方針の完成を期する上に悪い結果を生ずるので法律上其他に於いて内地と多少の差別は設けられてあるが、この差別は人格的の差別でもなければ差別せんがための差別では斷じて無い筈だ¹⁴⁹。(下線は筆者)

ある程度は、竹内清は「内地人」と「本島人」を同じレベルで見なした。その態度が多少ヒューマニズムの観点であつたが、実際の状況を分ればやや理想主義的だと言えよう。

泉哲が1920年代において、「島民は漢族の末裔で、南支人と同種同文、其文化の点に於て内地人と多大の懸隔あるものと信じて居らぬ。然るに総督府及び内地人の島民に対する態度は恰も文明国人が番人若くは動物に対すると同一で

¹⁴⁸ 竹内清「皇民化運動に就て」『事変と台湾人』日滿新興文化協会、1940年三版、p. 206。

¹⁴⁹ 同上、p. 208。

あると云って差し支えない¹⁵⁰と島民の差別待遇を強く批判する。この問題は一時に解決できなかつた。当局は、台湾人に「天皇の赤子」として内地人とともに協同し戦争協力させるのを要求する一方、「対岸の中国人とを繋ぐ民族的な感情を完全に断絶し」¹⁵¹たのも期待する。台湾人が「良き日本人」になることを待ち焦がれた統治者および「皇民化運動」に熱心な人は、社会における根本的な民族差別的な構造がほとんど変わらなかつたことを差し置いた。だから、台湾人の「日本人意識」を立て直すときに、予想外の発展も起こした。その結果は、伊藤氏が言ったように、皇民化運動と戦時動員体制は台湾人のアイデンティティの破壊を意図しており、その反作用として台湾人意識の強化が生じたのである¹⁵²。

4. 2 日本人意識と台湾人意識の韻頡

日本帝国の新領土になったと定めた 1895 年、日清講和条約により、台湾住民は国籍の選択権をもたらしした。二年以内に、台湾以外に移住を望む台湾住民は、自由に所有不動産を処分して台湾から退去する権力がある。もし退去を選ばなかつたら、帝国の臣民とみなすこととなる。

基本的に、台湾住民の身分が帝国によって承認され、領土も帝国の一部になったが、法制的な問題は終始的に解決できなかつた。このような状態にした台湾について「法制的に「日本」であって「日本」でない地域と位置づけるに等しかつた」¹⁵³と小熊英二氏が主張する。台湾の教育責任者伊沢修二や福沢諭吉は、台湾を日本に編入すると主張しながら、「日本人」としての権利を付与することは拒否の姿勢を取った。被植民者はたとえ名義上の帝国臣民だと認められても、権利の平等とは意味することではない。まさしく「日本人」であって「日本人」

¹⁵⁰ 泉哲の「台湾統治策変更の必要」(『外交時報』第 247 号、1919 年 4 月)と「台湾統治策の根本的変革を促す」(『太陽』第 26 巻第 8 号、1920 年 7 月)でまとめる資料。「日本における植民地統治思想の展開(2)―「六三問題」・「日韓併合」・「文化政治」・「皇民化政策」―」から引用する、p. 41。

¹⁵¹ 井手勇「〈皇民文学〉という言葉の意味について」『天理インターカルチャー研究所研究論叢』9 号、天理インターカルチャー研究所、2000 年 3 月、p. 27。

¹⁵² 伊藤幹彦「日本植民地時代の皇民化運動——台湾の思想状況を中心に——」、p. 44。

¹⁵³ 小熊英二『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』、p. 123。

でない存在になる¹⁵⁴。若林正文氏もこういう日本人の文化は押し付けようとするが、権利・義務においては差別を維持するというのを「曖昧な国民化」と指摘する¹⁵⁵。

国家と領土の関係からみると、母国の日本は実に西洋の帝国主義国家の模倣者であり、植民地の台湾はこの前に中国の統治を受けていたが、独立な政治的単位として存在していないと言える。陳偉智氏は「外地」と呼ばれる台湾のことを「非国家的社会」(non-statist society)と定義する¹⁵⁶。台湾は「国家」のレベルで民族抗争を進行することができないゆえ、当時の台湾知識人は西方に流行し始める新しい思潮——例えば「民族」と「階級」の概念——を学んで、台湾の独特な植民地の問題により、世界的な抗争と論述の中にその特異性を強調する¹⁵⁷。まず、台湾が日本の植民地になってから独立な言語と文化形態を発展していった過程をめぐって検討する。

フェイ・阮・クリーマン氏は植民地台湾における言語的・文化的アイデンティティの問題に触れるうちに、「言語」の重要性を提起する。

言語は、集団文化の主たる伝達手段であると同時に、国民の帰属意識の象徴でもある。言語には民族性や国民アイデンティティを表現する力がある。また、個人、民族集団、国民を定義する上で不可欠な役割を担うことから、言語によって形成された文化は、共通のアイデンティティを育てる一つの培養装置だと言える。言語は、文化同様、絶え間なく互いの領域を侵害し、他者を変容させると同時に、自らも変容させられる。その変容は、平和裏な交流と適合、移住やディアスポラ、そしてもちろん、戦争をはじめとする政治的プロセスを介した強制的な支配をとおして生じる。¹⁵⁸ (下線は筆者)

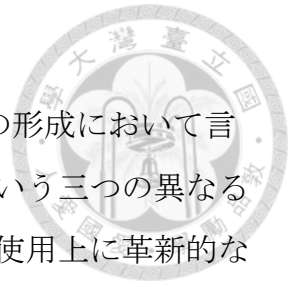
¹⁵⁴ 同上、p. 3-4。

¹⁵⁵ 若林正文『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』、筑摩書房、2001年、p. 47。

¹⁵⁶ 陳偉智「戦争、文化與世界史：從吳新榮「獻給決戰」一詩探討新時間空間化的論述系譜」『戦争與分界：「総力戦」下臺灣・韓国的主体重塑與文化政治』、韓国台湾比較文化研究會、聯經出版、2011年、p. 3。

¹⁵⁷ 朱恵足『「現代」的移植與翻譯：日治時期台灣小説的後殖民思考』、p. 64。

¹⁵⁸ フェイ・阮・クリーマン著、林ゆう子訳『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本



引用文が示すように、民族性、国民アイデンティティと文化の形成において言語は決定的な要素だと認められる。「中国」「日本」「台湾」という三つの異なるアイデンティティ認識の渦に迷っていた台湾人は、「言語」の使用上に革新的な時期を迎えるのは1920年代の台湾における新文学運動である。

中国の「白話文」を提唱された新文学運動は、単なる言語と文体に限らず、「反植民地政治」「反封建」や近代的な啓蒙活動という社会運動の色彩を帯びている。つまり、「祖国」の中国と政治上や地理上の分裂状態になったが、「祖国」の文体を提唱して実践した過程によって、台湾の知識人は中国に関わる身分を再確認した。また両者は共同の文化基盤を共有した政治的な意義があると推定される¹⁵⁹。しかし、この時期の文学運動は外部の「祖国」から移入したものではなかったと陳培豊氏が指摘する。氏の考えでは、これは台湾の内部から産生した「植民地漢文」である。いわゆる「植民地漢文」とは、初期に統治者が支配上の便利のために発明したものである。統治者は被統治者の台湾人とともに使われた。「植民地漢文」は啓蒙の観念と「同化」のイデオロギーを乗って、その形が古典的漢文、通俗的漢文、和製漢文と近代化の語彙と混合して仲介の文体を形成する¹⁶⁰。郷土話文運動の後期に入ると、口語化の方向に発展した「植民地漢文」は台湾知識人だけに使用できる文体になった。台湾人はそれを抵抗の方策として統治者の検閲を避けた。が、思想統制を実施する日本統治者にとって、解読できない「植民地漢文」は台湾人に専属する「敵性的他者」であったので、「漢文欄」の廃止も不可避の結局になってしまった¹⁶¹。

漢字文化圏の一員である台湾では、中国と日本における漢字の使い方が融和されて自分の特有の言語用法を創出してきた。このような「抗日」のイデオロギーが含まれる文体は当局によって潰されたに至っても不思議ではないだろう。言い換えると、台湾人の中に、中国に基づいた中国人意識から台湾人意識の萌

語文学』、慶応義塾大学出版会、2007年、p. 155-156。

¹⁵⁹ 陳培豊「由「同文」的邊界移動來看台灣文學的特性：日治時期的新文學・郷土文學・皇民文學・興亞文學」『東亞文学的実像與虚像』、『東亞文学的実像與虚像』、聯経出版、2013年、p. 139-142。

¹⁶⁰ 同上、p. 136。

¹⁶¹ 同上、p. 154-155。

芽へ発展していく過程に、日本人意識は常に強制的な姿として介入した。この現象も台湾人が自らの政治的権力を求めるプロセスに見える。

まず、下関条約以後、支配関係が失った中国との関連性を見てみよう。言うまでもなく、歴史的脈絡において台湾と中国に密接な相互関係を持ち、台湾に移民した漢民族は中国を文化的や精神的な故郷と見なした。一般的に、台湾の漢民族は中国へ「祖国愛」を抱いた理由は、文化の連帯感や清国統治の名残ばかりでなく、日本殖民政策の抑圧と現実に対する無力感をも含める¹⁶²。その結果は、中国に多大な理想的期待を抱いていた台湾知識人が、たちまちその理想と現実との間に大きな隔たりを看取した。それゆえ、具体性と現実性が欠如していた対中国の「祖国意識」はだんだん消えていった。これは前述の台湾で起こった「中国白話文」の現象に繋がっていると陳培豊氏が主張する。氏の見解では、この現象は台湾知識人が「白話文」に対して自分なりの解釈を加えてきた幻想の錯覚である。台湾人はこの文体が自分の社会文化と合流できなかったことを発見してから、改めて他の方法を探し始める。例えば、その後に登場した1930年代の台湾話文論争と郷土文学運動などがそうである¹⁶³。

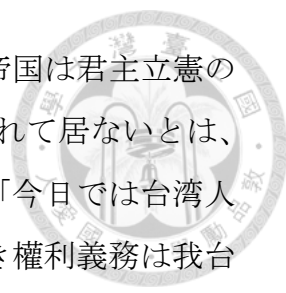
では、植民母国の日本との関連性はどうか。台湾領有時代に入って、台湾人は日本人身分を持っており、「台湾抗日運動」と呼ばれる武装闘争の蜂起が日本の圧倒的な統治力によって平伏される以後、この身分の曖昧さは作用し始める。

1920（大正9）年、在日の台湾人留学生が集結して「新民会」を結成した。「台湾のあらゆる革新すべき事項を考究し、文化の向上を図る」という目標を掲げて、台湾人の地位の改善と向上を実現することを企図する。機関紙の『台湾青年』に載せる「台湾は中華の旧土、（台湾人は）日本の新民である」という記事からみると、漢民族アイデンティティを持つ台湾の文化人は、ある意味で「抗日」でありながら同時に「親日」でもあるという微妙な性格を帯びることになる¹⁶⁴と評価される。

¹⁶² 例えば、荊子馨『成為日本人：殖民地台灣與認同政治』、p. 113 や黄俊傑著『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史変遷』、p. 102 など。

¹⁶³ 同上上、p. 140-142。

¹⁶⁴ 同上、p. 322。



台湾文化協会の蔡培火が『台湾青年』の巻頭言で「大日本帝国は君主立憲の国柄であるに拘らず、独り我台湾に於てのみ、立憲政治の行はれて居ないとは、何たる不合理」と書き、抗議の第一声を放ってから、同誌に「今日では台湾人も内地人も法律上均しく日本人である。日本人として有すべき権利義務は我台湾人は当然之を有す」とか、「台湾は帝国の一部分で人民の権利義務が憲法の精神から云へば別に彼厚此薄のない筈である」¹⁶⁵などの言論が発表される。中央の政治界に訴える手段は、帝国が唱える天皇制の「一視同仁」精神や憲法制度を逆に利用される。また、新民会に活躍した林呈禄も『台湾青年』の創刊号に「新時代に処する台湾青年の覚悟」を發表し、植民統治の根本的方針と異民族の融和問題を論じる。当時、台湾は東洋に唯一の植民地である。彼は当局に対し、国家の基礎を確立するために新時代の思潮に従うと進言した。本島人は国民の一員として、日本統治にののもとに台湾文化を開発し、日本と漢民族との間の架橋になって東洋平和の任務を担うべきだとも言う。朱恵足氏は林呈禄の論点について、彼が「人道正義」「平和自由」など近代的思想を用いて台湾の民族運動を合理化すると解説する¹⁶⁶。上述の蔡培火と林呈禄は同じく台湾を日本帝国の版図に入れ、日本の一部であることを認めておるが、文化面において台湾の特色を保つ態度も示したと考える。

当時の大正「デモクラシー」と普遍的文明の潮流に乗り、台湾の青年たちの論調を支持し、植民地の専制的性格を批判する日本知識人が少数ではなかった。日本側ジャーナリストによれば、台湾のある青年は、「自分等は今や退いて純支那人たる能はず、進んで純日本人たる能はず、正に其の中間にふら附いて居る、此心の寂しさを察してください」¹⁶⁷と述べたという。換言すれば、権利を求め、「日本人」意識に変更した台湾人は、骨子に中国に対する民族と文化の共感を放棄できなかつた。さらに、植民地になってから台湾の住民は自分が台湾人という意識を浮かべてきた。何故かと言うと、殖民者の日本帝国は異民族の事実

¹⁶⁵ 小熊英二『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』、p. 329、334 で引用する。

¹⁶⁶ 朱恵足『「現代」的移植與翻譯：日治時期台灣小説的後殖民思考』、p. 32-33。

¹⁶⁷ 同上、p. 334。

が十分にインパクトを与えられるのである¹⁶⁸。それに加えて、「内地人・本島人・蕃人」という大日本帝国の階級秩序意識の中に置かれていた「二等臣民」の位置は台湾人にとって従属的な圧迫感が迫られる。なので、若林氏の考察では、抵抗運動や文化運動を通じて「台湾人」のアイデンティティ（「台湾意識」）が反転させて登場してきたのである¹⁶⁹。氏も蔣渭水の発言「台湾議会請願の出現せしと同時に台湾人の人格が生れたり」¹⁷⁰を例としてあげる。

以上の論述に、「中国人・台湾人・日本人」という三つの「アイデンティティ」が同時代に交錯されて、影響されて、競争されていた実相が伺われる。小熊氏はこれが台湾人にとって二者択一の言葉におさまらないアンビヴァレンスをもっていたことを指摘する¹⁷¹。台湾人は「日本人」と同じ平等な権利や地位を追求するが、完全に日本人に同化させることを拒否したい姿勢を表現した。戦争期になってから、これはまさに質問さえできない既定の「存在状態」¹⁷²になってしまった。「政治アイデンティティ」が固定化されていたが、文化面において「漢民族」の基礎から変動の兆しもようやく現われた。「中国人意識」から「台湾人意識」への傾向があらわになり、日中戦争後の皇民化運動も反作用として台湾人意識の強化が生じたのである¹⁷³。

進退両難の状態に落ち込んでいて、ついに「文化アイデンティティ」(cultural identity) と「政治アイデンティティ」(political identity) の相違に直面した台湾人の姿は黄俊傑氏が指摘する。いわゆる「文化アイデンティティ」は抽象的な「心理的構造」であって、悠久の歴史文化価値が個人の心に消すことのできない烙印を押すことによって、個人を当該文化価値の搭載者にするを指す。このような抽象的な「心理的構造」は長期に亘る歴史経験が積み重ねられて成るものであって、短期間の政治的または経済的利益によって揺るがされ

¹⁶⁸ 黄昭堂『台湾総督府』、教育社、1987年。『成為日本人：殖民地台湾與認同政治』、p. 115から引用する。

¹⁶⁹ 若林正丈『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』、p. 53。

¹⁷⁰ 同上。

¹⁷¹ 小熊英二『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』、p. 13。

¹⁷² 荊子馨『成為日本人：殖民地台湾與認同政治』、p. 163。

¹⁷³ 伊藤幹彦「日本植民地時代の皇民化運動——台湾の思想状況を中心に——」、p. 44。

るものではない¹⁷⁴。一方、「政治アイデンティティ」とは、具体的な国家、政府または政権をアイデンティティの対象とするものであり、強烈な現実性を内在している¹⁷⁵。

要するに、黄俊傑氏の研究では「文化アイデンティティ」が先天的な価値の涵養であり、「政治アイデンティティ」は後天的で「契約関係」の上に成り立つ権利義務関係である。最初に、「文化アイデンティティ」の対象は中華文化のことであるが、「政治アイデンティティ」は日本帝国の統治を指示する。その後、中国文化の勢力が弱くなってきたに加えて、日本帝国は台湾全島の動員を企んでいたが、文壇における本島人の文化人はこの文化上の新しい「危機」を向かって「台湾文化」の建設へ転向していった。中国の漢文化を唱えることより「台湾」の特色を探して始める。林呈祿は前述のエッセイで台湾青年を台湾文化を建設することを提唱した。

我島民の大部分は今日まで不自由なる環境に在るセイか知らぬが、兎に角現在に於ても尚ほ進取的気象に乏しく、奮闘的精神は尚更足らないのである。

(略) 故に近い将来に於て社会の中堅たるべき有為青年諸君は(略) 必ず台湾の文化開発と云ふ大任務は各其双肩に懸つてゐるといふことを自覚するであらう。

第一回大東亜文学者大会にて、準備委員の一戸務¹⁷⁶は「大東亜文学者大会の意義」を題として発言する。大東亜地域の文芸を改めて建設しようという理念を宣伝し、「地方色の文芸」に対する重視も示す。

新聞紙上などで、この大会を東亜文芸の復興であるといったような題目をつけているが、私からいわせれば、決してこれは東亜文芸の復興ではなく、建

¹⁷⁴ 黄俊傑著、臼井進訳『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史変遷』、東方書店、2008年、p. 60。

¹⁷⁵ 同上、p. 61。

¹⁷⁶ 1904年に生まれの中国文学者。支那文学の紹介・翻訳に活躍する。桜本富雄『日本文学報国会—大東亜戦争下の文学者たち』、青木書店、1995年、p. 148。

設なのである。(略) われわれは身近な地にある地方色の文芸に対して、あまりになおざりであった。満州文学、台湾文学、朝鮮文学などについて特にその感を深くする。(略) 日本は、今後これらの地方の文芸にも力を貸し、後援して、日本文化の良さと地方文芸の良さとを混合せねばならぬ。¹⁷⁷

地方文芸を支えて、日本文化と地方文芸の結合を目指す帝国の態度は、当時の植民地の文学者にとって鼓舞を与えた。その後、本島人文学者は「地方文化」の名を掲げ、再び創作の動力を取り戻した。一方、総督府の場合では、「地方文化」の提唱がいくつかの利点があると承認した。例を挙げると、台湾の文芸界に反動も起こさず、表面的な日台融和を維持し、当局はついに順調に動員の政策を進めるなどがある¹⁷⁸。

実は、大東亜文学者大会が催される前に、評論家黄得時は、「文化の地方分散＝所謂地方文化の確立」について、評論を発表する。文壇の現状、作家の動向、どうやって台湾文壇を建設するかを詳しく分析し、改善提案をも提出する。文化方面の発展で、黄得時は政府の積極的な作為を期待する。例えば、文学賞を設立、文学団体や雑誌社に援助金や補助金を出すほかに、文化人に政治的地位を付与することをも薦めた。

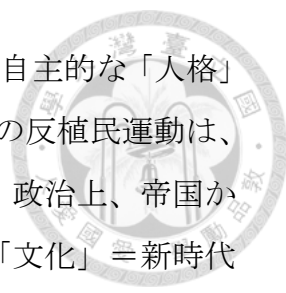
作家に政治的地位を與へること一つ方法であらう。(略) 作家に限らず、美術家、音楽家、劇作家その他文化面に携はる人々をどしどし政治舞台へ動員するやうに希望してゐる。¹⁷⁹

台湾に基づいた「文化アイデンティティ」を建設しはじめた道は1920年代に遡られる。新文学運動と「台湾文化協会」が主導した文化向上の活動などでは、植民者の日本の差別統治及び封建思想を持った台湾人を批判した。このような現状を改造しようとした意図は、台湾社会を新たな段階に進ませると陳偉智氏

¹⁷⁷ 同上、p. 150。

¹⁷⁸ 李文卿『帝國想像—戦争時期的台湾新文學』、国立台湾文学館、2012年、p. 85。

¹⁷⁹ 黄得時「臺灣文壇建設論」『台湾文学』1-2、1941年9月、p. 2-9。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四巻』、緑陰書房、2001年、p. 33。



が指摘する。平等的かつ自治的近代政治、あるいは理性的かつ自主的な「人格」を求めるのはいい例として取り上げられる。それに、1920年代の反植民運動は、台湾人を鼓舞し、近代的な民族身分に関する思考が始まった。政治上、帝国から独立する作法が採用されなかったが、思想上、時間概念の「文化」＝新時代と空間概念の「文化」＝台湾人、台湾文化の自立性の確立と見える¹⁸⁰。その後、戦時期に入り、戦争色が濃くなってきた時局に生きていた本島人の文学者たちは、政府の力を頼らなければ、文学が消えていく危険性があると知っていた。たとえ「地方文化」は日本帝国が作った理想郷だとしても、本島人作家たちはやむを得ず畏にかかれる。但し、その過程によって台湾の自らの文化を確立して発揚しよう熱意は、だんだん文化人の内面に醸してきた。「文化アイデンティティ」の内質を「台湾色」に注いでいたこの努力は、帝国の全力を尽くされて構築した「政治アイデンティティ」の勢力とは叶えられなかったが、戦時下の本島人文学者にとって一種の慰みだろう。

4. 3 本島人の作品分析—『決戦台湾小説集』

昭和期に活躍していたプロレタリア系の評論家宮本百合子は、1941(昭和16)年のエッセイ「作家と時代意識」で、時代と作家の関係を述べる。「時代に對する作家の意識は、世相への投合としてあらはれるよりも、常に、世相のよつて來る時代の性格に對して示される作家の文學的な態度としてあらはれるのは意味ふかいところだと思ふ」¹⁸¹。

いわゆる「世相」とは、世の中のありさまである。戦時下の作家たちは、民衆、政治家、統治者とともに暮らしていて、社会から外れることはなかった。が、このとき世間で流行っていた輿論は、戦争に影響されてしまったものである。「世相への投合」は、政府が作っている時流に乗ることしか指さないだろうか。あるいは世の中に埋もれている民衆の平凡さを描くことか。ある時代は、ある時代の性格が存在している。どのように時代の性格を理解しようとするか、作家の文學的な態度は決定的なきっかけだと考えられる。戦争期におい

¹⁸⁰ 陳偉智「戦争、文化與世界史：從吳新榮「獻給決戦」一詩探討新時間空間化的論述系譜」『戦争與分界：「総力戦」下臺灣・韓国の主体重塑與文化政治』、p. 26。

¹⁸¹ 宮本百合子「作家と時代意識」『文学の進路』、高山書院、1941年、p. 19。

て、衝突と矛盾が満ちていた社会の動向で、本島人作家は高圧的な環境に対処しながら、激化し続ける内面的な争いを伴っていた姿である。彼らは彼なりの文学的態度で時代の性格を記録した作家の一群だと思う。

国民精神総動員運動と皇民奉公運動を始動させてから、日本統治者は厳密な組織を作って、作品の内容を監視し、作家に動員させて国策文学の創作を要求する。「皇民化」の統治術を研究する車承棋氏は、帝国の支配権と管理権が植民地の人を「皇国臣民」として統治するかぎりに力を発揮できると論ずる。また、この支配権も人数が多くなっていく「皇民」が「皇民」の生き方を堅持する場合に維持できると言う¹⁸²。日本帝国が統治の権力を広げる前提は、「皇民」が不可欠な要素である。このとき、積極的に国家の方針を宣伝する文学者が政府にとって重要な資産になる。但し、崔末順氏の研究で、社会や政治体制はその成員の思想と行為を規範しているが、その体制が長い時間にずっと成員の賛同を得られるのはやや困難である。さらに、成員も逆に結構の局限性を意識したおそれもある。結果的に、体制内の新しい可能性を探る作家たちは、小説という形式で完成した作品の中に、公的な方向に十分に従わない可能性がある¹⁸³。これは戦時下の本島人作家の国策文学を研究するとき大きなヒントだと考える。

作家の意識と作品の内容に触れてから、次に読者の問題を討論したい。1943（昭和18）年2月、『台湾芸術』に中村哲と龍瑛宗の対談を掲載した。中村哲は、「臺灣にはよい読者が少いやうで」あるかという質問を提出し、龍瑛宗の答えは以下のように示す。

ある一定の水準に達してゐないのです。本島人で純文學の理解出来る人は少いやうです。吾々の書いたものにしたところで、實際は、作品の内容そのものが、どつちかと云へば、内地人よりも本島人の共鳴出来る問題を取扱つてゐる、それにもかゝらず、讀んで解つてくれるのは本島人よりも内地人の

¹⁸² 車承棋「搖籃的帝国、後殖民的文化政治学：皇民化的技術及其悖論」『戦争與分界：「総力戦」下臺灣・韓国的主体重塑與文化政治』、韓国台湾比較文化研究會、聯経出版、2011年、p. 103。

¹⁸³ 崔末順「戦争期台湾文学の審美化傾向及其意義」『台湾文学研究学報』13、国立台湾文学館、2011年10月、p. 112。

方が多く、作品への反響は、臺灣よりもむしろ内地に多いのです。云はゞ、僕等の文學は奇妙な文學なんです。¹⁸⁴



龍瑛宗は本島人の代表的な作家として、率直に本島人は文学に対する理解力が乏しい状況を披瀝する。中島利郎氏の考察によって、一般の台湾人が1940年代には過半は日本語に通じるようになった。ただし、読書市場が成熟したといっても、日本語で書かれた小説を「味読」する程の者は、中学以上の教育を受け、あるいは日本留学の経験がある知識階級の一部の人々だろう¹⁸⁵。そしたら、たとえ統治者は文学者に植民地民衆の愛国心を励ます作品を書かせる野望を持って、実際にこれらの文学の「読者」はいったい誰だろうか。フィックス氏の先行研究で、作家が国家の要請した理念を応じるときに、構造内にその理念に独自の解釈を加え、一般読者でなく統治者たちに向けて特定の発言を行う現象があると指摘する¹⁸⁶。

要するに、政府の委嘱計画に応える作品は「統治者向け」の性質を帯びるものであったゆえ、作家個人の政治的態及び理念などは、テキストを分析するときに注目すべきところだと考える。

さて、大東亜戦争が終わる直前の1944年年末から1945年1月にかけて、台湾出版文化株式会社によって発行された『決戦台湾小説集 乾之巻・坤之巻』は、その成立の経緯が1943年に台北市公会堂（現中山堂）において開かれた「台湾決戦文学会議」から発端した。会議の議題は「本島文学決戦態勢の確立、文学者の戦争協力—その理念と実践方法」であった。台湾文学奉公会が主催し、台湾総督府情報課・皇民奉公会中央本部・日本文学報国会の後援を得、当時台湾で活躍していた日本と台湾の文芸家五十八名が参加した。台湾人作家を中心に成立した文芸誌『台湾文学』で、会議記録に「銃後における戦士の責務は戦

¹⁸⁴ 「中村哲氏・龍瑛宗氏対談会」『台湾芸術』4-2、1943年2月、p. 8-13。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四巻』、緑陰書房、2001年、p. 388。

¹⁸⁵ 中島利郎「日本統治末期の台湾文学—台湾総督府情報課編『決戦台湾小説集 乾之巻／坤之巻』の刊行」『岐阜聖徳学院大学紀要 41巻』、p. 10。

¹⁸⁶ ダグラス・L・フィックス「徴用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』、p. 159。

力増強の為の生産擴充と決戦意識の確立昂揚、即ち武力戦と有機的、一體的に結合せらるべき生産戦であり、思想戦である」¹⁸⁷と記される。台湾を決戦の要塞として作り上げる公的な意図が明らかになった。聖戦完遂という大きな理想の下に、個人の利益を捨てて国益のために「生産戦」に没頭していった臣民たちは、異議が話せず思想の統一を求める「思想戦」の原則までに服膺する。前述のとおり、「地方文化」を称賛していた『台湾文学』一誌もその「国策」を呼応して、以下の一段を以て「告白し」た。

凡そ文學の本領は國民大衆の思想を情緒の面より衝くことに依り一つの方向に歸一せしめるにある。一つの方向とは文學者が皇國に生を享けてゐる以上當然國家の志向と不離一體でなければならぬ。今日の文學は過去におけるが如く文學者個人の感情の反芻ではなく、國家の至上命令に即應する創造的活動でなければならぬ¹⁸⁸。(下線は筆者)

基本的に、国策を貫いている文学作品を書かれる方針は確立する。あらゆる資源が戦争目的に動員された決戦期には、文学も「精神的武器」として「戦略基地台湾」を強化するために奉仕しなければならなかったのである¹⁸⁹。翌年の6月、日本文学報国会の「総決起大会」に先立ち、台湾文学奉公会も「台湾文学界の総決起」に呼びかけ、台湾における文学者を集めて戦争協力という事業に具象化させた。

計画の目的は、「要塞臺灣の戦ふ姿を如實に描寫し、島民の啓発に資すると共に、明朗にして潤ひある情操を養ひ、明日への活力を振起し、併せて産業戦士に對する鼓舞激勵の糧」を作成するのである。いわゆる「産業戦士」とは、国家のために武士道精神を發揮し、赤誠を上君に捧げ、高度国防国家の生産に従事した人間だと呼ばれる¹⁹⁰。故に、作家を台湾の各部面の第一線基地に派遣し、

¹⁸⁷ 「臺灣決戦文學會議の記」『台湾文学』4巻1期(1943.12)、p.30-31。『日本統治期台湾文學文芸評論集 第四卷』(緑陰書房、2001年)から引用する。p.165。

¹⁸⁸ 同上、p.165。

¹⁸⁹ ダグラス・L・フィックス「徴用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」『よみかえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』、p.137。

¹⁹⁰ 菊池麟平『産業武士道』、ダイヤモンド社、1942年。南博著、邱璦雯訳『日本人論：明治維

作品の様式も限定された。「単なる表面的見聞に終ることなく、真に現地で挺身する人々の息吹に觸れ、その労苦を味ふため一週間内外現地に滞在し起居寢食を共にして、その間の見聞体験を素材として小説を書く」と戦力増強に敢闘する島民の姿を描いて文学作品である¹⁹¹。作品が完成した後、数種の官庁出版物で発表された。皇民奉公会の情報機関誌『新建設』、総督府情報課編集の『台湾時報』、台湾文学奉公会編集の『台湾文芸』（前身は『台湾文学』『文芸台湾』などの文芸誌が一元化されたもの）と『旬刊台新』である。

フィックス氏は『決戦台湾小説集』の関係で動員された本島人文学者が面した境遇をまとめる。まず、作家選定過程から執筆作品の最終的な編集に至るまで、作家は自らのイデオロギーや戦争に対する忠誠と支持について、公的および私的な一連の審査を受けねばならなかった¹⁹²。そして、台湾人に同情の念を抱いた日本人リベラリスト、台北帝大の中村哲ですら、作家は大衆に「国体」という日本の概念を理解させる任務に当たるべきだと主張した。なので、本島人作家とその作品は皇国国家観の基本的教条を読者に伝達する架け橋として仕えるものとされたのである¹⁹³。

さて、第三節で分析するテキストは張文環(1909-1978)、呂赫若(1914-1951)、龍瑛宗(1911-1999)、楊逵(1905-1985)と周金波(1920-1996)の作品である。1932(昭和7)年に「送報伏」として文壇に地位を確立する楊逵をはじめ、1935(昭和10)年に日本の『文学評論』に「牛車」を発表した呂赫若、1936(昭和11)年に処女作「パパイヤのある街」を発表して『改造』の懸賞小説の佳作となった龍瑛宗、また張文環も1930年頃日本語で本格的に小説執筆を開始した。この四人と比べて、周金波が1941(昭和16)年在京中に処女作「水癌」を『文芸台湾』に投稿して西川満の称賛を得たので文学活動に入る。

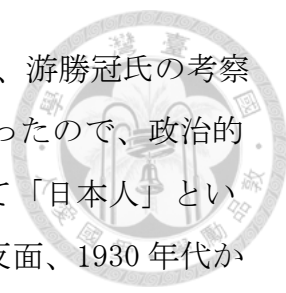
一般的に、戦時下の徴用作家を討論するとき、常に分類を加える。例えば、李文卿氏は簡単に「世代」によって「動員された一群」(楊、張、呂、龍)と「〈国

新から現代まで』、紅螞蟻図書、2003年、p. 170。

¹⁹¹ 「作家派遣について」『台湾文芸』1-4、1944年8月、p. 2。『日本統治期台湾文學文芸評論集第四卷』、緑陰書房、2001年、p. 282。

¹⁹² ダグラス・L・フィックス「徴用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』、p. 132。

¹⁹³ 同上、p. 137。



語) 世代」(周、陳火泉と王昶雄など) を分けられる¹⁹⁴。次に、游勝冠氏の考察では、1940年代以後、政府は特定な創作環境を作る意図があったので、政治的な匂いが漂っている雰囲気の中に文学の道に入る作家にとって「日本人」という身分は違和感があまり大きな影響はないようである。その反面、1930年代からすでに文壇で活動していた作家たちにとって政治的圧力がかなり強いと言えよう¹⁹⁵。また、張修慎氏は1930年代の文学者は社会運動の全体と不可分な関係にあったと提示する。直接に統治者の強圧政策に向かって主人公による抵抗の描写が多くないが、当時の台湾社会の農民、土地及び統治者の因果関係を極めて写実的な手法で描いていることが示される¹⁹⁶。李氏の「世代」論、游氏の「政治的雰囲気」と張氏の「社会運動」などの説は参考に値する。

とはいえ、本論文の研究主題「国策文学」というジャンルで視点で集めて考える。以上五名の作家の中に、楊逵が一番年上、そして呂赫若と周金波の生年が些か遅かったが、ほとんど近似的な時代の色合いに育てられた。では、先に言及したように1930年代と1940年代を区切りと見られる理由は、周金波の成長過程をともに考慮しなければならない。周は1933(昭和8)年から1941年にかけて東京に留学したので日本語に慣熟した。しかも彼が滞日していたときに、日本政府は台湾に対する統治もいよいよ深化してきた。台湾新文学の興隆期、日中戦争後の台湾文壇の激変も経験しなかった周にとって、「日本人意識がほかの作家より高いことも不思議ではないだろう。周金波は、楊逵や張文環らのように1930年代から積極的に台湾の社会運動を参与し、あるいは文学組織に参加した経験を持ってない。それゆえ、国家動員の意味深い『決戦台湾小説集』という創作委嘱計画を執行するときに、周の作品の基調は、政策を支持する傾きが明らかであり、その思惟も「台湾人を改造する」主題に囲まれて片面的となる。それに比べて、楊逵・張文環・呂赫若・龍瑛宗は文学界に豊かな体験があったので、作品の中に別の企図が隠されている傾向が現れる。

総じて、第三節の第一項で、張文環「雲の中」、呂赫若「風頭水尾」、龍瑛宗

¹⁹⁴ 李文卿『帝國想像—戦争時期的台湾新文学』、p. 117。

¹⁹⁵ 游勝冠『殖民主義與文化抗争—日據時期台湾解殖文学』、群学出版、2012年、p. 357。

¹⁹⁶ 張修慎「日本の「近代の超克」思想と戦時下台湾知識人の諸相」、『台大日本語研究 11』、台湾大学出版委員会、2006年6月、p. 15。

「若い海」と楊逵「増産の蔭に」を分析し、第二項で周金波「助教」を考察する。



4. 3. 1 言外の意味—醸しだされる作家の態度

4. 3. 1. 1 張文環「雲の中」と呂赫若「風頭水尾」

若いときから渡日し、左翼組織「東京台湾文化サークル」に参加し、文芸誌『フォルモサ』を発行した張文環は、帰台後も文学の事業に勤めて、西川満主宰の『文芸台湾』と競り合った『台湾文学』を創刊した。彼の作品は、「ヒューマニズムの手法と郷土文学の理念を借りた民俗的な手法と、暖かい気持ちで人びとの庶民的な喜怒哀楽を描く場面が至るところに見受けられる」と評価する¹⁹⁷。一方、「(『台湾文学』) 雑誌が機となつて臺灣文化に意のある人々が、今までの趣味的な文化から一步前進して情熱と誠實のある臺灣文化の創造に活動するであらうことを思ふと、私も何かした一種の楽しさをおぼえたのだ」¹⁹⁸と賞賛した同じく『台湾文学』の同人であった呂赫若は、台湾の土着の風習や伝統的家庭を写實的に描き痛烈な社会批評となっており、完成度の高い作品が多いというのである¹⁹⁹。彼の作風を言えば、詳しい叙述手法で人物と事件を描くのである²⁰⁰。植民地文学の代表的批評家である葉石濤氏は、呂赫若を「社会主義リアリスト」「己の主義に忠実な知識人」だと論じている。例えば、文学活動において慎重であったので、たとえ『文芸台湾』のメンバーであっても作品を発表したりすることを避けた。終始客観的な観察者に徹して妥協することなかったとしているという²⁰¹。また、張文環に対して、葉石濤は「ヒューマニズムとは彼の文学で最も重要な特質である。台湾人農民の悲惨な生活を描写するものによって、世

¹⁹⁷ 張恒豪「人道關懷的風俗画—張文環集序」『台湾作家全集・短編小説集／日據時代 張文環集』、前衛出版、1991年、p. 10。

¹⁹⁸ 呂赫若「想ふまゝに」『台湾文學』1-1、1941年5月、p. 106-109。『日本統治期台湾文学文芸評論集』第三卷、緑蔭書房、2001年、p. 413。

¹⁹⁹ 中島利郎編・著『日本統治期台湾文学小事典』、緑蔭書房、2005年、p. 118。

²⁰⁰ 許俊雅「冷筆寫熱腸—論呂赫若的小説(節録)」『臺灣現當代作家研究資料彙編 10 呂赫若』、國立台灣文學館、2011年、p. 165。

²⁰¹ 葉石濤「清秋—偽装的皇民化謳歌」『台湾文芸』総第77期、1982年10月、p. 21-26。「徵用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」、p. 146-147から引用する。

界中における農民たちの慎ましさを成功的に積明する」²⁰²と言う。

理念を堅持し続けた二人の作品「雲の中」と「風頭水尾」で、前者は木材増産の伐採人夫の生活にふれ、素朴な暮らし方を望んでいる人妻の願いをヒューマニズムに溢れる筆致で描かれており、後者は「風頭水尾」という海風と塩分の多い土壌で最悪な環境に直面して、智慧と勤勉で困難を克服していく農夫たちが描写される。彼らの小説はまさに黄得時の言ったような「實生活の中に喰ひ込んだものをどしどし書いてもらひたいもの」²⁰³だと認められる。伐採人夫と農夫はともに国家の「聖戦完遂」要請に基づき、増産に邁進する「産業戦士」の姿で現われるが、作品のなかに戦時期の緊張感にはほとんど触れなかった。

「雲の中」に巨大な樹木が伐り倒される場面で「嵐に堪へてきた古木の姿を一瞬して、人間もしくは國家のために犠牲にすることは尊いやうな感じがして、見るものをして神々しいものに打たれずにはゐられなかつた」（乾、p. 167）と「雲の中のこの世界が、遠い太平洋で戦つてる軍艦とは密接な関係があるのを聞くと、一層たのもしく思つた」（p. 167）²⁰⁴などの段落で戦争の関連性を提起する。

1943年、台湾において皇民化や時局に関わる作品が少なくなかった現象について濱田隼雄は批判する。そしたら、多くの責問を受けた「本島人作家」の作品は、国家の検閲を通過する理由は何だろう。例えば、張文環の他の作品に、台湾における伝統社会の封建陋習や養女制度を批判するものがある。これは「皇民化運動」の趣旨に通じるので通過したのである²⁰⁵。もう一つの理由は、『文芸台湾』に掲載したエッセイを見てみよう。

私たちが、國民の旗手となつて、國民の美觀を指導するといふことは、藝術

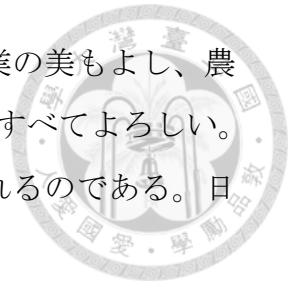
²⁰² 『臺灣現當代作家研究資料彙編 6 張文環』、國立台灣文學館、2011年、p. 44。

²⁰³ 黄得時「臺灣文壇建設論」『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四卷』、p. 32。

²⁰⁴ 本文で使うテキストは『決戦台湾小説集 乾之巻』、ゆまに書房、2000年。以下には脚注を省略する。

²⁰⁵ 張修慎「1940年代における台湾の「郷土意識」と柳宗悦：『民俗台湾』と『月刊民芸・民芸』を通じて」、東亜人物移動と文化的多様性国際シンポジウム、台湾大学日本語学科、2011年6月11日、p. 5。

家の最大の光榮であり、使命と思ふ。戦争の美もよし、産業の美もよし、農
の美もよし、風物の美もよし、戀愛の美もよし、傳統、歴史すべてよろしい。
藝術の全道徳を發揮することから、眞の日本の藝術が生まれるのである。日
本の文學が生まれるのである。²⁰⁶



「唯一つ日本の民族の血から生へ、その中に深く毛根を張つた日本の文學を樹
立しよう」という目標を持った打木村治は、それぞれの類型に属される文學の
性格や独特性を認めるが、外地文學・地方文學などの名称を打破し旧体的思考
から離れるを主張する。つまり、「日本文学」を建設するために、張文環と呂赫
若が描写した山林の美、農業の美は日本人にとって受け入れられる客体となっ
ている。

ただし、もしこの美は日本精神を象徴する「増産の美」として解釈できたら、
太平山、海や台風、乏しい水資源などの景色はいずれも台湾に根ざした風土感
を保っている。派遣地から戻ってきてから、作家たちは「派遣作家の感想」と
いう文章を完成して『台湾文芸』に寄稿した。張文環の「増産戦線」では、山
で働いている人たちは厳しい環境で生活している様子を見て、山の人間と平地
の人間の隔りを記述する。

必要以外の感情に走れることはない。町が戀しいとか、寂しいとか、と言つ
たやうな餘裕などは持つてゐない。たゞ目前に控へてる仕事をやつてのけな
ければならないことだけで、頭が一杯になつてゐる。(略) 平地にゐる人達の
神經が、いかに病的になつてゐるかわかるのである。餘りにも自己の感情に
とらはれてゐるために、感情過剰といふ病気にかゝるものだ。²⁰⁷

世間から隔絶するところに生きている人々を詳しく觀察して、張文環は一種の

²⁰⁶ 打木村治「外地文學私考」『文芸台湾』3-6、1942年3月、p. 39-41。『日本統治期台湾文學・
文芸評論集 第四卷』、綠蔭書房、2001年、p. 104-106

²⁰⁷ 張文環「増産戦線」『台湾文芸』(台湾文學奉公會) 1-4、1994年8月、p. 73-83。『日本統治
期台湾文學 文芸評論集 第五卷』綠蔭書房、2001年、p. 290。

普遍的な人間性を体得した。静かな山での生活は静謐で寂しいが、平地の生活は賑やかで焦燥感に駆られるのである。同様に、呂赫若の「風頭水尾」も都市から離れている世界を描き、そのなかに農民たちが自給自足で暮らし、「社会主義的農村ユートピア」²⁰⁸と見なしてもよい。要は、張文環と呂赫若の小説では、人間が天地の一隅に存在する光景を描出されるのである。

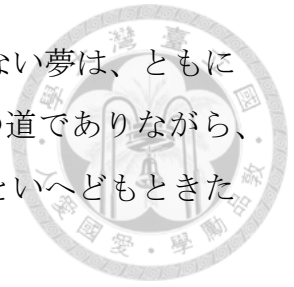
『決戦台湾小説集』での作品は「改姓名の台湾人」を主人公にする場合があるが、「雲の中」と「風頭水尾」の主人公は、山林伐採に従事する鄭水來の妻阿秀、と謝慶農場の農夫徐華と農場の親方洪天福である。全文では、「姓名を変更しない」点で主人公たちは「台湾人」という身分を示してくれる。

「雲の中」において、三種類の台湾人のイメージが作られる。一つは、日本帝国の軍隊に参加する男である。鄭水來の友人の陳木根や事務員の阿旺は、阿旺が海軍志願兵に合格してまもなく入団のことを討論する。「馬鹿云へ、戦争に行つたからと云つて、必ずしも死ぬとは限らないではないか」「いや、死ぬ覚悟でなければ、日本兵士といへるか」(p. 167-169) という対話からみると、帝国のために戦死したことだけは「日本人」になる道だと当時の人が認められる考えである。第二種は、都市の賑やかさを憧れる男である。特に水來は線路人夫から事務員に上がった以後、妻の阿秀は婉曲的に自分の思いを流露する。「事務員と云つたやうな紳士的な仕事よりも、阿秀はむしろ樵夫になつてもらひたいと希望するのである」「水來はかへつて妻のゐない町に出張するのをたのしんでゐるやうであつた」(p. 170)。言うまでもなく、第三種は「雲の中」の中に「純朴な生活と雲の中の新鮮な空氣に憧れてゐた」ヒロインである。日本統治後期に基本の国策の「工業化」「南進基地化」が提唱される雰囲気の中に、都市へ行くことは流行っていた。女主人公は時勢とは反対側に立つのである。この決心は張文環の自身の反映ではないだろう。「私の文學する心」の中に彼の思いを示す。

私はただ、自分は現實を追ふ空しさをも知つてゐると同時に、夢の空しさを

²⁰⁸ 「ダグラス・L・フィックス「徴用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」『よみがえる台湾文学 日本統治期の作家と作品』、p. 149。

も知つてゐる。夢を持たない現實の空しさと、土臺を持たない夢は、ともにこつけいなものに見えるのである。(略) 私は文學とは茨の道でありながら、私は時折非常なたのしさにとらはれることもある。茨の道といへどもときたま美しい花に出會すときもある。²⁰⁹



「夢を持たない現實の空しさ」と「土臺を持たない夢」というのは植民地現状の残酷さを表現する。張文環にとって現実と夢は空しい存在であり、文學も茨の道のように歩き難いのである。しかし「美しい花」と出会う機会があれば、文學者はこの道に歩き続ける。

そして、「雲の中」の阿秀のように都市を遠慮する理想に似ているのは呂赫若のことである。彼は1942年の日記で、「自分で反省してみる。自分は都会に馴染む者ではない。東京に馴染まないのである田園こそ自分の心の故郷である」²¹⁰と書いた。それゆえ、「風頭水尾」の主人公の徐華は、遙かな田園で新しい生活を開始する。「上流に灌漑水として取られてゐるので、最下流の水量が少ない。風は全く逆で、風上というのである。一番悪い農耕地」(p. 210)で開墾しようとする主人公は自然の挑戦を向かって強い意志を現われる。

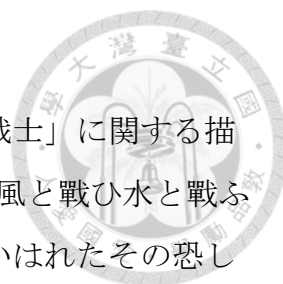
きびしい自然の中にも強く生きてゆくものゝ氣魄を感じて、思はず微笑んだ。風は強く寒かったが、心ではもう既に一つのよりどころが出来あがり、ポカポカと温い感じだった。(p. 209)

徐華は何か悲壯な感じで海だ海だと繰り返したが、それは好奇心でも嬉しさでもなく、いやむしろ海邊の農耕地とこれから取り組むといふ悲壯な現實に直面した感動だった。(p. 212)

風頭水尾の「悲壯な現實」と張文環の「空しい現實」とは、この二人の作家に

²⁰⁹ 張文環「私の文學する心」『台灣時報』1943年9月15日。張文環著、陳萬益主編『張文環：日本語作品及び草稿全編』、呈明影像科技有限公司製作、2001年。

²¹⁰ 「1942年4月26日」『呂赫若日記』、國家臺灣文學館、2004年、p. 86。



「現実」を直面する大きな勇気を与えよう。

ところが、当局の検閲を通った理由は以下のような「増産戦士」に関する描写ではないだろうか。例えば、「風頭水尾のこの土地は、単に風と戦ひ水と戦ふばかりでなく鹽分とも戦はなければ作物の成育は望めないといはれたその恐ろしさが、今彼の身にも纏りついたやうに彼はぞつとした」(p. 212)。農場の開墾者である洪天福も「こゝは風頭水尾だ。自然の猛威がある。だから怠けたらすぐに打ちのめされるところだ。一瞬間と雖も働かねばならない。さういふ覺悟があればこゝの仕事はできる」(p. 210)と言った。困難を越えて土地を開墾する増産のイメージが含まれるが、むしろ人間の強靱さを表現されるのは呂赫若の本意に近くないではないか。

この二作は「日本人らしい」振る舞いを強調することもあまりなく、どんな行為をすれば「良き日本人」になるかの質問もなさそうである。作者たちは「人種」と「民族」の問題を意識的に無視しようとした意図があると考えられる。「私の文學する心は、先づ立派な日本人であることは、立派な人間であることと考へてめる」²¹¹と言ったことがある張文環にとって、文学はあくまでも人間の問題である。「皇民化運動」で繰り返して強調される「日本人」の特質と性格を書くより、張文環と呂赫若は「民族」の色調を最低限に淡くしようとした。統治者の目の中に増産のために堅持した「日本人」であると同時に、「台湾人意識」も淡々と秘めている。

張文環は、第一回「大東亜文学者大会」に参加する本島人作家である。保守的な龍瑛宗と比べて、張文環は感想文において率直な個性を表した。ある研究者は「大東亜文學者大會の印象記も幾度か書かされ、幾十度となく喋らされたので、何か知ら、もう口をきくのがいやになつて」という前半の部分を引用して、張文環は「大東亜」の概念に対して厭悪があると指摘する。実は後半の部分、「今度は自分を片付けなければならない番になつたやうな氣がする」²¹²を併せて見れば、張文環は東京という「文化機関の中心」に対して「非常なたのも

²¹¹ 張文環「私の文學する心」『台湾時報』1943年9月15日。

²¹² 張文環「内地より歸りて」『台湾文學』3-1、1943年1月、p. 71-73。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四卷』、緑陰書房、2001年、p. 386。

しさを覚えた」²¹³という感想が持っている。「大東亜文學者大會の成果に就いては、これは田舎者の私にとっては一つの鍊成會に近いものをも感じるのである」²¹⁴と書いてあった張文環は、確かに文化上の成熟さと政治上極めて大きな権力の展示について、衝撃を受けた。以下には、「内地より歸りて」の一つの段落を取り上げたい。

日本の地方文化を高める必要をも痛切に感じた。今迄は東京が中心であるが、今度の大東亜戰勃發して以來、亞細亞に於ける文化の中心點は日本である。それであるが故に、東京が中心には違ひないが、日本全體が中心であると云ふ觀念に置きかへなければならない。東京に集る指導階級ではなく、全日本の國民の一人一人が指導階級にならなければならない。²¹⁵

文化成熟度のインパクトを与えられた張文環は、東京が文化中心の地位を承認した。彼は台湾を「日本の下」に位置づけ、自体の「地方文化」を發展する必要がある地域だと考える。つまり、当時の本島人は普遍的に「日本」を政治上のアイデンティティする対象だと見られたが、その内部における文化の發展は「日本文化」に帰依しなくてもよいと思われる。強烈な台湾意識は存在し、政治アイデンティティと文化アイデンティティの區別を示す。一方、「国家」という大きな範疇で人々の言論、行為を統一される傾向に対して、張文環は「一人の國民」という「個体」に関心を持ち、ヒューマニズムが溢れてきた。

さて、呂赫若は「台湾文学界の総蹶起」大会において、文学と人間精神の結合を信じている姿勢を表した。

文學の力は一臺の機關銃に及ばないし、如何なる傑作だとはいへ蟻一匹も殺せるものではない。それはむしろ似而非な文學觀で、文學の力の發動は、實利的な觀點からなされる浅い表面的妥協には見出すことが出來ず、人間精神

²¹³ 同上、p. 387。

²¹⁴ 同上。

²¹⁵ 同上。

の内奥に於ける深い結合にこそはじめて見出し得るものである。²¹⁶

第二章で論述するように、丹羽文雄は「肉体から精神へ」という実効力を重んじられる訓練の方式を主張する。重ねる肉体鍛錬によって「日本人」の概念を台湾人に教えて、そして台湾人を変える。なので、丹羽は生なれの初心者「青年隊員」を傾倒した。反して、彼にとって、肉体老衰、精神が飽きすぎて変え難い代表は「不幸な文学者」である。

文学こそ、文学者の「精神」が体现できられるものである。戦時下において、解決しなければならない問題は戦争自体であったが、実際に文学は殺戮の任務を担わないものである。目の前に迫られる動員された情勢が厳しくなり、呂赫若は相変わらず文学と人間精神の結合を堅持する。彼は精神の豊かさを求め、文学の力を信じる。一方、東京留学期に「東京台湾文化サークル」に参加した張文環は、台湾の独特な文化が帝国によって蹂躪されてしまった現状に対して痛感した。圧迫された奴隷文化から台湾の真の文化を創ろうとするなら、必ず自分の手で働かなければならないと感じる。戦時にもかかわらず、この情熱は深く彼の心に韜晦していた。

宮本百合子は「時代の性格は文学者的な態度によって反映される」と指摘する。台湾の場合では、反映されるものは戦争・暴力・抑圧を帯びた「普遍的に認められる時代の性格」という固着的観念ではないかもしれないが、それは文学者たちは「憧れて信じている理想的な時代の性格」だと思う。

4. 3. 1. 2 龍瑛宗「若い海」

客家人の龍瑛宗は、本名は劉榮宗。「パイヤのある街」を以て文壇に登場した後、勤勉に諸作を発表し続けた。張文環と呂赫若とともに戦争期に最も活躍した本島人作家の一人だと言える。彼は「少年の頃は、ツルゲーネフ、その後はゴーゴリ、最近ではゾラに注目してゐます」と述べ、海外文学を熟読したので、影響を受けた。その作風は台湾知識人の内奥の煩悶を主題にしたものが多

²¹⁶ 呂赫若「一協和音にでも」『台湾文芸』（台湾文学奉公会）1-2、1994年6月、p.3-13。『日本統治期台湾文学 文芸評論集 第五巻』緑蔭書房、2001年、p.272。

く、戦時下の本島人作家の中でも特異な位置を占めると評する²¹⁷。この点について、葉石濤氏は「彼の小説に、欧米現代小説の技法が多用される痕跡が明らかである。世紀末頃における退廃的思想の介入によって、キャラクターの知識人が特に苦難の十字架を背負って自ら圧迫の運命を嘆いていた」²¹⁸と言う。横地啓子氏も彼の文学成果について、「龍瑛宗の文学は二重の意味で、植民地的であった——一つは日本文学の模倣、もう一つは翻訳を経た諸外国の文学の模倣という意味」「龍瑛宗は日本文学や翻訳文学を模倣しつつ、自らのオリジナリティーとして台湾的な要素をそこに持ち込んでいたのである」²¹⁹と評価する。戦時期に、彼は「日本文学報国会台湾支部」と「台湾文学奉公会」の幹事を務めて、1944年『旬刊台新』の編集長にもなった。

1942年に第一回「大東亜文学者大会」の台湾代表の一人として、会場で「大東亜精神とは日本を中心とする大東亜の同胞が共に楽しみ、共に喜ぶ精神です。民族と民族との理解、魂と魂との交歓が根底的なものと思います」と簡単な挨拶をした²²⁰。帰台後、『台湾文学』で発表した「道義文化の優位」という大会の感想文は、日本が東洋文化の保存国だと認め、文学者が東洋の美を宣揚した芸術性豊かな作品を創造しなければならぬと宣伝した。文学者は戦争期におけるさまざまな支援が自明なことである。龍瑛宗は次々と国策を支持して、破綻のない発言が、どんな意義を持っているだろうか。同じく「大東亜文学者大会」の参加者の濱田隼雄から熱心さが足りないと批判したが、小説で現われる様相はどうだろうか。

高雄海兵団に派遣された龍瑛宗は「若い海」という短編小説で「皇民化運動」の要素を細かく物語の中に編み込む。主人公は海兵団X分隊所属の本島青年、二等水兵の森川（改姓名）と王祐坤である。同郷の二人は兄弟のように親しく、

²¹⁷ 『日本統治期台湾文学小事典』、p. 111。

²¹⁸ 葉石濤「論張文環的『在地上爬的人』」『台灣郷土作家論集』、遠景、1979年、p. 111。朱家慧『兩個太陽下的台灣作家—龍瑛宗與呂赫若研究』、台南市立藝術中心、2000年、p. 43-44から引用する。

²¹⁹ 横地啓子『抵抗のメタファー：植民地台湾戦争期の文学』、東洋思想研究所、2013年、p. 164。

²²⁰ 龍瑛宗「皇軍に感謝」（大東亜文学者大会速記抄）『文芸台湾』5-3、1942年12月、p. 22-25。『日本統治期台湾文学 文芸評論集 第四巻』緑蔭書房、2001年、p. 318。

海兵団で厳しい訓練を受ける。その訓練の内容は、カッターに乗って櫂を漕ぐこと、水泳、手先信号、銃剣術などがある。訓練後に海兵団から退団を待つ二人は、今後の一等水兵の生涯を期待するという明快な物語である。

この作品は、従来の作風とは変ったと感じえる。一般的に、龍瑛宗の作品は一貫した優美で繊細な筆致の表現が豊かであると考えられる。例えば、西川満は「龍君はめづらしい位に藝術味の豊かな仕事をつづけてゐる」²²¹という賞賛があり、龍瑛宗自身も文学の美しさを強調する。羅成純氏が言った「植民地の現状を告発する写実主義文学」を優先し、リアリズムの作風を崇拝した台湾人作家と比べて、彼は「エキゾチシズム文学」と「ロマンチシズム文学」に対して寛容な態度を持った。

僕はエキゾチシズム文学は、あつてもいゝぢやないかと思ふしかし、それは文学の本流ではなく、建設的文学のみが、新しい現実の創造の槓杆となるものである。だからといつて、リヤリズム文学一色に塗り潰すことも寂しいことゝ思ふ。文学は色とりどりに咲き亂れた方が、文化を豊かにするものである。ロマンチシズム文学も、人間の精神を昂揚させるものである。僕たちは視野を狭めてはならない。文学作品は藝術作品であるかぎり「美」を忘れてはならない。藝術の根底はすべて「美」だからである。「美」のない作品は、政治論文であり宣傳文であらう²²²。

「若い海」に戻って、龍瑛宗の派遣現地の感想を見てみよう。彼は執筆中に記録映画「加藤隼戦闘隊」「轟沈」を観た。

かかるロマン性の排除あるひは、極度なる節約は、いままで見られない現象であり、しかも、そこに観客の緊張と興味を觸發してゐるところをみれば、

²²¹ 「昭和十五年度の臺灣文壇を顧みて」『台湾芸術』1-9、1940年11月、p.20-22。『日本統治期台湾文学文芸評論集 第三卷』緑蔭書房、2001年、p.335。

²²² 龍瑛宗「南方の作家たち」『文芸台湾』3-6、1942年3月20日。『龍瑛宗全集〔日本語版〕第四冊 評論集』、p.99。

藝術といふものもひとつの動きつつある歴史的な存在として、歴史の制約のもとに発展をとげてゐることがわかる。²²³



「遠洋にゆく日」「荒波を越えて」「みごとな食欲」「月夜の練習」「めぐる想ひ出」「やがて荒海へ」などの六節に分けられるテキストは、まるで映画のように一つ一つのシーンを切り替える。龍瑛宗は新たな書き方を試みようとしたことが伺われる。戦争の雰囲気と呼応し、「観客の緊張と興味を触発」するために、龍瑛宗の代表的なロマンチックな形式が除かれて、「極度なる節約」に書きぶりに替わってきたと考える。

テキストの部分は、「若い海」の組み立ても完成度が高いと思う。作品で登場する人物は本島人を中心にして、海兵団団員とその家族のことがある。二人の若い水兵の成長と訓練を詳しく描写するほかに、民衆が積極的に「皇民化運動」に参加する様子も描かれる。さらに主人公が海兵団に参加してから、家中の状況が向上してきた描写がある。天皇を崇拜すれば、奇跡が起きる場面さえも現われるゆえ、完全に総督府の標準を合せる典型的な作品だと言っても過言ではないだろう。

まず、主人公の森川と王祐坤が物語の先頭に登場する。「浮雲ひとつなく、からりと空は青く晴れてゐるが、さうさうと南風が吹いてゐて、かげらふのたつてゐる野には、夏草がしきりになびいてゐるのがみえる。真夏の太陽に焼かれながら、海兵団X分隊の白い列が、元気よく夏草の小徑を踏んで、海の方へ歩いてゐた」(乾、p. 93) という爽やかな描写によって新興の高雄市を描かれる。そして、海上訓練の場面はすぐ読者に「海兵団」の生きる様子を伝える。猛訓練に没頭している二人は、外面の世界を忘れ、ひたすら荒波を乗り切ることに精力を注いでいる。

目的地まで漕がねばならぬ、漕げ、漕げ、歯を喰ひしばつて漕げ、これが與へられた至上命令だ。猛然と奮い立つた。もう力を出しきってしまったと思

²²³ 龍瑛宗「戦時下の文學」『台湾文芸』(台湾文学奉公会) 1-4、1944年8月、p. 73-83。『日本統治期台湾文学 文芸評論集 第五巻』緑蔭書房、2001年、p. 286。

つたのに、またまた新しい力が泉のやうに湧いてきた。なんといふ不思議な生命力であらう。精神を集中し緊張すれば、超人間的な力が出るものだ。(p. 96)

命令を完遂したい意志を支えられて、青年兵士の優れる身体上の要件は最大限に発揮される。「青い青い涯しない海、そこに、はげしい戦ひが行はれてゐる。それと思ふと、森川も王祐坤も、じつとしてをられない昂奮にかられるのであつた」(p. 97) という場面で、若い男たちが戦争に刺激された純然たる興奮の心情も表示される。最後の段落の「やがて荒海へ」で、二人は「第二軍装を着て晴れやかな氣持でそそくさと街をあるいた」(p. 107)、颯爽の軍人像が完成させる。将来のことを憧れている気持ち溢れている森川は、本島青年の自分を励まれる。

まもなく二等水兵生活よ、さらばだ。そしてもつと、はげしい一等水兵の生活が待ち構へてゐる。ふと、分隊長の言葉が耳もとで囁いてゐるやうな氣がした。「鞭の影を見ずして走る馬を駿馬といふ。われわれは常に駿馬たれ。」さうだ。われわれは、駿馬とならなければならぬ。われわれは、本島青年としての力を試したい。(p. 109)

庄明宣氏は龍瑛宗の作品の中に漂っている「現代意識」を指摘する。特にキャラクターの性格や心理状態の描写が優れているところに着目する²²⁴。筆者の考えでは、作者の龍瑛宗は「若い海」の中の人物との間に距離感を保っている。主人公の二人の青年にかかわる叙述は十分に簡単明瞭であり、感性的な描写はあまり多くないと観察できよう。結果的に、この青年は龍瑛宗の作品における台湾人インテリゲンチヤとは異なり、単純な目標を目指して進める人物しかない。

そして、森川と王祐坤の家族たち＝本島人民衆が「皇民」としての様子にも触れる。例えば、森川は入団してから、母親が長年に患っていた心臓病が治り、

²²⁴ 庄明宣等主編『台灣文學史（上卷）』、海峽文藝出版社、1991年、p. 576。朱家慧『兩個太陽下的台灣作家—龍瑛宗與呂赫若研究』、台南市立藝術中心、2000年、p. 43-44から引用する。

父が五十歳に越えたが、体が頑健なので農作を続ける。結尾に、二人は海兵団から退団し、一等水兵になり、森川は故郷の部落から送った「千人針」を持ち、王も年をとったのに熱心に国語を習った母から拙い国語で書いた手紙を取った。

冷静的な筆致を以て、皇民化運動の成果を各自のキャラクターに与える。心理状態についてほとんど提起されないし、表面的な描写にとどまる。海兵団の団員と民衆は、国家に対する疑いもなく、国家からの任務を完成する人物である。こういう「日本人」に造形させられた「台湾人」のイメージは浅薄であると思う。但し、龍瑛宗は前節の呂赫若と張文環とは違い、彼の台湾人キャラクターは日本人として生きる姿が明らかである。これはなぜだろう。

朱家慧氏の考えでは、龍瑛宗が戦争が勃発した後の台湾の情勢を十分に知った。台湾において多くの漢民族がいたが、現在は日本の国民であった。中国と対立の戦争状態で、植民地の台湾人は時代の嵐に自らの路線を調整しなければならないのである²²⁵。また、「事変後、台湾文化に関心しつづけるが、日本国籍を持つ文化人として国家の勝利を唱えざるを得ない。二種の身分を備える龍瑛宗は、国策を越えない範囲で浪漫的な熱情で台湾のことを描く」と氏は評価する²²⁶。「二種の身分」とはなんだろう。龍瑛宗自身の文章から検討したい。

「パイヤのある街」を発表してから、自分の創作意図を明らかにする文章を書く。

「若き臺灣文學のために」といふ仰山な掲題を擔ぎ出しながら、私は結局一つの抽象的な空気を描いてしまった。再び繰り返して言ふが、私は文學の垣の外に立つ人である。この文壇に私が得意気に胸を反つてコンダクトを揮ふといふことは私に許されないからだ。事実、私にそういふ實力のないことも告白しなければならない²²⁷。

「文學の垣の外に立つ人」と自称した龍瑛宗は、自信が強い人間ではないだろ

²²⁵ 同上、p. 104。

²²⁶ 同上、p. 135。

²²⁷ 龍瑛宗「若き臺灣文學のために」『台湾新文学』2-5、1937年6月15日。『龍瑛宗全集〔日本語版〕第四冊評論集』、国立台湾文学館、2008年、p. 8。

う。「若い海」が記すように、「はげしい訓練を終へた後の精神的な晴れやかさであつた。(略) 森川も王祐坤も、はげしい訓練をしてよかつたと、なにかほつとした安堵に似たものを感じた」(p. 98)。激しい訓練を達成しなければ、安堵の気持ちにならない。ここでは、自分の実力に対して常に不安を感じる龍瑛宗の姿が現れる。しかし、龍瑛宗は文学に対する熱意がかなり強いと言えるだろう。「作家について」という文章を見てみよう。

作家自身は、ひとつの小宇宙を持たなければならぬ。生熟した人生観、世界観を持たなければならぬ。その人生観、世界観は狭隘であつてはならない、現實における人間と社會の相關關係を曇つたレンズで見てはならない²²⁸。

自信のあまり強くないが、熱情が豊かであるという矛盾性は、龍瑛宗の作品の中に複雑なキャラクターで示してくる。例えば、島田謹二が提唱する外地文学に対して、龍瑛宗は「土地に即した文學でなければならぬ」と呼応する。

外地文學のテムペラメントは郷愁や頹廢ではなく、その土地に生きその土地に骨を埋めるもの、その土地を愛しその土地の文化を高める文學でなければならぬ、それは消費者の文學でなく、生産者の文學である、かくて外地文學は本土文學と同じくもつとも健康なる生活者の文學である。²²⁹

しかし、王惠珍氏が指摘するように、文壇で活躍していた龍瑛宗は「第一回大東亜文学者大会」に参加して台湾に帰ってきた後、「東洋精神」「道義文化」「八紘一字」「肇国精神」など官制の言葉を頻りに使われたが、個別の経験や他の文学者との交流の記録がほとんどないようである²³⁰。つまり、彼は謹んでいる態度で政治に関することを取り扱った。陳建忠氏は、「龍瑛宗は植民地の知識人と作

²²⁸ 龍瑛宗「作家について」『台湾芸術』2-1、1941年1月1日。『龍瑛宗全集 [日本語版] 第四冊評論集』、国立台湾文学館、2008年、p. 82。

²²⁹ 龍瑛宗「台湾文学の展望」『大阪朝日新聞』大阪、1941年1月。『龍瑛宗全集 [日本語版] 第四冊評論集』、国立台湾文学館、2008年、p. 86。

²³⁰ 王惠珍『戦鼓聲中的殖民地書寫—作家龍瑛宗の文學軌跡』、國立臺灣大學、2014年 p. 223

家として、植民的情勢 (colonial situation) のもとに制約されたり、造形されたりした。このような状態で生存できる哲学を探し、自分の主体的精神を分裂される危機を免れるのは十分に重要である。この思想や哲学も龍瑛宗の小説を構成する大切な主題になる」²³¹と評する。

それゆえ、「若い海」は張文環の「雲の中」と呂赫若の「風頭水尾」と比較して、作者の「自己消失」という感じがかなり強いと思う。龍瑛宗は「パパイヤのある街」で、知識人の苦悩を細かく描き出した。「知られざる幸福」「ある女の記録」「黒い少女」などヒロインの遭遇をめぐる小説の中に女性の強い姿をも描かれた。「南に死す」では新体制と旧体制との間に生存の道を探す勇気があると表現される。しかし、『決戦台湾小説集』の計画に参加していた期間に、龍瑛宗は自分の意見を隠され、国策の目標に合致する作品を完成した。作家は概念を載っている「客体」になった。

戦後、尾崎秀樹氏は「新聞配達夫」「牛車」「パパイヤのある街」をとりあげて、「この三つの作品を年代順に通読してみると抵抗から諦めへ、さらに屈従へと傾斜する台湾人作家の意識がある程度にたどれるように思われる」という有名な分析を開陳する²³²。屈従と抵抗は、拮抗する対立の両面だとみなす。「日本帝国」を攻撃の主体として対抗すれば「抵抗」の図式が成立する。従って、その反面は「屈従」である。ただし、ほかの標準はなかろうか。戦争期の帝国は、蚕食鯨呑の勢いで「皇民化」を台湾人に強要させる。言い換えると、「日本人意識」は当時の本島人作家にとって取り扱わなければならない難問であった。しかも、社会上の問題を処理し、世間を關心したことは、責任感を持っている知識人の姿だと思う。龍瑛宗は「若い海」に自分を隠蔽させ、作者本人の心境が失われたテキストは、評論しようとするきっかけも消えていく。しかし、1940年以後、龍瑛宗が作品を創作し続けて、本格的な文芸評論集『孤独な蠹魚』も出版する。台湾文学と台湾文化に対する期待が深く、その立場も鮮やかであった。では、ここで「不在」を決めた作家は、彼に消えさせた主因は何か。これはいわゆる精神的敗北なのか、あるいは保守的な戦略なのか。

²³¹ 陳建忠「尋找熱帶的椅子—論龍瑛宗1940年的小説」『臺灣現當代作家研究資料彙編7 龍瑛宗』、國立台灣文學館、2011年、p. 156。

²³² 尾崎秀樹『近代文学の傷痕—旧植民地文学論』、岩波書店、1991年、p. 199-200。

『決戦台湾小説集』を執筆した龍瑛宗は、その態度がずいぶん保守的になった。小説とか、現地の感想とか、国策の基準に基づいたものを完成して自主的な表現が乏しいと言えよう。この類型の作品は現実の矛盾を隠されて民衆を動員される性質がある。効果的にいえば、民衆の反応を呼び起こし、彼らを受動的で服従する主体になってから動員もたやすくなる。が、その後張文環の『台湾文学』陣営に行き、台湾という荒土で文化の種を蒔く龍瑛宗は、ここで作り上げた「日本人意識」は、実際に薄影の存在だと考えよう。

4. 3. 1. 3 楊逵「増産の蔭に一呑気な爺さんの話」

日本統治期から戦後まで、台湾における著名な作家の一人として、戦時下の楊逵は国策の線に沿って動くように見せかけながら、積極的に農民の中へ入っていた²³³。幼いとき公学校に入学し日本語教育を受け、渡日した後、昼は労働し、夜は日本大学文学部で文学を学び、社会主義運動の影響を受けた。日本統治時代に社会運動で十回くらい入獄している。1936年本島人作家中心の『台湾新文学』を創刊して、自らも写実主義文学主体の作品で台湾の現実とその矛盾を描いた²³⁴。漢文の禁令が公布、日中戦争も勃発後、文学活動が少なくなる。フェイ・阮・クリーマン氏は「植民地時代の楊逵ほど、この社会的リアリズムの達成を追求した作家はいなかった」と称え、「小説については賛否両論あるにせよ、植民地台湾の社会的・経済的状况に関する彼の観察眼は非常に鋭かった」²³⁵と評価する。

石底炭鉱に派遣される楊逵は、「増産の蔭に」の語り手を肉体的に虚弱な「私」として設定する。却って、同小説に登場する坑夫たちは頑健で勤勉なイメージが鮮やかである。第一人称の「私」は「情報課のお世話でこの炭礦を見せて貰ひ、それを小説に書く為めに来たのだ」と述べるので、語り手は作者自身の投射だと考えよう。「私」と「私」が炭鉱で巡りあった知人「張君」、「呑気な爺さん」の家に養女になった「金蘭」の三人は、ここで分析したいキャラクターである。さらに、これも作家自身の「実像」と彼が創造したキャラクターの「虚

²³³ 尾崎秀樹『近代文学の傷痕—旧植民地文学論』、p. 157。

²³⁴ 『日本統治期台湾文学小事典』、p. 104。

²³⁵ フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本語文学』、p. 199-200。

像」と同時に作品の中に登場する例だと見なす。

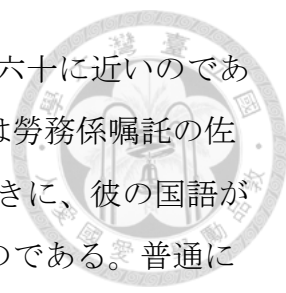
「この若き労働者の顔に、私は閻魔様の尊厳さを見た」（坤、p. 98）と労働者を尊敬している楊達は、台湾人労働者の「張君」をどう描くだろう。張君とは、前に「私」の農園で働き、「私」のことを「世話役さん」と呼ばれ、いま坑夫を勤める男である。「彼は所謂無學文盲の男であるが、私の小説の愛読者であるとともに、私の先生でもあつた」（p. 103）。皇民化運動が白熱化していった時代に「国語不解者」の人を「先生」という高い社会的地位を認め、楊達は「国策」の標準に対する皮肉ではないだろうか。彼は自分で理由を解釈する。

文字は知らなかつたが、その鋭敏な感性と豊富な経験から、何時も澤山の小説の種を供給して呉れた男であつた。そして、私は私で、何か書く度に必ずそれを讀み聞かせ、彼が面白くないと言ふものは惜しげなくたきつけにして來たのであつた。（p. 103-104）

彼は私の小説のよい鑑賞家だつたばかりでなく、實に私の生き方の辛辣な批評家であつた。（略）彼は私の臆病風を吹き拂ひ、私を元気づけ、鋼鐵が鍛へられることに依つて益々堅くなることを、卑近な生活で以つて私に教へて來た、正しく私の先生であつた。こんな人達を見下げることに依つて、自分のくだならさを無遠慮にさらけ出して來た吾々所謂知識階級は、今こそ禪を締めなほさねばならぬと思つたりした。（p. 131-132）（下線は筆者）

坑夫の張君は委嘱計画の中に国策にふさわしい「産業戦士」の代表である。しかし、張君は楊達に称えられる理由は、国のために奉公する労働者であることではない。それに労働者という勤勉な性質は「日本人」との間の関連性もあまり遡らない。楊達にとって、張君が「無學文盲」として、小説が鑑賞できる経験と豊富な感受性を持つ気立ては褒めるところである。まして、張君の性格の堅さも「知識階級」の楊達に恥ずかしいと思わせる。世間に頑強な生き方を教える張君に対して、楊達は先生のように尊う。

張君以外に、「漫画の中に出た呑気な爺さん」も重要なキャラクターだとされ



る。「毛髪は霜降りをとほり越して、九分通りの白さだつた。六十に近いのであらうが、ただ顔は日にやけて元気そうだつた」(p. 111) 老人は勞務係囑託の佐藤金太郎と呼ばれる人である。「私」は張君とめぐり合ったときに、彼の国語がうまくなることを驚かせるが、爺さんの指導で進歩してきたのである。普通にも子供たちに国語を教える爺さんの姿を見て、子供たちが今後「私より立派な国語を使ふだらう」と嘆く。優しくて穏やかな日本人のイメージで登場する爺さんは、二十ぐらい本島人の孝行娘の金蘭を養女として引き取る。最初から女中であつたが、今後も爺さんの家から嫁に出す。爺さんの自慢の孝行娘は、本島人百姓の娘に生まれてから十五歳まで学校のことを知らなかつたが、日本人の養女になってから「日本人」の性質も付けられる。

(十九の年) 新聞を読み、小説などを愛讀し、早稲田の文學講義を読みかけてゐたさうである、それはそれで大したこともないが、爺さんが一番喜んで話すのは、この娘が、日本娘のよい點をすっかり身につけてゐたと言ふことであつた。(p. 124)

「台湾人同化のモデルは、官公庁的で型にはまってお」とフィックス氏が指摘するように、新聞や小説を読める高い国語の能力、日本人の女性と同じ美点を持っている金蘭はその典型に属される。

人物を分析するまえに、楊達の作風について検討する。「楊達はプロレタリア文学の作家だが、社会運動家でもあり、彼の作品では、社会的メッセージや使命感が芸術的表現を凌ぐことがしばしばであつた。楊の作品に一貫して見られる主題である、社会正義を申し立てる切迫感、彼の人生と密接に関連していた」²³⁶と指摘される。主な作品は「社会批評の媒体」で、「登場人物は十分に掘り下げられていない。たとえば張文環や呂赫若といった作家と比較すると、楊の登場人物は複雑な心理的側面の描写を欠いている」²³⁷とフェイ・阮・クリーマン氏はさらに批判する。確かに、「張君」あるいは「金蘭」というキャラクター

²³⁶ フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本語文学』、p. 193。

²³⁷ 同上、p. 201。

の心理状態は欠落の傾向がある。では、楊逵はこのキャラクターを借りてどんな「社会正義」を追求したいだろう。これは「作者」＝「私」に戻らなければならないと考える。

小説のはじめのところに、炭鉱を見学する「私」はケーブル・カーに乗り、眼前の採炭夫たちはみな真っ黒であって、地獄を一巡りしている悲壮感を持った。

夏目漱石の「坑夫」を読み、それで鑛山の凄惨さと坑夫の荒々しさを印象つけられて来た私は、どきつとして二三歩後しざりした。私は猛獣に挑戦された錯覚にとらはれて慄然とした。自然に聲も顫へて、——どなたです？と訊く。(p. 100)

弱くて卑怯な「私」は浮かび上がってくる。通念上、決戦期における文学作品の知識人をいうと、自信に欠けて、個性に乏しい、あまりに定職につきない状態に囲まれて焦っている模様が浮かんでくる。これは戦時下の知識人による自己否定の表象だと認められる。しかし、作者の楊逵はここで自己の価値を拒否するつもりがあるだろうか。戦争期に入り、本来文学界に活躍していた楊逵は必ず文学に対する深い感情を持っている。しかし、時勢の関係で労働者を尊重している彼は、その憧れが一段と高くなった。派遣感想文の「勤勞禮讚」において彼の理念を掲げる。

情報課とは無論宣傳啓發の為であり、自分としても小説の種を捜しに行つたのであるが、人としての生き方、國民としての生き方に、一週間の生活を通じて私は啓發されるどころ多かつたことを有難く思つてゐる。(略) 彼等はその勤勞を通じて錬られ、鍛へられ磨かれてゐる。雨に打たれた石炭のやうに、底光を放つてゐる。²³⁸

²³⁸ 楊逵「勤勞禮讚」『台湾文芸』(台湾文学奉公会) 1-4、1944年8月、p. 73-83。『日本統治期台湾文学 文芸評論集 第五卷』緑蔭書房、2001年、p. 289。

小説の新たな題材を試した楊逵は、文学に執着する心があるが、人間として生きている価値が社会の一般庶民の中に探し得ることによって、もっと満足になるという姿勢を示される。そこで、炭鉱内の試練に対して「私」は猶予なく立ち向かって自分の実力を証明したかったが、坑夫たちの勤労で堅強に傾倒し、彼らの長所が自分の弱点であることを意識する。つまり、楊逵は自分の弱さを強調するより、むしろ坑夫たちを心から賞賛するだろう。

感想文で、階級意識を持っている楊逵は彼が一般民衆に対する尊敬心を表す。当時の社会で、皇国勤労観のもとに「戦争を決する」米や石炭が敬重されながら、勤労者の「百姓や採炭夫」が敬重されなかった。これは「何故であらうか？無學文盲、破衣裸足、汚いと言はれてゐる」²³⁹と明確に世道を批評される。なので、労働者と知識人の身分を同時に持った楊逵は、「色々の労働をやつて來たし、猫の額程の畑を作つてゐる百姓の卵であり、「読み書き憶え、一張羅を着れば紳士の仲間入りもする」のである。「どちらが美しいかを問ふならば、躊躇なく勤労と答へる」²⁴⁰と言った楊逵にとって、重要な価値はなにか、その答えはかなり明らかだろう。

楊逵の作品を分析する林載爵氏の意見で、楊逵は知識人を重要な位置を置く。知識人の覚悟は社会の希望であり、その力も社会を改革する原動力である。彼らの信念や抗議的な精神こそ、社会を合理化・公平化させる柱である²⁴¹。「増産の蔭に」の知識人キャラクターは、「私」という物語の話者として現われる。第一人称の「私」は周りの人物と物事を叙述する任務を担い、厳しい環境の中に暴露した知識人の弱さを読者に伝え、「張君」を代表する全体の労働者に憧れの気持ちも表現する。一方、「金蘭」は元々本島人の孝行娘であり、日本人の「養女」になってから「日本娘のよい点」を身につけている。テキストの中に「本島人」と「日本人」の上下関係が浮かび、「日本娘のよい点」とは具体的な内容について、作者あるいは「私」も解釈しなかった。国語が使える曖昧な「日本

²³⁹ 同上、p. 288。

²⁴⁰ 同上。

²⁴¹ 林載爵「臺灣文學的兩種精神—楊逵與鍾理和之比較」『臺灣現當代作家研究資料彙編 4 楊逵』、國立台灣文學館、2011 年、p. 190。

娘」の金蘭は、小説の中に「日本人化」の度が一番高いキャラクターとして、その「日本人」の内実は実に不明である。

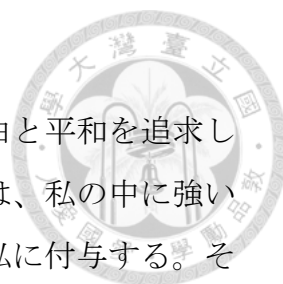
金蘭という国策を呼応するキャラクターを設定される以外、楊逵は物語の最後に張君の手紙をもらった。石炭の増産のために努力した張君の姿に対して、「立派な日本人に續かうとする彼等の気持だけでも、私は深い感激を覚え頭の下る気持がする」。それに、「彼の落ち着かうと言ふ決心が、所長さん、爺さん、それとも金蘭さんからであらうを問はず、美しきものに續いて自ら危地にとび込んで来たその純一な気持を、私は美しき日本精神の芽萌えと考へてゐる」

(p. 155) と「私」の感動が示される。結尾に論及される「日本精神」の出現は「増産」と繋がっているが、本質は「勤労」を指すのではないだろう。

最後には、知識人の「私」という人物はどうやって国策を呼応するのであろう。ようやく坑内を見学した彼は、豆電気を戦闘帽のひさしの上の電灯座につけてかぶると、「一時に強くなつた」「増産戦士」となるという感じが湧いてくる。

一旦銃を手にするると直ぐに覺悟が出来、その瞬間から勇士になり切れる日本の軍人もかうではないかと思はれた。本島人は駄目だと言ふ聲を時々耳にするが、さうした言を口にする人たちに私は豪氣堂々のこの姿を見せてやりたいと思ふのであつた。(p. 128)

「増産戦士」の装備をしてから勇士になると悟った瞬間、「私」はこのように様子は「日本軍人」と一致しないではないかと考えるが、次は「本島人」としての誇りを表現する。当局の立場でこの段落を解説すれば、「二等臣民」の本島人が国家のために奮起し、「日本人／日本軍人」となると決めるのである。ただし、解説する立場を変えて本島人の視点から出発すれば、「本島人は駄目だ」という言葉は実に植民政府の統治が始まる以来、長年たくさん本島人が圧迫されて差別されていた無力感を隠される。そのとき、銃を取った「私」は「豪氣堂々」になり、「日本軍人」と比較する競争力を持つようになる自信をつけられる。筆者は、楊逵の意見は後者に近いではないかと考える。検閲を通過する作品を創



作するときに、彼は本島人の自尊心を表現する。

楊逵は1983年のときに、「この一生の中に、私は民主、自由と平和を追求している。絶望とは思わなく、撃たれることもない。その理由は、私の中に強い意志がある。この意志は、紛乱の世間で冷静に思考する力を私に付与する。それに、挫折を直面したときに再起できる信念もあり、たとえ苦難の前にも微笑むことができる」と自らのことを言った。前述の段落で「豪氣堂々」の姿は、その意志を指すものだろう。

4. 3. 2 苦悩の正体—押し付けられる時代の性格

4. 3. 2. 1 周金波「助教」

「僕は日本に生まれた。僕は日本の教育で大きくなった。だから、日本人にならなければ僕は生きてって仕様がなないんだ」と『志願兵』に載せられる著名な言葉である。文学界に話題を呼ばれる『志願兵』の先例を持っておるので、当局側が周金波に期待しているのは『志願兵』的なテキストではないかと考えられる。このため、彼の派遣先が生産現場ではなく国民道場となった理由があると推測される²⁴²。

1941年6月20日、待望の志願兵制度の施行が発表され、周金波は日記に思いを書いた。

私はこの日ほど自信に満ちた喜びを感じたことはない、私は長い孤独の殻から抜け出せそうだ。実際の台湾経験は通算しても十年に満たない、東京震災後台湾に引き上げたときは四歳で片言の日本語しか知らない、十四歳、上京したときは日本語は再勉強しなければならなかったが、日本語は上達するにつれて台湾語を徐々に忘れていった。そして、私は台湾の社会面とはいつも外れている。接点などあっても密着しない。真実面を映し出すことができない。日本語が半端なら台湾語も半端だ。文章を書くのは畑違いである。書

²⁴² 和泉司「〈皇民文学〉における〈国語〉と軍事動員—周金波「助教」ノート—」『三田国文』(53)、慶應義塾大学国文学研究室、2011年6月、p. 61。

いていること、言っていることはほんとうに共鳴を得ているのではない²⁴³。(下線は筆者)



多くの先行研究は「皇民作家」——特に周金波、王昶雄、陳火泉（高山凡石）——を討論するとき作品を中心にすが、他の台湾人作家とは異なった立場を持っている原因をあまり触れていない。この日記に故郷の台湾との間に越えがたい距離感を流露する。成長過程の関係で、彼は逆に日本に親しんでいる。因みに、台湾語より日本語の熟練度が高いので、台湾に戻って、周囲から受けとる程度にも影響されると思う。1943年4月、彼は『文芸台湾』30号に「故郷」という短編小説を発表する。

ここの社会が空怖しくおもはれてそれは撲られる、蹴られるといふよりも自分が自分の故郷と恋ひ慕つて帰つてきたここが自分を遇するにこの冷淡さ、無理解さ、不親切さを以てしたといふこと、もはやとりかへしのつかないことになったやうな空怖しさが犇々と迫るのであつた。²⁴⁴

故郷の台湾を慕っていたはずであつたが、帰台後に「冷淡」「無理解」「不親切」という否定的な印象をづけられた。このような倒錯的な現象について、「帝都」の東京から台湾に帰ってきた被植民者が「故郷」を喪失すると朱恵足氏は解説する。言い換えると、帝国の中に現代的な移動方式で異なる民族、文化と暮らし方を経験した植民地の主体は、故郷の台湾に住みやすくない状態になってしまったのである²⁴⁵。

とはいえ、故郷に対して若干の違和感を感じている周金波は、台湾文学の建設に大きな熱情を持っている。「日本の一翼としての台湾」とか、「成生する生命の躍動を多く持つてゐる現在の台湾」とか、動乱や破壊期の最中にいても、台湾の地で台湾文学の光彩を放つことができるだろう。周金波は自らが持った

²⁴³ 周金波「私の歩んだ道——文学・演劇・映画」『周金波日本語作品集』、緑蔭書房、1998年、p. 253-254。

²⁴⁴ 周金波「故郷」『周金波日本語作品集』、p. 98。

²⁴⁵ 朱恵足『「現代」的移植與翻譯：日治時期台灣小説的後殖民思考』、p. 186-187。

台湾文壇に対する熱意を詩を唱うように「台湾文学のこと」で表現する。

現在の台湾、保守する台湾、追従する台湾、呼号する台湾、脱皮する台湾、躊躇する台湾、抗弁する台湾、媚態する台湾、拒絶する台湾、嘆息する台湾、懐疑する台湾、雑居する台湾、躍進する台湾、さういつた成長せんとする台湾の生命の躍動がめまぐるしく回転してゐる。最も身近に最も切実に台湾の生命を感じる者は台湾に住む我々の筈である。²⁴⁶

つまり、徹底的な日本式の教育をうけて、故郷の台湾に複雑な感情があるが、志業の文学をあきらめたくない。この矛盾的な苦悩は周金波は創作上に影響を与えらると思う。

さて、『志願兵』によって文壇に一躍注目されていた周金波は、戦後に「志願兵」のことを告白した。あのときに従軍を志願した人間は、ほとんど心から喜んでいる血気盛んな義士であった。台湾において差別されていた主因は、流血しなかったなのであるとよく知られたので、流血したり、犠牲したり、義務を実践したりしてから、地位が獲得するという定式は普遍的に認められた事実になる²⁴⁷。

これは、植民地統治の下に失われた平等的な地位を一生懸命求めようとして悩んでいた台湾人像である。日本統治期に互って、従属的・支配的な制限を打破することは、台湾人が追求する価値だと言えよう。「助教」の主人公、斗六国民道場の助教に勤める台湾人の若者の蓮本弘隆は、「日本人になれない」という恐怖心はずっと持っている。その理由を究明すれば、「民族差別」という大きな圧力は彼の心身をすべて支配されていたのである。「日本人」として生きることが要求されていながら、日常生活では「本島人」として無視されているというのは事実である。その政治に現われている差別の現実は、知識人にとって極端に残酷であったと思われる²⁴⁸。荊氏は『志願兵』を評論するとき、周金波の態度は「アイデンティティ認識の問題ではなく、宿命である。これは変化の過程

²⁴⁶ 周金波「台湾文学のこと」『台湾日日新報』、昭和16年12月6日。

²⁴⁷ 游勝冠『殖民主義與文化抗争—日據時期台灣解殖文學』、p. 407 から引用する。

²⁴⁸ 張修慎「日本の「近代の超克」思想と戦時下台湾知識人の諸相」、『台大日本語研究11』、p. 23。

でもなく、存在の状態である」と指摘する²⁴⁹。「日本人にならなければ僕は生きてたって仕様がなないんだ」とどん底から沈痛に叫んだ作者にとって、日本人化は解決すべき問題より生存の方式の選択が彼の心境にふさわしいだろう。というわけで、『決戦台湾小説集』の作品を考察するときに、張文環・呂赫若・龍瑛宗・楊逵などの作者は「日本人になる」をめぐるさまざまな事態を「扱うべきだった問題」として見なしたと注目する。が、日本人の身分で生きている一種「存在状態」にいった周金波は、作品の内容に「存在」の「状態」をそのまま描き出した。これは両者の作品を比較するときに見逃せない違いだと考える。

まず、物語のあらすじを述べる。主人公の蓮本弘隆は、国民道場の一ヶ月の訓練を受け、退団を予定するが、上司から道場の助教の職務を推薦して、彼を誘われる。理由は、蓮本は修練生の中に唯一人の中学卒として模範修練生である。将来のことを迷っていた蓮本は、医専志望したが試験が失敗し、中学校の同窓生はみな「新時代」の仕事に従事した²⁵⁰ので、「重荷を背負って果して道場生活をうまくやっつけてゆけるだらうか、その自信さへ持てない」（坤、p. 41）と一段と悩んでくる。最後に、国語不解者の修練生の沈石頭から「増産戦士、滅私奉公」など鼓舞の言葉を書いた葉書を受け取ったので、助教になると決めた。「蓮本助教」と呼ばれると、主人公は「やっつけてゆける自信が新たに湧いてきた」（p. 46-47）と感じる。

ある日、蓮本は重大な任務を命じられる。その内容はある青年学校に行つて、本物の歩兵銃を番号表と照らし合わせて点検してから受けとる。彼は番号表を手帳の中に挟んで、大事に胸の懐しに蔵い込んだが、雨中行進に参加したり、修練生を指導したりした。三部生の国語不解者の蔡樹根が間違つて彼の上着を洗濯したので、番号表が紙屑しか残されなかつた結果となつた。

高熱で悪夢にうなされる蓮本は目が覚めてから必死に謝罪する。番号表の字が薄れて読み難かつたが、番号だけで読めるので廖助教が代わりに取ると山田教官が彼を慰める。また、「赦すも赦さぬもないよ。君の責任感は立派だ。立派だとおもつてゐるよ」「五年の遠足のときに先生の上衣を川に落して、いきなり

²⁴⁹ 荊子馨『成為日本人：殖民地台灣與認同政治』、p. 163。

²⁵⁰ 例えば、海軍工員、軍属、甲種飛行機操縦生、軍通訳など。「助教」、p. 38。

水に飛びこんでいったときの君を思ひ出すよ」(p. 74-75) と蓮本を優しく安心させる。

高潮を迎える物語の終盤に、自分の「台湾人」という身分に対して恐怖感を持った蓮本は「日本人」「日本的素養」を確かに身につけているかと「本当の日本人」に強く懷疑されてしまう。太平洋戦争後期に白熱化した皇民化運動の時期に、このような不安な心理状態は台湾人に相当な圧力を与えた。「助教」で登場する本島人の主人公蓮本と「国語不解者」の三部生を分析の中心にする。以下の段落を引用して、蓮本の性格を探究してみたい。

蓮本は耳の底に號令の聲をこびりつかせたまゝ、やつと切株を見つけて腰をおろした。思つたほどの疲れが出て來ないところへ何かじつとしてゐられないものがあつて、休まつた気持になれないのであつた。(略) 十何軒の道歩いてきた脚が別段のこともなかつたやうにちゃんとついてゐるのが不思議なら、その脚が今にも直ちに残つた何十軒といふ道程を踏み出しさうにして、健在なのも不思議といへば不思議であつた。生来、餘り自信の持てない彼の脚は今度の強行軍で狂ひのない重寶な機械であることを立證されたやうなものだ。(p. 35-36)

「生来、餘り自信の持てない」と告白した蓮本は、物語の首尾に自分の能力について強い懷疑心を持っておる。「助教」の仕事を受けても修練生より高い地位になつたという誇りもあまりないようである。以下の二段も彼が気弱い人間であることを示される。

蓮本の場合はちやきちやきの一部生で國語は必要以上のものまで知つてゐるのだが、それでも事務室の當番では何度も叱られてゐた。言葉がわからないからではなくぼんやりと當番の仕事を忘れてしまつたためであるが、——いや、ぼんやりする筈もなかつた。むしろ反對に頭が一ぱいでその場に當つてそれと仕事に氣がつかないのであるが、おそらく自分も外見はこの當番のやうにぬんべらぼ一として人の目に映つてゐたかも知れない。(p. 48)



蓮本はそれら内務班長の激しい氣魄の中に何か逼迫したものを感じながら餘りに激しい氣魄のために彼の部薄な胸壁が微かにしなひだしたやうなあやふやな氣持で聞いてゐた。(p. 56)

「内務班長は父であり、兄である。助教は母であり、姉である」という藤井教官の言葉から、蓮本は「さうだ、俺は母にならう。姉にならう」(p. 57)と自分の責任を受けとる。この優しい性格は、彼と三部生＝国語不解者との間に妙な繋がりを作り上げる。例えば、物語の前半に「助教」になるかどうかを猶予した蓮本に決意を決めさせるのは沈石頭の葉書である。また、「助教」になってはじめて出会った三部生の「蔡樹根」に「外見はどうあつても、蓮本にも覺えがあるので妙に親しみを感じる相手であつた」(p. 47-48)と思われる。以下の場面は、さらに蓮本は本島人の三部生に同情の念を抱いている様子を示す。

道場に荷物を運び入れた日、助手室で押入の整理をしてゐるとすぐ壁の外で臺灣語の話し聲が聞えた。稲刈は濟んだとか、氣の毒をしたとか、言つてゐる。蓮本が窓から顔を出すと訊かれた方は驚いて顔を外向けたが、話しかけてゐる蔡樹根の方はべそをかいてゐるやうな、さうでもないやうな顔でにたにたしてゐる。この奴けしからんとおもつたが、まだ助教といふ身分が板についてゐないためか、どうしても手が出せなかつた。それに母の死に目に到頭會はずにしまつた頼財木も氣の毒になつた。そのまゝ見逃してやつたことがあつた。(p. 58) (下線は筆者)

「日本人」によって「他の台湾人を訓練する」地位を獲得される蓮本は、逆に最低階の三部生とともに共感を覚える。一つの理由は自信が欠落する可能性があるもので、指導的な地位に立った自覚が強くはない。もう一つは、実際に三部生と同じ本島人である身分を持ち、親切を感じやすいのである。

次に、同じ地位の内務班長、高い位階である教官と同時に現われて、脱柵しようとした一人の修練生を責める場面である。では、上下関係の中に処する蓮

本はどんな態度を示したか。



最初から最後まで山田教官は無言で見守つてゐる以外何等手をくださなかつたからだ。或ひは自分等に一任される考へなのであらうか。いや、山田教官はもつともつと憎んで居る筈だ。(略) 彼(蓮本)には山田教官の沈黙が重苦しく堪へられなかつた。すると、そのとき陳進録内務班長がぶちまけるやうにして叫んだ。「おまへはそれでも日本人か、日本人か。」彼ははッとして陳進録内務班長の顔をみた。そこには自信に満ちた表情があつた。一點の曇りも認めることができなかつた。彼はそのとき心の安定と負擔のとれた明るさを同時に感じた。こんなに適切な言葉がまたとあらうか。さすがにいゝことを言つてくれたと掌を合せたかつた。しかし、若しこの言葉が山田教官に依つて先に言はれたなら、さう思ふと蓮本は慄ッとなつた。(p. 62-63)

「自信に満ちた表情」で、自分と同じ地位、民族と身分の陳進録内務班長の口から叱られる「おまへはそれでも日本人か、日本人か」という言葉は、蓮本にこれ以上ない安心感を与える。言い換えると、この質問は間接的に自分が「日本人」である事実を証明する。この場合に、日本人の許可を得なかつた前提で台湾人が自分で「日本人」の身分を確認する。しかし、もし同じ状況で発言者を日本人である山田教官に変えて、蓮本はすぐ戦慄になった。作者は物語の最後の一段で蓮本の悪夢に用いてこの心理を完全に表現する。

悪夢の中に、蓮本は強い罪悪感によって呑み込まれ、敬愛している山田教官や内務班長らに指摘される。藤井教官から「蓮本助教、見苦しいぞ、部下の所為にするな。責任は自分一人に歸すべきだ。それが日本人だ。山田教官殿。蓮本は日本的素養に缺けてゐたでせうか」と疑われる。国民学校時代の恩師であつた山田教官に向かつて、蓮本は「山田教官は何故黙つてゐるのか」と怖くなり、山田教官は彼を見下したまま、「何ともおもつてゐないよ」「それはどういふ意味でありますか」(p. 72-73)と言つた。蓮本は山田教官の短い言葉が不満であつた。不安であつた。もっと痛烈な言葉が欲しかつたのだ。結局、彼を被害妄想から救う人は山田教官である。

国民道場に勤めて、優れる国語を操る陳進録内務班長と蓮本助教にとって、自分が日本人と確信するが、彼らは「日本人になりたい」という努力は日本人によって評価されるしかない。改姓名した蓮本は、骨折りや苦勞を一向に耐えても、自分が「日本人である」ことを自分で確かめることができない。「日本人」という尊い身分は到底日本人が付与する権力を握っていると作者の周金波は描くのである。

「日本人的素養の啓培、禮儀の躰けに努力すべし」(p. 61) や「班の模範たるべき班長の癖に臺灣語使用をするやうな奴は斷然容赦ならぬぞ」(p. 55) などの言葉は、日本人の素質を提示される。蓮本にとって、これは遵守しなければならない規範であり、彼が日本人の身分を獲得する理由でもある。国語能力の高さと責任感を持つことは、彼の長所だと認められている。

しかし、皇民化運動と台湾人の戦争動員が、言語能力ではなく、「国家＝天皇」への忠誠といった精神性を評価軸に加えるようになった²⁵¹。例えば、以下の段落を見てみよう。

この前の會報で、室外に於ける宮城遙拜は軍隊と同じく、頭中の號令で遙拜するやうに言つたが、これは研究の結果、修練生は嚴密に言つて未だ皇軍の一員ではない、大元帥陛下直屬の兵隊ではない、この點ははつきり區別する必要があるので、従つて爾後の宮城遙拜は一般人と同じく最敬禮をもつて行ふことに改める。(p. 63)

藤井教官の言葉に示された皇軍の眞価が、皇軍の一員になる悦びにより大きい誇りを添えて胸をいっぱいにするのであつた。蓮本は、自分が「日本人」から排除されると感じるのである。つまり、道場内で「日本人」であることを証明するには、軍隊へ入るしかない²⁵²。

「勤行報国青年隊」「海兵团」「国民道場」などは、当局が台湾青年向けの軍事的施設であつた。1942年に台湾で陸軍特別志願兵制度が始まって、1945年に

²⁵¹ 和泉司「〈皇民文学〉における〈国語〉と軍事動員—周金波「助教」ノート—」『三田国文』(53)、慶應義塾大学国文学研究室、2011年6月、p. 64。

²⁵² 同上。

至り、徴兵制も開始した。徴兵制は国家権力による国民の身体の拘束であり、より直接的・暴力的な国民化である²⁵³。従って、戦争の本質は暴力の具象化である。しかし、「日本人として生きる」ことではなく「日本人として死ぬ」と台湾人に要求されるために、戦争を美化する任務は重要となった。

「助教」の冒頭で行軍の様子で物語がはじまる。軍士たちは台湾山脈とともに日出を迎える。作者はここできわめて美しい筆致で「皇軍＝神兵」のイメージを描出する。

（大陸戦線の錢家村攻略は少数の兵力で大部隊を攻撃殲滅した）拂曉戦であるが、勝敗は日の出のこの一瞬のうちに決るものである。拂曉戦は諸戦闘のうちでも一番美しい。また、たのしい。皇軍は神兵といはれる所以は一つに太陽共に行動するからであるが、おもへらは何時なんどきでもこの世界無類の大自負心を持たなければならぬ。(p. 32)

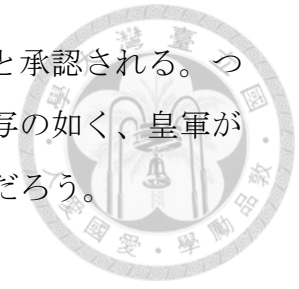
太陽とともに行動する皇軍は勝利の象徴に繋がっている。「太陽はまさしく天地の王者だ」(p. 31)とか、「世界ぢゆうに見えるやうな、大きな、大きな日章旗がへんぽんと揚つてゆく——。さういつた気持で心の中で掌を合せて拜むんだ」(p. 32)とか、「皇軍＝太陽＝日本」という連想を繰り返して強調される。戦争を美化し、軍隊の壮大な美を営み、さらにこの美しさはただ「皇軍」の中に存在していると確信される。このよう手法は、国家主義者の藤沢親雄が言った「日本国内は元々天皇中心の精神的結合によって強い国になった」「日本民族は世界一優越の地位に到達する」という概念と連結している。作者の周金波は日本人への誇りに憧れている姿勢が浮かび、日本人になりたい願いも現われる。「皇民」になれるかどうかは日本精神の有無によって決まるということであるが²⁵⁴、では「日本精神」は作者にとって何だろうか。

前も討論するように、日本人によって「日本人」かどうかという評価される過程は「民族差別」の状況に属されると考える。周金波は犠牲しなければ日本

²⁵³ 西川長夫『植民地主義の時代を生きて』、平凡社、2013年、p. 29。

²⁵⁴ 張修慎「日本の「近代の超克」思想と戦時下台湾知識人の諸相」、p. 20-21。

人と同じ平等な地位を得ないと言ひ、これは「日本精神」だと承認される。つまり、周金波が理解した「日本人の最終的境界」は、彼の描写の如く、皇軍が太陽の輝く光の下に放った皇軍の壯観の美と結びついているだろう。



4. 4 結び

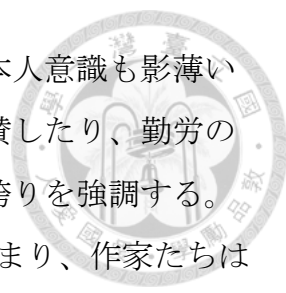
「政治・宗教・教育」という「三位一体」の領域で「天皇制」を築きあげる日本帝国政府はこれを以て植民地の「皇民化政策」の実行上に用いられる。この三つの方面で「天皇制」の権力を無限に拡大させて、台湾人を天皇の下に臣服して「皇民」になるという目標を目指した。「皇民化」という理念それ自体は、日本民族の「神聖」な起源に立脚し、卓越した優秀性を暗示してもいたのに、明らかに異なるイデオロギーであるアジア諸民族相互の兄弟愛と連帯を唱えたアジア主義と連結されることになった。こうしたイデオロギー上の矛盾は他のアジア諸民族にとっては一目瞭然であったが、最もそれに鈍感であったのは、聖なる使命を背負っているはずの東京の当局者であった²⁵⁵。

日本統治時代の「台湾意識」は、「台湾人／日本人」という民族的矛盾、および「被統治者／統治者」という階級的矛盾の二重の脈絡において形成され発展してきた。したがって、日本統治下の五十一年間の「台湾意識」は、民族意識であり、階級意識でもあり、両者が一体となったものであった²⁵⁶。「政治アイデンティティ」は国家政府の権力象徴として、植民地台湾の住民は日本帝国から押し付けられる「日本人意識」を吸収しなければいけない。「台湾人意識」の萌芽も開始する。台湾人が抱くアンビヴァレンスの主体性も「中国人／日本人」から「台湾人／日本人」に移行する。この時期に台湾人は自分の「文化アイデンティティ」を建立しようとする。台湾文壇の本島人文学者たちは新しい「台湾文化」を樹立し、内面的に「台湾人意識」を強められるが、もっと巨大な「日本人意識」と衝突した。その衝突の結果は『決戦台湾小説集』の中に伺われる。

張文環と呂赫若の作品は民族意識の色調を淡くして、普遍的なヒューマニズムの精神を賞賛する。龍瑛宗は、「作者不在」の形で自分の意志は作品の中に隠

²⁵⁵ マーク・ピーティ、浅野豊美訳『植民地 帝国50年の興亡』、p. 157-158。

²⁵⁶ 黄俊傑『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史変遷』、p. 33。



蔽する。作品は国策の理念を受けとる客体になったゆえ、日本人意識も影薄い存在になってしまう。楊逵は、社会に見下される労働者を絶賛したり、勤労の精神を憧れたりする。国策の要請を完成しながらも本島人の誇りを強調する。この四人の作家は、「外」に立って「皇民化」を取り扱う。つまり、作家たちは自分が「日本人」であることをあまり意識しなかったので、国家の制限のもとに、できる限りに自分の理念や意図を作品によって伝えられる。それに比べて、周金波は「内」に立って「皇民化」を処理する。何故かと言うと、民族の問題に悩ませる主人公を描き出される周金波は、日本人になれるかどうかをめぐって、さまざまな苦悩を写実的に示してくれる。日本人によって自分の身分を定義される現実には、台湾人にとって時代の悲しい性格が浮かべていった。

第五章 結論

それはすべての時世の中で最もよい時世でもあれば、すべての時世の中で最も悪い時世でもあった。戦争とは、こういうものだろう。一人一人は戦争に対する理解が異なり、一人一人は戦争を信仰するか否かも異なり、一人一人は戦争にもたらした時世に対して評価も異なる。ただし、結局最後まで一人一人は戦争という渦巻きに巻かれて免れないのである。

なぜ戦争期の文学作品を読み直す必要があるだろう。前の論述に、国策文学はすべての文学のジャンルでは価値があまり高くない。国策の要求を満足させるために形骸化してしまった物語の内容、あるいは政策を宣伝するために固定的な立場しか立たない状況は、国策文学自体が魅力を失われている理由である。

過ぎた時間は、歴史になってしまう。人間が残される記録は、歴史の経過だと思う。尹健次氏は、歴史と言うもの自体、過去の出来事のすべてではなく、現在の視点から必要と思われるものを主観的にピックアップし、一定の思考（基準）のもとに組み立てられて成立するものであると言う²⁵⁷。だから、戦争期のものを過去の流れから取り上げて、現代のわれわれの目で、われわれの考えで再び古い時代物を新しい観点で分析することは、そのものの歴史意義を探す旅ではないだろうか。

さて、新帝国主義時期から新たな帝国を建設した日本人の優越感は、列強に対する劣等感から生じたので、日中戦争、太平洋戦争を経て「大東亜共栄圏」までにその優越感がついに強化された。東アジアの融和を唱えながら、日本中心に基づいた思想で日本帝国が優先する矛盾な体制を樹立された。従って、日本の優越感が由来する「天皇」と「国語」という二つの要素は、「天皇制の帝国主義」の確立のために動かっていた。そして、その概念を継承しておる「皇民化運動」は、植民地台湾で民族意識の衝突の最高潮を迎えた。

尾崎秀樹氏は、「決戦下の台湾文学」を定義する。「昭和十五年一月『文芸台湾』の発刊から、敗戦までをさすことになろう。この五年間は、一口にいつてしまえば、個々の作家、あるいは集団がもっていたさまざまな個性とその可能性が、つみとられ押しつぶされ、ひとしなみに南進基地台湾の文化決戦体制へ

²⁵⁷ 尹健次『日本国民論—近代日本のアイデンティティ』、p. iv。

と統制・統合されてゆく過程の最後の段階にあたる」と書くのである²⁵⁸。

実は、戦時下における文学者が遭遇した問題は、文学性の壊滅だけではなく、もっとも厳しいのは民族意識の転向だと考えよう。戦争期に入って、単なるエキゾチズム、ロマンチズム、あるいはリアリズムをめぐって論争を起こすことより、台湾人のアイデンティティは有効的かつ迅速に「日本人」アイデンティティに移行するのは注目を集める。しかも、こういう変化の過程は文学者の内面的世界で滞留してはいけない、外側に展示しなければならないと要求された。統治者にとって、帝国と天皇への忠誠心を告白するのは最高の題材だと考えられる。

作品における三つのカテゴリでは、内地人が二篇、在台日本人が二篇、本島人が五篇、合計九つの小説・随筆を含まれる。「日本人」に造形させられた「台湾人」を中心に分析したいので、作者が創造してきた台湾人キャラクターは注目の焦点になっている。本論文は、作られた人物のイメージを「虚像」と見なして検討したい。一方、本島人作家たちは「台湾人キャラクター」を創造しているうちに、実は彼らは自身も時勢のもとに改造された運命を向かう「台湾人」であって、彼らのアイデンティティ意識は、作中人物に影響を与えるゆえ、彼らを「実像」に擬して分析の内容を補充したいと思う。つまり、創造される「虚像」は小説の主人公で表面的に登場するが、作品の裏に作者の意志を象徴する「実像」が隠される。

まず、「虚像」の場合で、「日本人化」の表現は二つに分けられる。一つは躰の良さ、高い国語能力や報国奉公などの性質を表現する「外見」であり、一つは精神世界に触れる「内面」だと設定される。九つの作品をこの基準で分類すれば、表(5-1)のように示される。

ジャンル	作家	作品
外見／肉体	内地人	台湾の息吹、台湾の旅
	本島人	雲の中、風頭水尾、若い海、増産の蔭に

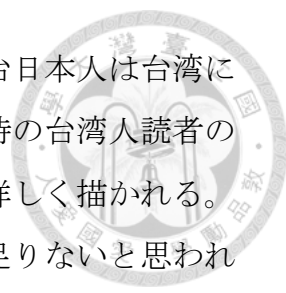
²⁵⁸ 尾崎秀樹『近代文学の傷痕—旧植民地文学論』、p. 105。

内面／精神	在台日本人	爐番、たゞかひの蔭に
	本島人	助教

表 (5-1)

「外見」を主として描かれるのは、丹羽文雄・佐多稲子・張文環・呂赫若・龍瑛宗・楊達である。国家の命令で台湾に來た中央文壇に活躍している丹羽文雄と佐多稲子は、この三種類の文学者の中に「指導者」の身分を持ち、地位がいちばん高いであった。日本の植民地、「大東亜共栄圏」の一部であった台湾の人や物事に、異国的、上位的な視線を注いでいるのは不思議ではない。日本人の優越感を持った丹羽文雄は、行儀正しさの勤行報国青年隊員から靈感を得て、肉体的鍛錬に基づいた改造方法を提出する。そして、佐多稲子の第一人称の作品において、「日本人に似てくる」本島人と先住民たちの姿が散見される。それに比べて、龍瑛宗の作品は小説の形であるが、「皇民化」される台湾人キャラクターを描写するとき、佐多稲子と類似している。二人は単なる日本人らしい人物を配列させて、皇民化に符合する行為（例えば、志願兵になること、国語を学ぶことなど）を列挙したりする。人物自身はなぜ「日本人になる」疑問を持たず、日本人になることは一つの義務として生活に滲んできた。そして、張文環、呂赫若と楊達の作品において登場するキャラクターはみな「増産戦士」と言えるが、「雲の中」の阿秀、「風頭水尾」の徐華と「増産の蔭に」の張君は、勇ましい勤労者というイメージがかなり強いのである。要するに、内地人の旅人は観察者の立場で作品を創作したので、テキストの中に作者の面影が隠している。その作品も相当に評論、国策宣伝の意味が深いと思う。本島人作家たちは改めて主人公を設定し、張、呂と龍は楊達のように「私」という「分身」を利用して作品の中に登場しないが、張と呂は主人公を借りて自分の理想を韜晦して伝える。

また、「内面」の場合では、「在台日本人」は民族の条件で「日本人」に属されるが、「内地人」の目の中に台湾に暮らしている彼らは台湾の異国文化を受けて、台湾に根ざして定着したはずであった。実は在台日本人は故郷の日本に対する執念が深かった。「良き日本人」として積極的に国策を呼応した理由はそれ



である。しかし、台湾に滞在時間が短い内地人に比べて、在台日本人は台湾に
いる時間が長く、土地や人間に馴染んでいる。濱田隼雄は当時の台湾人読者の
共感を呼び起こすために、労働現場の大変さと工員の疲労を詳しく描かれる。
主人公は「俺は日本人だ」と叫んだ場面は、説得力がすこし足りないと思われ
るが、物語の筋からみれば、主人公の意識が転換した結果である。そして、丸
井妙子の随筆集の中に、「高砂族」を全般的に「皇民像」に改造するが、表面的
な描写が多いである。しかし、丸井は無理矢理に「高砂族」の文化の内質を日
本文化に置き換え、一種の内面の侵入だと認める。つまり、丸井妙子が描いた
「高砂族」は本来のものではなくて、日本人化されたものだと言えよう。二人
は台湾に感情を持ち、台湾文化の認識もかなり深いと考えるが、国家の方針を
受け入れた結果として、現実を歪んだ効果も作品に反映する。そして、本島人
の周金波にとって、親しんでいる日本と自分を排斥する故郷の台湾との間にズ
レが存在する。日本人の身分を受けた周金波は、逆に他の本島人作家とは違っ
て、表面上の皇民化の描写より、台湾人が日本人になるときに遭遇した悩みを
繊細で描かれる。特に台湾人は自分で「日本人」であると決められない苦境を
目指した。目上の日本人しか「日本人アイデンティティ」を決める権力を持た
ない。自分の精神世界さえも把握できない圧力は作品の中に伺われる。

次に、「実像」の場合に、本島人作家の張文環・呂赫若・龍瑛宗・楊逵と周金
波をめぐって検討したい。前述のとおり、戦時下の台湾人は「政治アイデンテ
ィティ」と「文化アイデンティティ」の分裂に直面した。第四章のテキスト分
析で、楊はプロレタリア文学の洗礼を浴びた経験があるので、社会的問題に対
する熱意がときどき作品の中に映る。そして、龍瑛宗から「魅力ある作家」「散
文精神を体得した作家」と称えられる張文環は、台湾の文芸界のために奔走し、
自分も人道精神が溢れる小説を創作する。呂赫若は、楊逵の社会的使命と張文
環の現地的リアリズムを網羅しつつ、洗練された、高度に個人的な文学を生み
出す力があつたとフェイ・阮・クリーマン氏は賞賛する²⁵⁹。「政治アイデンテ
ィティ」の指向は日本帝国に他ならない戦争中にて、この三人の文学者はできる
限りに「文化アイデンティティ」＝台湾人の文化価値を保った。「台湾人意識」

²⁵⁹ フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本語文学』、p. 206。

を文化面に発揮した。一方、同じく文学に対する熱情も豊かな龍瑛宗は、哀しき浪漫主義者と自称する。文学の芸術性を追求する龍は当時の台湾文壇が鼓吹するリアリズムとの間に距離感があった。実際に龍の美しい芸術技法のうらに植民地民衆の無力と苦痛が隠されるが、作品自身は曖昧で解読にくいのである。また、矛盾を持ちつつ、故郷と日本のすき間に立った周金波は、台湾のあらゆる面に基づいた台湾文学を発展する企図がある。が、彼の「政治アイデンティティ」は往々にして「文化アイデンティティ」を圧倒した。例えば、「助教」の蓮本は「日本人になれない」ほどはなはだしく怖れる心理は、他の本島人作家にはあまり見えないではないかと推測できよう。龍瑛宗の場合、周金波のように国家と故郷との矛盾に陥られないが、自分の芸術趣味や政治に対する保守的態度により、彼は「政治アイデンティティ」と「文化アイデンティティ」のバランスを維持しようとする。そして、張文環、呂赫若と楊達は、この両者を平等的に位置づけ、互いに対抗する状態を保つ。

文学者が作られた「台湾人キャラクター」＝「虚像」と本島人作家を象徴する「台湾人」＝「実像」を検討してから、日本人に造形させられた「台湾人」のイメージは二種類があると考えられる。つまり「一般大衆」と「知識人層」に分けられる。「一般大衆」の組成は表(5-2)のようにまとめる。「知識人層」といえば、『台湾の息吹』で紋多が同情した「作家の周」、「増産の蔭に」の「私」と「助教」の蓮本がいる。

一般大衆	平民	本島人や高砂族の民衆
	増産戦士	農民・線路人夫・炭鉱の坑夫・アルミ工場の工員
	志願兵	勤行報国青年隊員・海兵団の水兵

表(5-2)

「一般大衆」のキャラクターは、常に「造形させられた」対象であることが観察できよう。彼らは表面化になりやすい作中人物である。それに比べて、「知識人層」はアイデンティティ認識問題を遭遇すると複雑性が現われる。金艾琳氏は、植民地における少数派のエリートが言語力を持つが、一般民衆が言語を使

用する権力を持っていないと指摘する²⁶⁰。つまり、言語力を持つ知識人は物事を解釈する力を手に入れる。言語力を持たない人たちは自分の考えや思いを述べるチャンスがないので、植民地時代の文学を解説するときに、読者が理解する当時の人間の姿は、実に「文学者」という媒介を経由するものである。それゆえ、過去の歴史を分析するために、多元化の視点をとるほうが適当だと思う。

植民地に基づいた権力は、人を活かす (faire) と人に死なせる (laisser) という二種類を含まれる「生命権力」だと言われる²⁶¹。人を「造形」することは、実は人間の自由意志と自主性への破壊だと見なすべきだろう。文学者が作中人物を支配することは、ある程度で言えば、国家が文学者を支配することと同じだと考える。人間は雑草のように逞しいと言っても、戦争でもたらした人間の悲哀は、現在のわれわれにとって遥かな記憶であっても、歴史の理解によって、正義という価値を再び追求される過程の中に、過去の人々と現在の人との繋がりも明らかになった。

²⁶⁰ 金艾琳「戦争景観 (spectacle) 與戦場実感的動力学：中日戦争時期帝国對大陸的統治與生命政治或者對朝鮮和朝鮮人的配置」『戦争與分界：「総力戦」下臺灣・韓国的主体重塑與文化政治』、韓国台湾比較文化研究會、聯經出版、2011年、p. 39。

²⁶¹ 車承棋「搖籃的帝国、後殖民的文化政治学：皇民化的技術及其悖論」『戦争與分界：「総力戦」下臺灣・韓国的主体重塑與文化政治』、韓国台湾比較文化研究會、聯經出版、2011年、p. 109。

参考文献




一、テキスト

1. 丹羽文雄『台湾の息吹』『日本統治期台湾文学：日本人作家作品集別巻』、緑蔭書房、1998年
2. 佐多稲子『台湾の旅』『日本統治期台湾文学：日本人作家作品集別巻』、緑蔭書房、1998年
3. 『決戦台湾小説集 乾之巻・坤之巻』、ゆまに書房、2000年
4. 丸井妙子『たゝかひの蔭に』『台湾随筆集三』、緑蔭書房、2003年

二、専門著作（日本語）

1. 竹内清『事変と台湾人』、日滿新興文化協会、1940年三版
2. 宮本百合子『文学の進路』、高山書院、1941年
3. 吉田精一『日本の文学7 市民の文学〈第2〉』、至文堂、1967年
4. 井上清『日本帝国主義の形成』、岩波書店、1974年
5. 平野謙『昭和文学史』、筑摩書房、1975年
6. 鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗4』、日本評論社、1982年
7. 江口圭一『十五年戦争小史』、青木書店、1988年
8. 磯田光一ら編『昭和文学全集』、小学館、1990年
9. 尾崎秀樹『近代文学の傷痕—旧植民地文学論』、岩波書店、1991年
10. 市古貞次ら編『増訂版日本文学全史6 現代』、學燈社、1994年
11. 桜本富雄『日本文学報国会—大東亜戦争下の文学者たち』、青木書店、1995年
12. 小熊英二『単一民族神話の起源 —〈日本人〉の自画像の系譜』、新曜社、1995年
13. マーク・ピーティ著・浅野豊美訳『植民地：帝国50年の興亡』、読売新聞社、1996年
14. 尹健次『日本国民論—近代日本のアイデンティティ』、筑摩書房、1997年
15. 周金波『周金波日本語作品集』、緑蔭書房、1998年

- 
16. 松尾章一『近代天皇制国家と民衆・アジア』上、法政大学出版局、1998年
 17. 松尾章一『近代天皇制国家と民衆・アジア』下、法政大学出版局、1998年
 18. 岡本幸治編『近代日本のアジア観』、ミネルヴァ書房、1999年
 19. 中島利郎・吉原丈司編『鷲巢敦哉著作集3—台湾保甲皇民化読本』、緑蔭書房、2000年
 20. 鈴木正幸『国民国家と天皇制』、校倉書房、2000年
 21. 井手勇『決戦時期台湾の日本人作家と皇民文学』、台南市立図書館、2001年
 22. 若林正丈『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』、筑摩書房、2001年
 23. 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』、岩波書店、2002年
 24. 小熊英二『〈日本人〉の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮：植民地支配から復帰運動まで』、新曜社、2003年
 25. 富山一郎『増補 戦争の記憶』、日本経済評論社、2006年
 26. フェイ・阮・クリーマン著、林ゆう子訳『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本語文学』、慶応義塾大学出版会、2007年
 27. 黄俊傑著、臼井進訳『台湾意識と台湾文化—台湾におけるアイデンティティの歴史変遷』、東方書店、2008年
 28. 尹健次『民族幻想の蹉跎—日本人の自己像』、岩波書店、2011年
 29. 西川長夫『植民地主義の時代を生きて』、平凡社、2013年
 30. 横地啓子『抵抗のメタファー—植民地台湾戦争期の文学』、東洋思想研究所、2013年

三、専門著作（中国語）

1. 朱家慧『兩個太陽下的台灣作家—龍瑛宗與呂赫若研究』、台南市立芸術中心、2000年
2. 王建國『呂赫若小説研究與詮釋』、台南市立図書館、2002年
3. 南博著、邱 璦 雯訳『日本人論：從明治維新到現代』、紅螞蟻図書、2003年
4. 王徳威『歴史與怪獸：歴史、暴力、敘事』、麦田出版、2004年
5. 荊子馨『成為日本人：殖民地台灣與認同政治』、麦田出版、2006年
6. 松尾直太『濱田隼雄研究—文学創作於臺灣（1940-1945）』、台南市立図書館、



2007 年

7. 朱惠足『「現代」的移植與翻譯：日治時期台灣小說的後殖民思考』、麦田出版、

2009 年

8. 陳芳明『台灣新文學史』、聯經出版、2011 年

9. 李文卿『帝國想像—戰爭時期的台灣新文學』、国立台湾文学館、2012 年

10. 游勝冠『殖民主義與文化抗争—日據時期台灣解殖文學』、群学出版、2012 年

11. 王惠珍『戰鼓聲中的殖民地書寫—作家龍瑛宗的文學軌跡』、國立臺灣大學、

2014 年

四、論文（日本語）

1. 中西吉治「国家改造運動—民衆觀と改造運動觀—」『近代日本の統合と抵抗 4』、日本評論社、1982 年

2. 由井正臣「総動員体制の確立と崩壊」『近代日本の統合と抵抗 4』、日本評論社、1982 年

3. 長谷川泉「「戦時下の文学」の構図」『国文学 解釈と鑑賞』48(11)、至文堂、1983 年 3 月

4. 都築久義「国策文学について」『国文学 解釈と鑑賞』48(11)、至文堂、1983 年 3 月

5. 山本有造「日本における植民地統治思想の展開(2)—「六三問題」・「日韓併合」・「文化政治」・「皇民化政策」—」『アジア経済』32(2)、日本貿易振興機構アジア経済研究所研究支援部、1991 年 2 月

6. ダグラス・L・フィックス「徴用作家たちの「戦争協力物語」—決戦期の台湾文学」『よみがえる台湾文学：日本統治期の作家と作品』、東方書店、1995 年

7. 井手勇「〈皇民文学〉という言葉の意味について」『天理インターカルチャー研究所研究論叢』9 号、天理インターカルチャー研究所、2000 年 3 月

8. 伊藤幹彦「日本植民地時代の皇民化運動——台湾の思想状況を中心に——」『アジア文化：総合文化誌—特集 1 アジアと日本(2)』アジア文化総合研究所出版会、2000 年

9. 中島利郎「日本統治末期の台湾文学—台湾総督府情報課編『決戦台湾小説集

乾之卷・坤之卷』の刊行」『岐阜聖徳学院大学紀要 41 巻』、岐阜聖徳学院大学、2002 年

10. 張修慎「日本の「近代の超克」思想と戦時下台湾知識人の諸相」『台大日本語研究 11』、台湾大学出版委員会、2006 年 6 月

11. 佐多稲子「戦時下のこと」日本近代史研究会編『太平洋戦争の時代：写真記録』、日本図書センター、2010 年

12. 和泉司「〈皇民文学〉における〈国語〉と軍事動員一周金波「助教」ノート一」『三田国文』(53)、慶應義塾大学国文学研究室、2011 年 6 月

13. 張修慎「1940 年代における台湾の「郷土意識」と柳宗悦：『民俗台湾』と『月刊民芸・民芸』を通じて」、東亜人物移動と文化的多様性国際シンポジウム、台湾大学日本語学科、2011 年 6 月

14. 廖秀娟「丹羽文雄「台湾の息吹」論」『解釋』一・二月号、2012 年 2 月

五、論文（中国語）

1. 柳書琴『戦争與文壇一日據末期台灣的文學活動（1937.7-1945.8）』、国立台湾大学歴史研究所修士論文、1994 年

2. 李國生『戦争與台灣人：殖民政府對台灣的軍事人力動員（1937～1945）』國立臺灣大學歷史學研究所碩士所論文、1997 年

3. 王世宗「新帝國主義與新世界文明」『台湾殖民地史學術研討會論文集』、海峡學術出版社、2004 年


4. 蔡錦堂「再論〈皇民化運動〉」『淡江史学』18、2007 年 9 月

5. 崔末順「戦争期台湾文学の審美化傾向及其意義」『台湾文学研究学報』13、国立台湾文学館、2011 年 10 月

6. 林載爵「臺灣文學的兩種精神—楊逵與鍾理和之比較」『臺灣現當代作家研究資料彙編 4 楊逵』國立台灣文學館、2011 年


7. 「張文環小傳」『臺灣現當代作家研究資料彙編 6 張文環』國立台灣文學館、2011 年

8. 許俊雅「冷筆寫熱腸—論呂赫若的小説（節録）」『臺灣現當代作家研究資料彙編 10 呂赫若』國立台灣文學館、2011 年

- 
9. 陳偉智「戦争、文化與世界史：從吳新榮「獻給決戰」一詩探討新時間空間化的論述系譜」『戦争與分界：「総力戦」下臺灣・韓国の主体重塑與文化政治』韓国台湾比較文化研究會、聯經出版、2011年
 10. 金艾琳「戦争景觀 (spectacle) 與戰場実感的動力学：中日戦争時期帝国對大陸的統治與生命政治或者對朝鮮和朝鮮人的配置」『戦争與分界：「総力戦」下臺灣・韓国の主体重塑與文化政治』、聯經出版、2011年
 11. 車承棋「搖墜的帝国、後殖民的文化政治学：皇民化的技術及其悖論」『戦争與分界：「総力戦」下臺灣・韓国の主体重塑與文化政治』、韓国台湾比較文化研究會、聯經出版、2011年
 12. 陳培豐「由「同文」的邊界移動來看台灣文學的特性：日治時期的新文學・鄉土文學・皇民文學・興亞文學」『東亞文學的実像與虚像』、聯經出版、2013年
 13. 許麗芳「殖民時空下的多重視角—佐多稻子〈台灣之旅〉(1943-1944)的台灣書寫」、『興大人文學報』53、2014年9月

六、雜誌・新聞

1. 龍瑛宗「若き臺灣文學のために」『台湾新文学』2-5、1937年6月15日。『龍瑛宗全集〔日本語版〕第四冊評論集』、国立台湾文学館、2008年
2. 龍瑛宗「「文藝台湾」作家論」『文芸台湾』1-5、1940年10月1日。陳萬益編『龍瑛宗全集〔日本語版〕第四冊評論集』、国立台湾文学館、2008年
3. 「昭和十五年度の臺灣文壇を顧みて」『台湾芸術』1-9、1940年11月。『日本統治期台湾文学文芸評論集 第三卷』綠蔭書房、2001年
4. 龍瑛宗「作家について」『台湾芸術』2-1、1941年1月1日。陳萬益編『龍瑛宗全集〔日本語版〕第四冊評論集』、国立台湾文学館、2008年
5. 龍瑛宗「台湾文学の展望」『大阪朝日新聞』大阪、1941年1月。陳萬益編『龍瑛宗全集〔日本語版〕第四冊評論集』、国立台湾文学館、2008年
6. 呂赫若「想ふまゝに」『台湾文學』1-1、1941年5月。『日本統治期台湾文学文芸評論集 第三卷』、綠蔭書房、2001年
7. 黃得時「臺灣文壇建設論」『台湾文学』1-2、1941年9月。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四卷』、綠蔭書房、2001年

- 
8. 王碧蕉「台湾文学考」『台湾文学』2-1、1942年2月。『日本統治期台湾文学文芸評論集 第四卷』、緑蔭書房、2001年
 9. 龍瑛宗「南方の作家たち」『文芸台湾』3-6、1942年3月20日。陳萬益編『龍瑛宗全集 [日本語版] 第四冊評論集』、国立台湾文学館、2008年
 10. 打木村治「外地文學私考」『文芸台湾』3-6、1942年3月。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四卷』、緑蔭書房、2001年
 11. 龍瑛宗「皇軍に感謝」(大東亜文学者大会速記抄)『文芸台湾』5-3、1942年12月。『日本統治期台湾文学 文芸評論集 第四卷』緑蔭書房、2001年
 12. 周金波「台湾文学のこと」『台湾日日新報』、1942年12月6日。
 13. 西川満「日本語の普及」(大東亜文学者大会速記抄)『文芸台湾』5-3、1942年12月。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四卷』、緑蔭書房、2001年
 14. 濱田隼雄「大東亜文學者大會の成果」『台湾文学』3-1、1943年1月。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四卷』、緑蔭書房、2001年
 15. 張文環「内地より歸りて」『台湾文學』3-1、1943年1月。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四卷』、緑蔭書房、2001年
 16. 「中村哲氏・龍瑛宗氏対談会」『台湾芸術』4-2、1943年2月。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第四卷』、緑蔭書房、2001年
 17. 張文環「私の文學する心」『台湾時報』1943年9月15日。
 18. 「臺灣決戦文學會議の記」『台湾文学』4-1、1943年12月。『日本統治期台湾文學文芸評論集 第五卷』、緑蔭書房、2001年
 19. 濱田隼雄「本島文學革新に期待」『文芸台湾』終刊号、1944年1月。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第五卷』、緑蔭書房、2001年
 20. 呂赫若「一協和音にでも」『台湾文芸』(台湾文学奉公会)1-2、1944年6月。『日本統治期台湾文学 文芸評論集 第五卷』緑蔭書房、2001年
 21. 「作家派遣について」『台湾文芸』1-4、1944年8月。『日本統治期台湾文學文芸評論集 第五卷』、緑蔭書房、2001年
 22. 濱田隼雄「工場の鬨魂」『台湾文芸』(台湾文学奉公会)1-4、1944年8月。『日本統治期台湾文学・文芸評論集 第五卷』、緑蔭書房、2001年
 23. 龍瑛宗「戦時下の文學」『台湾文芸』(台湾文学奉公会)1-4、1944年8月。

- 『日本統治期台湾文学 文芸評論集 第五卷』緑蔭書房、2001年
24. 楊逵「勤勞禮讚」『台湾文芸』（台湾文学奉公会）1-4、1944年8月。『日本統治期台湾文学 文芸評論集 第五卷』緑蔭書房、2001年
25. 張文環「増産戦線」『台湾文芸』（台湾文学奉公会）1-4、1944年8月。『日本統治期台湾文学 文芸評論集 第五卷』緑蔭書房、2001年

七、その他

1. 百瀬孝著、伊藤隆監修『事典 昭和戦前期の日本：制度と事態』、吉川弘文館、1990年
2. 中島利郎編・著『日本統治期台湾文学小事典』、緑蔭書房、2005年